

小松市内遺跡発掘調査報告書 V

矢田野遺跡
千代才オキダ遺跡
波佐谷城跡

2009. 3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 確認調査及び発掘調査、出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金事業により実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財並びに、調査地、調査原因、調査面積、調査期間、調査担当は次のとおりである。

【矢田野遺跡】

- 《調査地》 小松市矢田野町
《調査原因》 工場増設（零細企業）
《調査面積》 594.16m²
《調査期間》 2005.10.4～2006.1.17
《調査担当》 宮田明・西田由美子・廣田
いずみ

【千代オオキダ遺跡】

- 《調査地》 小松市千代町
《調査原因》 個人住宅建設
《調査面積》 69m²
《調査期間》 2006.11.9～2006.11.13
《調査担当》 宮田明・川畑謙二

【波佐谷城跡】

- 《調査地》 小松市波佐谷町
《調査原因》 重要遺跡詳細分布調査
《調査面積》 約70,000m²
《調査期間》 2002.12.20～2003.3.24
2003.10.20～2004.3.26
《調査担当》 川畑謙二

4. 発掘調査及び確認調査は、(社)小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部臨時作業員も補助員として雇用了。遺構の実測は、各担当者が行った。
5. 出土品整理及び報告書作成は、平成20年度事業として臨時作業員を雇用し、川畑・大橋が担当した。また、遺構図のトレースについて、臨時職員立原真理の協力を受けた。
6. 写真撮影については、遺構は各調査担当者が、遺物は各執筆担当者が実施した。

7. 本書の執筆担当は、目次に明記してある。編集については、川畑が担当した。
8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
9. 現地調査から報告書刊行に至るまでには、下記の機関・個人等の協力を賜った。記して謝意を表する。

株式会社ショーハツ、有限会社大誠工務店、波佐谷町町内会、金沢市埋蔵文化財センター、上原真人、岡崎晋明、久保智康、滝川重徳、田村昌宏、宮下幸夫、向井裕知

凡 例

1. 本書に示す座標は、第Ⅱ章・第Ⅲ章は世界測地系（Ⅶ系）に準拠している。第Ⅳ章は、日本測地系（Ⅶ系）である。
2. 本書で示す方位は、全て座標北である。水準高は海拔高（T.P）で示している。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

目 次

例言・凡例	
第Ⅰ章 位置と環境（川畑）	1
第Ⅱ章 矢田野遺跡発掘調査（大橋）	11
第Ⅲ章 千代オオキダ遺跡発掘調査（川畑）	51
第Ⅳ章 波佐谷城跡確認調査（川畑）	64
写真図版	1～6
報告書抄録	

第 I 章 位置と環境

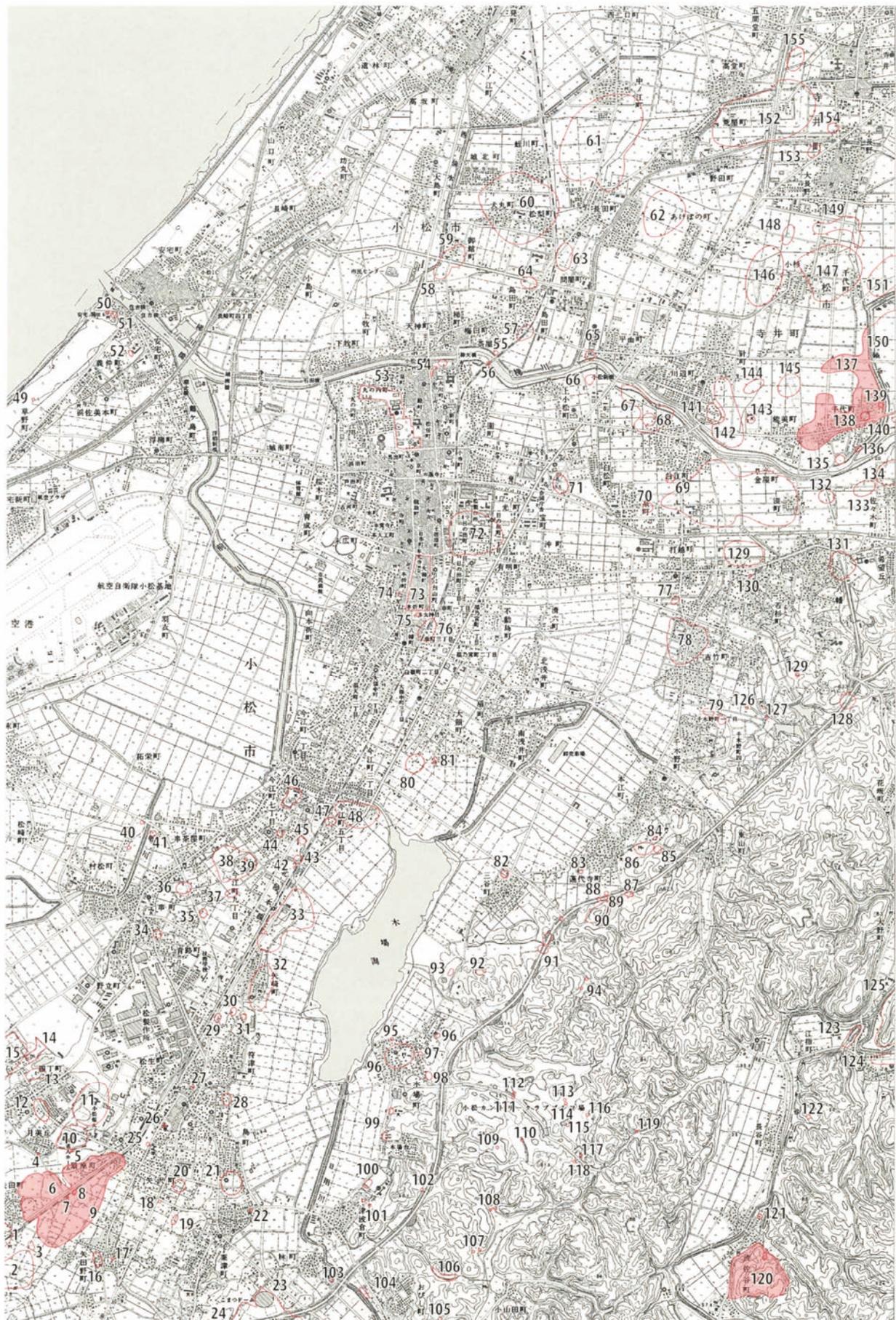
第 1 節 位置及び地理的環境

小松市は石川県南西部位置し、昭和15年に旧小松町をはじめとする2町6か村が合併してできた、現在、人口約11万人を擁する県下第3の都市である。東縁部・北縁部は白山市・能美市、西縁部は加賀市や日本海、南縁部は大日山（標高1368m）で福井県勝山市と接しており、面積371.13km²の広大な市域を有している。地形は大きく北西部の砂丘・平野と、市域の大部分を占める南東部の丘陵地・山地に分かれる。市街地は沖積平野に形成されている。水系は、全長約42km、流域面積271km²を測る梯川水系である。梯川は白山山系の大日連峰を源に発し、西俣川、大杉谷川、郷谷川、滓上川、鍋谷川、八丁川などが合流して安宅町において日本海に注いでいる。上流域では河岸段丘地帯を形成し、中下流域では潟埋積平野である小松・江沼平野が形成されている。東には能美丘陵とその背後の能美山地

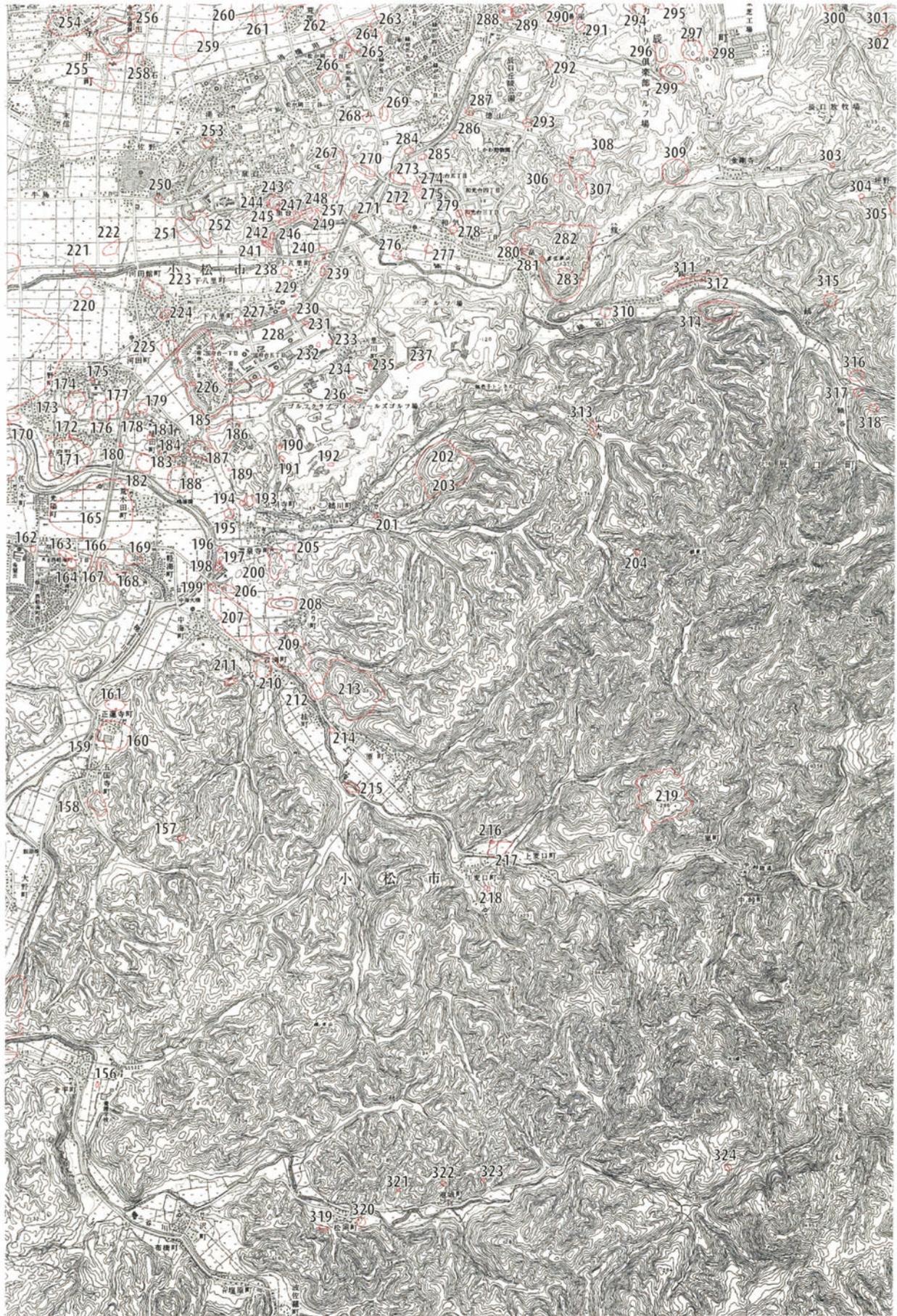


第1図 小松市の位置

が存在し、南に小松東部丘陵が連なっており、最奥部に白山を遠望することができる。その秀麗な容姿は現在まで変わることはなく、古代・中世期を通じて信仰と対象となっている。ただ、里からは空が澄渡った好条件でしか見ることはできないため、信仰の山として中山地帯の北方寄りに位置する観音山（標高402.5m）の存在が目される（註1）。特に、梯川中流域では、河川の合流地点が多く蛇行した流路をもつことから、水害の多い地域でもあった。故に、背後に肥沃な後背湿地を抱える結果となり、古来より農業の盛んな地域となっている。このことは、遺跡が長期に渡って広範囲に分布する要因の一つであるといえる。また、下流域の下牧町では昭和初期頃までは各家で小舟を所有していたそうであり、古来より舟が重要な交通手段だったことが言えよう。梯川を媒介とし安宅港及び日本海とも繋がっており、水運による物資の交流があった。千代オオキダ遺跡や佐々木遺跡、漆町遺跡等の中流域の調査で、河道や自然流路の跡がよく検出されている。この地域に暮らした人々は、これら旧河道を生活用水や灌漑用水として利用してきたものと推察され、旧河道の間の微高地上に集落が形成されていた景観が復元される。一方で西部に位置する月津台地も遺跡が多く存在する区域である。台地は、丘陵部から北にせり出すかたちで形成された標高平均5～10mの中位段丘である。三方を砂丘の移動によって形成された加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）に囲まれており、周辺に津の付く地名も多い。処々に小山も存在していたようであるが、商工業開発・宅地化により多くが失われている。また、加賀三湖についても、今江潟の全域及び柴山潟の約3分の2が干拓されており、大きく景観を変えている。



第2図 遺跡分布図



第 2 節 歴史的環境

1. 旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代から認められる。灯台笹遺跡（図郭外）や八里向山遺跡群（246～249）・河田山遺跡（226）などが確認されており、高位段丘上に立地している。縄文時代には、梯川左岸では軽海西方寺遺跡（166）で、縄文時代前期後葉の土器片が見つまっている。縄文時代中期前葉～中葉の麦口遺跡（217）、中期前葉～後葉の中海遺跡（209）が確認される。右岸地域でも、八里向山遺跡群（246～248）、里川D遺跡（192）、河田館遺跡（223）、宮谷寺屋敷遺跡（184）、南野台遺跡（171）など縄文中期を中心とする遺跡が確認されている。これらは丘陵縁辺部の平坦地に立地している。縄文時代後期後葉には平野部への遺跡の進出が認められており、千代オオキダ遺跡（137）や大長野A遺跡（146）、牛島ウハシ遺跡（151）等がみられる。丘陵内陸部では、谷部の平坦地に六橋遺跡（124）があり縄文早期、中期～晩期の遺跡が確認されている。

一方、月津台地では、旧石器時代は石器が数点出土しているのみで、遺跡は不明瞭である。縄文時代では中期の念仏林遺跡（11）や今江五丁目遺跡（45）等の短期間小集落の調査例がある。当時、加賀三湖は入江であった可能性が高く、前述の遺跡でも、石錘等漁労関係の遺物が出土している。また、入江に面した所には、柴山貝塚（図郭外）や五郎座貝塚（48）といった「貝塚」と名の付く遺跡も存在する。特に、木場潟周辺の他の時代の遺跡調査においても、縄文時代の遺物は必ずと言ってよいほど出土しており、現在遺跡地図上で記されている以上に、人々の動きがあったものと推察される。

2. 弥生時代

弥生時代は、前期の遺跡は木場潟・今江潟・柴山潟の三湖周辺地区に、中期の遺跡は八日市地方遺跡（72）を拠点集落とする、松梨遺跡（60）、梯川鉄橋遺跡（56）、白江梯川遺跡（67）、銭畑遺跡（58）など梯川下流域の低湿地帯に分布中心が移っている。弥生時代後期以降は、梯川流域で遺跡数が増加し広範囲に分布が認められる時期となる。梯川左岸では漆町遺跡（69）をはじめ、白江梯川遺跡、佐々木ノテウラ遺跡（133）、佐々木アサバタケ（134）遺跡がある。特に漆町遺跡では計画性を持つ溝や掘立柱建物跡が検出されている。右岸では一針C遺跡（141）や千代オオキダ遺跡などが挙げられる。一針C遺跡では後期前半の青銅器鑄造用鑄型が出土している。一方、千代オオキダ遺跡では、旧河道への土器の大量廃棄跡が検出されているが、住居跡は検出されておらず、土器廃棄の主体となった集落は別の地点に存在しているものと考えられる。これらの遺跡は、梯川兩岸の自然堤防上に立地している。弥生時代終末期には、八里向山A遺跡（243）や河田山遺跡のような高地性集落も営まれている。

3. 古墳時代

古墳時代には、能美丘陵から小松東部丘陵にかけて、丘陵先端部に多くの古墳が築造されるようになる。能美丘陵では、和田山（256）・末寺山・寺井山（254）・秋常山・西山の独立丘陵に、約60基からなる能美古墳群を形成している。全長110mを測る県内最大の前方後円墳である秋常山1号墳（図郭外）を含み、能美首長の古墳群の中核をなす。また、これら古墳群に先行する月影期（漆町編年3・4群）の墳墓が検出されており、千代オオキダ遺跡を含む、梯川流域の遺跡群との係わりも指摘されている。小松東部丘陵には河田山古墳群（226）があり、総数61基からなる大古墳群である。形態は、前方後円墳・円墳・方墳・前方後方墳があり、特に12号墳は、アーチ状の天井をした切石積横穴式石室を持つ方墳で、類例のない終末期古墳である。また、近年立明寺古墳（193）の確認により、中期古墳の南限が下がるなど、新たな知見が得られている。

月津台地では、三湖台古墳群と称される小規模円墳を主体とする後期古墳群が形成される。江沼古墳群の一群と考えられ、白のほぞ古墳(14)や御幸塚古墳(44)などの中規模前方後円墳もみられる。埴輪を伴うのが特徴で、特に矢田野エジリ古墳(25)では、多数の人物・形象埴輪が出土している。矢田借屋古墳群(6)は、3基の前方後円墳と14基の円墳で構成される古墳群で、三湖台古墳群において唯一群集形態をなす古墳群である。矢田借屋古墳群では、いわゆる「木芯粘土室」の埋葬施設が多いことが特徴であるが、能美古墳群内でも埴田後山明神3号墳(187)やブッシュウジヤマ1号墳(199)などで検出されており、共通の埋葬施設を有している。

古墳以外では、千代・能美遺跡(145)が注目される。古墳時代前期(3世紀後半～4世紀前半)の首長クラスの居館と考えられており、出土した装飾木製品の文様から畿内との繋がりも指摘されている。前述の古墳群における造墓主体とも考えられており、梯川流域の集落群の中でも特に注目される存在となっている。このように丘陵部の古墳との関係が注目されているなかで、千代オオキダ遺跡の調査において、漆町編年5～8群の方墳が検出されており、梯川右岸平野部において墓域を持つ首長層の存在が浮かびあがってきた。その他、漆町編年10～13群(4世紀後葉～5世紀後半頃)の集落跡が荒木田遺跡(165)で検出されている。

この古墳時代前期に隆盛した集落群も、この時期を境に縮小傾向となるようで、6世紀後半を境に殆ど見られなくなる。ただし、丘陵部における造墓はおこなわれていることから、集落のあり方が大きく変動した時期といえよう。

4. 古代

月津台地上では、7世紀に入ると念仏林南遺跡(10)、額見町遺跡(15)、矢田野遺跡(9)、薬師遺跡(33)などの集落が成立する。特に、念仏林南遺跡を除く3遺跡では、L字型カマドを設置した竪穴住居跡が検出されており、渡来系移民の存在が注目されている。彼らは、対岸の丘陵部に分布する製陶・製鉄遺跡群の動向に関与していると考えられている。L字型カマドの検出例はないが、製陶・製鉄関連遺物が出土している島遺跡(21)等も同種の集落と考えられ、台地上に広く分布することが判明している。

製陶遺跡については、既に前代の6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(図郭外)の生産が確認されている。以後、10世紀中頃まで位置を変えながら生産を継続しており、大規模生産地である「南加賀古窯跡群」を形成している。これまで、9世紀後半～10世紀前半ころの瓦生産が加賀立国及び国分寺整備に関連して注目されていた。しかし、近年の二ツ梨豆岡向山古窯跡群(図郭外)の調査において、8世紀初頭の窯跡から焼台に転用された鴟尾片が出土しており、少なくともそれ以前の時期に近隣の窯で焼かれたことが想定される。瓦は出土していないが、寺院の屋根の装飾に係るものを作っていたことは重要であり、江沼平野に存在した寺院との関係が示唆される。製鉄遺跡に関しては、調査例は少ないが、林遺跡(23)(8世紀中頃、9世紀～12世紀前半)や戸津シンプザワ遺跡(図郭外)(10世紀前半)の調査例がある。その分布域はやや製陶遺跡群と異なっており、木場、蓮代寺地区の丘陵部にまで広がっている。また、時期不詳ではあるが、長谷地区にも製鉄遺跡の分布が認められる。

能美丘陵でも7世紀代には須恵器生産が開始されている。律令国家整備段階の当該地域の集落遺跡動向は、前代に引き続きあまり活発ではないが、軽海遺跡(163)、古府シノマチ遺跡(150)、佐々木ノテウラ遺跡で、7世紀代の遺跡が確認されている。佐々木ノテウラ遺跡では、7世紀前半～8世紀前半の掘立柱建物跡や倉庫跡が検出されている。千代オオキダ遺跡では、鍋谷川右岸に近い地区で7世紀後半代の掘立柱建物が検出されているが、バイパス調査区では7世紀後半でも末期に近いころから遺跡が確認され始める。同時期の遺物として、律令的祭祀遺物である土馬がまとまって出土してい

る。また、同時期の能美窯産の瓦が数点ではあるが出土しており、十九堂山遺跡につき二例目の出土である。出土瓦には軒丸瓦が含まれており、鳥坂寺系の重弁蓮華文が施されており、畿内系瓦との関連が注目されるものである（註2）。十九堂山遺跡（174）は、後の国分寺及びその前身の勝興寺跡とも考えられ、対岸の佐々木遺跡（132）では、8世紀末頃の「財部寺」と記された墨書土器が出土しており、両者との関係が示唆される。また、7世紀後半～8世紀初頭の瓦陶兼業窯が立明寺で発見されており、白鳳期の瓦を生産している。その胎土が十九堂山遺跡出土瓦と近似しており、供給先であった可能性がでてきている。

8世紀代に入ると、佐々木遺跡において、柵と塀に囲まれた区画の中に整然と立ち並ぶ掘立柱建物群が出現する。時期は8世紀中頃を中心とする短期間であり、「野身郷」と記された墨書土器が出土し、律令的要素が強い県内最大級の横板組の井戸も検出されたことから、古代野身郷に関連した公的施設と考えられている。千代オオキダ遺跡でも、ほぼ同時期の横板組の井戸と建物跡が検出されている。荒木田遺跡では、8世紀初頭～9世紀中頃までの掘立柱建物群が検出されている。墨書土器による祭祀が行われた水場遺構も検出されている。この時期の集落は、律令的色彩を帯びていることが特徴である。弘仁14年（823年）に、越前国から加賀郡と江沼郡の2郡が分立し、加賀国となった。程なくして、江沼郡より能美郡が、加賀郡より石川郡が分出した。立国当初の国府の所在地については諸説あるが、千代オオキダ遺跡東方国府地区の台地上が有力視されている。国衙等の施設はやや遅れた9世紀中頃から整備されたという意見もあり、その視点に立てば、当該地域の集落遺跡が活性化する時期と合致する。先述の佐々木ノテウラ遺跡・古府シノマチ遺跡に加え、古府遺跡（140）・漆町遺跡・佐々木遺跡等があり、再び梯川の自然堤防上に集落が多く形成されている。漆町遺跡からは10世紀前半代の「庄」と記された墨書土器も出土しており、荘園開発が行われた可能性も指摘されている。この時期の集落は断続的ではあるが、12世紀までは維持される。ただし、多くの集落が、10世紀の後半段階に衰退傾向といわれ、集落再編の様相が見える。ただし、千代オオキダ遺跡のように衰退化とはいえない様相もある。梯川中流域の遺跡は広大な範囲を持つものが多いこともあり、10世紀後半代は衰退傾向というよりは、遺跡範囲内で場所を変えたとみるべきではないだろうか。

一方で、丘陵地には、8世紀前半以降に山林寺院が成立する。里に程近い丘陵の、やや奥まった所に立地する特徴を持つ。松谷寺跡から2間×4間の礎石建物が検出され、北陸最古とされる山林寺院の存在が明らかになった。八里向山B遺跡（246）の9世紀前葉に次いで里川E遺跡（191）、浄水寺遺跡（128）が成立する。前二者は成立後約半世紀で廃絶するのに対して、後者は寺院規模を拡大し、中世へと存続している。9世紀後葉～10世紀前半にかけては、大溝への墨書土器の多量廃棄が行われ、中国製磁器や国産施釉陶器を持つなど隆盛期を迎えていた。「浄水寺」は雨乞い信仰との関わりが考えられており、国分寺の成立事情が承和年間（834～848年）に起こった大旱魃による飢饉にあるため、両者の関係性が指摘され、隆盛の大きな要因であったことが推測される。国府は、内部施設には変化があったことは考えられるが、「平家物語」や「源平盛衰記」の加賀国守日代と白山中宮八院衆徒らとの対立抗争である安元事件の記載により、12世紀末頃までは確実に存在していることがわかる。

5. 中世

中世においても、当該地域では活発な集落の動きがみられる。12世紀代には白江梯川遺跡・佐々木ノテウラ遺跡・荒木田遺跡・漆町遺跡（白江ネンブツドウ（東）地区、白江チョウジャワリ地区、金屋ヤシキダ地区、金屋サンバワリ地区）が見られる。荒木田遺跡は14世紀前半頃までの、漆町遺跡は金屋サンバワリ地区を除き14世紀後半まで継続する集落である。佐々木ノテウラ遺跡は13世紀代に断絶して、14世紀～15世紀代に集落遺跡として再び成立している。千代オオキダ遺跡や白江梯川遺跡

(16世紀代)、漆町遺跡金屋サンバワリ地区(15世紀代まで)は中世期を通じて存続する集落跡である。13世紀代には、軽海西方寺遺跡・軽海遺跡・佐々木アサバタケ遺跡が成立する。前二者は概ね15世紀代まで、後者は、16世紀代まで存続している。

特に白江梯川遺跡及び、佐々木アサバタケ遺跡は大規模集落であり、前者では多数の掘立柱建物跡、70基を超える井戸、堀、祠跡及び、多量の陶磁器類等が出土しており、後者では南面する屋敷地が3面並立する構造が復元されており、多数の掘立柱建物跡、井戸及び、多量の陶磁器類等が出土している。有力名主層の存在が推定されており、これらの遺跡は中世荘園である「南白江荘」や「得橋郷」に係わる遺跡と考えられる。他の集落遺跡も、荘園開発に係わる中で成立したものと考えられる。16世紀代になると遺跡の動向は不明瞭になり、捕捉不可能となる。当該期のある時点で各遺跡が現集落部分へ集村化していったものと考えられる。

一方月津台地上では、額見町遺跡が12世紀まで存続している以外は、中世遺跡の動向が不明瞭となり、永禄7年(1546年)に朝倉義景に平定された記録や天正4年(1576年)に一揆方の内田(山)四郎左衛門、林七介(助)が出陣した記録がのこる御幸塚城(46)まで遺跡を補足することはできていない。

また、丘陵部においては、中宮八院や那谷寺等の寺院が存在したことが文献で知られるが、調査例がなく詳細は不明である。ただし、八里向山H遺跡(241)、軽海中世墳墓(167)、立明寺中世墓(193)など中世墓群があり、一部発掘調査が行われている。丘陵部入口付近の斜面に立地し、13世紀・14世紀が主体となる。那谷地区周辺では中世窯業である加賀古窯が12世紀末までには成立したようであり、一時中断を挟み14世紀末まで操業し、壺・甕・鉢の日常容器の生産がおこなわれていた。また、一向一揆関連の城郭寺院や山城も多数存在するが、本編で報告する波佐谷城跡(120)や、能美市(旧辰口町)が調査した虚空蔵山城跡、石川県が調査した林超勝寺推定地以外は、発掘調査が入った例は乏しく詳細は不明である。

註

註1 久保智康氏教示

註2 上原真人氏教示

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名称	種別	時代
1	矢田新遺跡	集落跡	古代～中世
2	刀何理[トカリ]遺跡	集落跡	古代～中世
3	狐森塚古墳	古墳(墳丘削平)	古墳
4	念仏塚古墳	古墳	古墳
5	念仏林古墳	古墳	古墳
6	矢田借屋古墳群	古墳(墳丘削平)	古墳
7	百人塚古墳	古墳(墳丘削平)	古墳
8	矢田野古墳群	古墳(墳丘削平)	古墳
9	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代
10	念仏林南遺跡	集落跡	縄文～古墳
11	念仏林遺跡	集落跡	縄文
12	月津新遺跡	散布地	縄文
13	串町遺跡	散布地	縄文・古代
14	白のはぞ古墳	古墳	古墳
15	額見町遺跡	集落跡	古代～中世
16	矢田野神社前遺跡	散布地	平安
17	中村古墳	古墳	古墳
18	鳥経塚	経塚(消滅)	不詳
19	下粟津横穴群	横穴(消滅)	不詳

番号	遺跡名称	種別	時代
20	鳥B遺跡	散布地	奈良・平安
21	鳥遺跡	散布地	古墳～奈良
22	下粟津1～2号横穴	横穴(消滅)	不詳
23	林遺跡	窯跡・製鉄跡	古墳～平安
24	林超勝寺跡	寺院跡	中世
25	矢田野エヅリ古墳	古墳	古墳
26	箕輪塚古墳	古墳	古墳
27	石山古墳	古墳(消滅)	古墳
28	鳥C遺跡	古墳?	古墳
29	符津B遺跡	散布地	縄文
30	符津A遺跡	散布地	縄文
31	符津C遺跡	集落跡	古墳
32	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世
33	葉師遺跡	散布地	奈良～平安
34	串カンノヤマC遺跡	散布地	古墳
35	串カンノヤマB遺跡	散布地	古墳
36	串カンノヤマA遺跡	散布地	奈良
37	今江向ノ山遺跡	集落跡	弥生
38	狐山遺跡	集落跡	古代

番号	遺跡名称	種 別	時 代
39	狐山古墳(狐塚)	古墳(墳丘削平)	古墳
40	日末1-2号瓦窯跡	瓦窯跡	近世前期
41	串古窯跡	窯跡(消滅)	近世前期
42	土百古墳(銅塚)	古墳	古墳
43	土百遺跡(銅百遺跡)	散布地	縄文
44	御幸塚古墳	古墳	古墳
45	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古代
46	御幸塚城跡	城跡	室町
47	今江横穴群	横穴墓(消滅)	不詳
48	五郎座貝塚	貝塚(消滅)	縄文
49	安宅大塚古墳	古墳(墳丘削平)	古墳
50	安宅岡跡	県指定史跡	不詳
51	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳
52	安宅中世墓群	墳墓(消滅)	中世
53	小松城跡	城跡	近世
54	大川遺跡	集落跡	近世
55	梯川鉄橋B遺跡	散布地	弥生
56	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生
57	烏田A遺跡	散布地	古墳～古代
58	銭畑遺跡	集落跡	弥生・奈良・中世
59	御館遺跡	集落跡	中世
60	松梨遺跡	散布地	弥生～中世
61	中ノ江遺跡	散布地	古墳
62	長田遺跡	散布地	弥生・古墳
63	長田南遺跡	集落跡	弥生・中世
64	烏田B遺跡	散布地	古墳
65	平面梯川B遺跡	散布地	弥生
66	平面梯川遺跡	集落跡	弥生
67	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世
68	白江堡跡	館跡	室町
69	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世
70	白江遺跡	集落跡	弥生～中世
71	上小松遺跡	散布地	平安
72	八日市地方遺跡	集落跡	縄文・弥生・中世
73	本折城跡	城跡	中世
74	上本折遺跡	散布地	古墳～中世
75	多太神社境内遺跡	散布地	室町
76	幸町遺跡	集落跡	中世
77	吉竹B遺跡	塚跡(田河道)	古墳
78	吉竹遺跡	集落跡	古墳
79	千木野遺跡	陥穴・古墳・集落跡	縄文・古墳
80	大領遺跡	散布地	奈良・平安
81	浅井堰古戦場	県指定史跡	安土桃山
82	三谷遺跡	散布地	縄文
83	蓮代寺瓦窯跡	瓦窯跡	近世前期
84	本江古窯跡	窯跡(消滅)	近世末期
85	蓮代寺A遺跡	製鉄跡	不詳
86	蓮台寺跡	寺院跡	不詳
87	蓮代寺ガッシュウタン遺跡	炭窯跡	飛鳥
88	蓮代寺古窯跡	窯跡	近世末期
89	蓮代寺ムコンヤマ遺跡	製鉄跡	古代
90	蓮台寺城跡	城跡	不詳
91	三谷大谷遺跡	集落跡	平安～中世
92	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳
93	三谷B遺跡	散布地	弥生～古墳
94	木場古墳	古墳(消滅)	古墳
95	池田城跡	城跡	不詳
96	木場温泉遺跡	散布地	縄文
97	木場C遺跡	散布地	弥生
98	木場B遺跡	散布地	平安・中世
99	木場古墳群	古墳	古墳
100	大谷山貝塚	貝塚	縄文
101	津波倉ホツジ遺跡	地下式坑	室町末期
102	津波倉ハクマイダニ遺跡	製鉄跡	不詳
103	林八幡神社経塚	経塚(消滅)	鎌倉
104	井口遺跡	散布地	奈良・平安
105	井口エンドウ遺跡	製鉄跡	不詳
106	小山田オクサダニ遺跡	製鉄跡	不詳
107	小山田スギトギ遺跡	製鉄跡	不詳
108	小山田コガダニ遺跡(小山田A遺跡)	製鉄跡	不詳

番号	遺跡名称	種 別	時 代
109	木場遺跡(G地区)	製鉄跡	不詳
110	木場遺跡(F地区)	製鉄跡	不詳
111	木場A遺跡(木場遺跡H地区)	製鉄跡	奈良
112	木場遺跡(E地区)	製鉄跡	不詳
113	木場遺跡(D地区)	製鉄跡・横穴	不詳
114	木場遺跡(D地区)	製鉄跡・横穴	不詳
115	木場遺跡(B地区)	製鉄跡	平安
116	木場遺跡(C地区)	製鉄跡	不詳
117	木場遺跡(A地区)	製鉄跡	奈良・平安
118	大曲遺跡	製鉄跡	不詳
119	長谷藤油屋の山遺跡	製鉄跡	不詳
120	波佐谷城跡	城跡	室町
121	波佐谷遺跡	散布地	中世
122	蓮花寺跡	寺院跡	中世
123	江指城跡(山神山砦跡)	城跡	室町
124	六橋遺跡	集落跡	縄文
125	平野堡跡	城跡	不詳
126	幡生1号墳(行塚)	古墳	古墳
127	釜谷古墳・釜谷2号墳	古墳	古墳
128	浄水寺跡	寺院跡	古墳・奈良・中世
129	打越遺跡	散布地	弥生～中世
130	若杉古窯跡	窯跡	近世末期
131	八幡遺跡・八幡古墳群・八幡若杉窯	集落跡・古墳・窯跡	縄文～近世
132	佐々木遺跡	集落跡	奈良・平安
133	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世
134	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世
135	千代本村遺跡	散布地	古墳
136	横地遺跡	散布地	縄文
137	千代オオキダ遺跡	集落跡	古墳～中世
138	千代城跡	城跡	室町
139	千代小野町遺跡(小野町遺跡)	散布地	古墳
140	古府遺跡	集落跡	平安
141	一針C遺跡	集落跡	弥生・古墳
142	一針遺跡	散布地	縄文
143	定地坊跡	寺院跡	室町
144	一針B遺跡	集落跡	弥生・古墳
145	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世
146	大長野A遺跡	集落跡	弥生～中世
147	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世
148	大長野B遺跡	散布地	不詳
149	牛島宮の鳥遺跡	集落跡	古代(平安)
150	古府1のまち遺跡	集落跡	古墳～平安
151	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世
152	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世
153	小長野B遺跡	散布地	古代
154	小長野遺跡	散布地	不詳
155	高堂四方堂[ヨモド]遺跡	散布地	弥生
156	麻島尾谷遺跡	集落跡	縄文
157	赤地谷横穴群	横穴墓	古墳
158	松谷寺跡	寺院跡	古代(奈良)
159	椎の木山遺跡	散布地	縄文
160	護国寺跡	寺院跡	平安末期
161	昌隆寺跡	寺院跡	不詳
162	大谷口遺跡	散布地	弥生
163	軽海遺跡	散布地	弥生～近世
164	龜山[ガメヤマ]玉造遺跡	集落跡	古墳
165	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世
166	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世
167	軽海中世墓群	墳墓	中世
168	軽海庵寺	寺院跡	平安
169	西芳寺遺跡	寺院跡	平安・中世
170	古府フドンド遺跡	経塚(消滅)	鎌倉
171	南野台遺跡	散布地	縄文・古墳
172	古府シマ遺跡	散布地	平安・中世
173	十九堂山中世墓群	墳墓	中世
174	十九堂山[ジクドウヤマ]遺跡	寺院跡	平安・中世
175	小野古窯跡	窯跡	近世
176	小野遺跡	散布地	平安
177	小野遺跡	散布地	平安

番号	遺跡名称	種別	時代
178	前田利常公灰塚	塚	近世
179	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳
180	埴田の虫塚	史跡指定地	近世
181	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳
182	埴田ウラムキ遺跡	散布地	平安・中世
183	埴田フルカワ遺跡	散布地	古墳
184	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・室町
185	御菩提所[オボダイショ]古墳	古墳(墳丘削平?)	古墳
186	埴田山古墳群	古墳	古墳
187	埴田後山古墳群	古墳	古墳
188	埴田遺跡	散布地	奈良・平安
189	埴田塚	塚	中世
190	里川F遺跡	寺院跡	平安
191	里川E遺跡	寺院跡	平安
192	里川D遺跡	散布地	縄文
193	降明寺跡	寺院跡	平安初期
194	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	平安～中世
195	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	平安～中世
196	遊泉寺遺跡	散布地	縄文
197	仏生寺塚	経塚(消滅)	中世
198	仏生寺跡	寺院跡(消滅)	中世
199	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳
200	宮の奥1～3号経塚	経塚	平安～鎌倉
201	常徳寺跡	寺院跡	室町
202	鶴川堡跡	城跡	不詳
203	鶴川横穴	横穴墓	不詳
204	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳
205	涌泉寺跡	寺院跡	平安初期
206	中海C遺跡	散布地	平安～中世
207	中海B遺跡	集落跡・長寛寺跡?	古墳～中世
208	長寛寺中世墓跡	墳墓	室町
209	中海遺跡	集落跡	縄文
	岩瀬遺跡	散布地	縄文・中世
210	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文
211	松の木谷横穴群	横穴墓	古墳
212	善興寺跡	寺院跡	平安
213	岩瀬城跡	城跡	中世
214	仏御前屋敷跡・仏御前墓	屋敷跡	平安
215	仏ヶ原城跡	城跡	中世
216	麦口中世墓	墳墓(損壊)	室町
217	麦口遺跡(麦口縄文遺跡)	散布地	縄文
218	下麦口横穴群	横穴墓	古墳?
219	岩倉城跡	城跡	室町
220	下出地割遺跡	散布地	不詳
221	佐野A遺跡	散布地	古墳
222	佐野八反田遺跡	散布地	古代
223	河田館遺跡	散布地	縄文・中世
224	谷内横穴	横穴墓(消滅)	不詳
225	河田C遺跡	散布地	不詳
226	河田山遺跡・河田山古墳群	集落跡・古墳	旧石器・弥生・古墳
227	下八里横穴群	横穴墓・地下式坑	中世
228	上八里2号室	室跡(消滅)	不詳
229	穴場横穴	横穴墓	不詳
230	上八里C遺跡	散布地	奈良
231	上八里横穴群	横穴墓	不詳
232	上八里1号室	室跡	不詳
233	上八里D遺跡	散布地	不詳
234	里川G遺跡	散布地	古代
235	里川C遺跡	炭窯跡	不詳
236	里川B遺跡	炭窯跡	不詳
237	里川A遺跡	炭窯跡	不詳
238	上八里A遺跡	散布地	縄文・平安
239	上八里B遺跡	散布地	古墳～奈良
240	上八里中世墓	墳墓	室町
241	八里向山H遺跡	墳墓	中世
242	八里向山F遺跡	古墳・墳墓・横穴	古墳・中世
243	八里向山A遺跡	集落跡	弥生
244	八里向山J遺跡(地藏谷古窯跡)	窯跡	飛鳥
245	八里向山G遺跡	散布地	弥生・平安
246	八里向山B遺跡	集落跡・寺院跡	旧石器・縄文・平安
247	八里向山C遺跡	集落跡・古墳	旧石器・縄文～中世

番号	遺跡名称	種別	時代
248	八里向山D遺跡	集落跡・古墳	旧石器・縄文・平安
249	八里向山E遺跡	集落跡	旧石器・古墳～平安
250	佐野B遺跡	散布地	古墳
251	河田向山下遺跡	散布地	縄文・平安
252	河田向山古墳群	古墳	古墳
253	湯谷遺跡	散布地	古墳
254	能美古墳群 寺井山・三道山支群	古墳	古墳
255	和田山下遺跡	散布地	縄文・古墳
256	能美古墳群 和田山支群	古墳	古墳
257	八里向山I遺跡	窯跡	平安
258	石子遺跡	散布地	中世
259	秋常遺跡	散布地	古代(平安)
260	高座遺跡	集落跡	縄文・古墳・中世
261	徳久・荒屋遺跡	集落跡	縄文～中世
262	下開発遺跡	集落跡	古墳～古代(平安)
263	下開発クモンミヤ遺跡	集落跡	古代(平安)～中世
264	下開発茶臼山遺跡	集落跡	縄文・中世
	下開発茶臼山古墳群	古墳	古墳
265	茶臼山製鉄遺跡群	生産遺跡	不詳
266	荒屋古墳群	古墳	古墳
267	和気古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良末～平安)
268	下徳山A遺跡	散布地	古代(奈良末～平安)
269	下徳山B遺跡	散布地	古代(平安)
270	下徳山金谷地古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)
271	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代(平安)
272	和気近世窯跡	生産遺跡	近世
273	下徳山トモサダ遺跡	散布地	古代(奈良)
274	和気和田見遺跡	散布地	不詳
275	和気和田見古窯跡	生産遺跡	古代(平安)
276	和気矢口A遺跡	散布地	縄文
277	和気公文屋敷遺跡	城館跡	不詳
278	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳
279	和気後谷2号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末～平安)
280	寺高薬師坂古墳	古墳	古墳
281	寺高古窯跡	生産遺跡	不詳
282	虚空蔵山城跡	城館跡	中世
283	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳
284	下徳山D遺跡	生産遺跡	古代(奈良末)
285	下徳山御陵山古窯跡	生産遺跡	古代(平安)
286	下徳山杉谷古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)
287	下徳山B遺跡	散布地	古代(平安)
288	辰口庵寺	社寺跡	不詳
289	辰口遺跡	散布地	縄文
290	湯屋古窯跡	生産遺跡	古墳
291	湯屋遺跡	散布地	古墳・古代(平安)
292	湯屋チャウツカ遺跡	その他の墓	中世
293	上徳山近世窯跡	生産遺跡	近世
294	丸丸旭台遺跡	散布地	縄文
295	火釜A遺跡	散布地	縄文
296	旭台北岩跡	城館跡	中世
297	旭台A遺跡	散布地	縄文
298	旭台B遺跡	散布地	古代(平安)
299	旭台南岩跡	城館跡	中世
300	長滝宗誓寺跡	社寺跡	不詳
301	長滝ナガオ遺跡	散布地	縄文
302	長滝A遺跡	散布地	不詳
303	金剛寺川の穴横穴	横穴墓	古墳後期
304	坪野遺跡	散布地	縄文
305	坪野妙観寺跡	社寺跡	不詳
306	上徳山A遺跡	散布地	古代
307	金剛寺坂中世墳墓	その他の墓	中世
308	徳山寺跡	社寺跡	不詳
309	金剛寺跡	社寺跡	不詳
310	鍋谷社跡	社寺跡	不詳
311	鍋谷横穴	横穴墓	不詳
312	鍋谷中世墳墓群	その他の墓	中世
313	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世
314	鍋谷堡跡	城館跡	不詳
	鍋谷延願寺跡	社寺跡	中世
315	鍋谷延願寺遺跡	散布地	不詳
316	鍋谷兵五郎館跡	館跡	不詳

番号	遺跡名称	種別	時代
316	鍋谷兵五郎遺跡	散布地	縄文
317	鍋谷花野遺跡	散布地	縄文中期
318	鍋谷古宮社跡	社寺跡	不詳
319	松岡A横穴群(火灯山横穴群)	横穴墓	古墳
320	松岡寺跡	寺院跡	室町末期

番号	遺跡名称	種別	時代
321	松岡B横穴(こたい谷横穴)	横穴墓	古墳
322	穴山横穴	横穴墓	古墳
323	池城経塚	経塚	室町
324	曾山横穴	横穴墓	古墳

引用参考文献

- 浅香年木他1981年『角川日本地名大辞典』17石川県 角川書店
浅香年木1993年「加賀国」『講座 日本荘園史6』 吉川弘文館
石川県埋蔵文化財センター1986年『佐々木ノテウラ遺跡』
石川県埋蔵文化財センター1986年『漆町遺跡Ⅰ』
石川県埋蔵文化財センター1988年『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター1989年『浄水寺墨書資料集』
石川県埋蔵文化財センター1992年『千代』
石川県埋蔵文化財センター1996年『荒木田遺跡』
石川県教育委員会2007年『石川県中世城館調査報告書Ⅲ(加賀Ⅱ)』
小松市教育委員会1996年『荒木田遺跡』
小松市教育委員会2003年『八日市地方遺跡Ⅰ』
小松市教育委員会2003年『千代・能美遺跡』
小松市教育委員会2004年『佐々木遺跡』
小松市教育委員会2004年『八里向山遺跡群』
小松市教育委員会2006年『千代オオキダ遺跡』
小松市教育委員会2007年『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』 桂書房
1923年『石川県能美郡誌』石川県能美郡役所
1925年『石川県江沼郡誌』石川県江沼郡役所
2002年『新修小松市史』資料編4 国府と荘園 石川県小松市

第Ⅱ章 矢田野遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯

平成17年8月23日に小松市矢田野町在住の高橋裕喜雄氏より、小松市矢田野町式五字145、146、147番地での工場増設計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「矢田野遺跡」内となっており試掘の必要がある旨を伝えたところ、平成17年8月25日付けで協議書及び試掘調査依頼書が提出された。これを受け、埋蔵文化財調査室は同年8月29日付けで試掘調査を実施する旨を回答した。

試掘調査は、同年9月2日に、試掘坑8カ所を設定して人力により調査を行ったが、全ての試掘坑において遺物包含層が認められたため、さらに遺構の分布等の詳細を確認するため、工場増設区域を中心に同年9月9日に重機による試掘溝調査を実施した。これら試掘調査の結果、工事全区域(1,162㎡)において遺物包含層及び遺構の存在を確認したため、同年9月12日事業者に対し試掘調査の結果について通知を行った。同年9月14日付けで、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会に提出された。

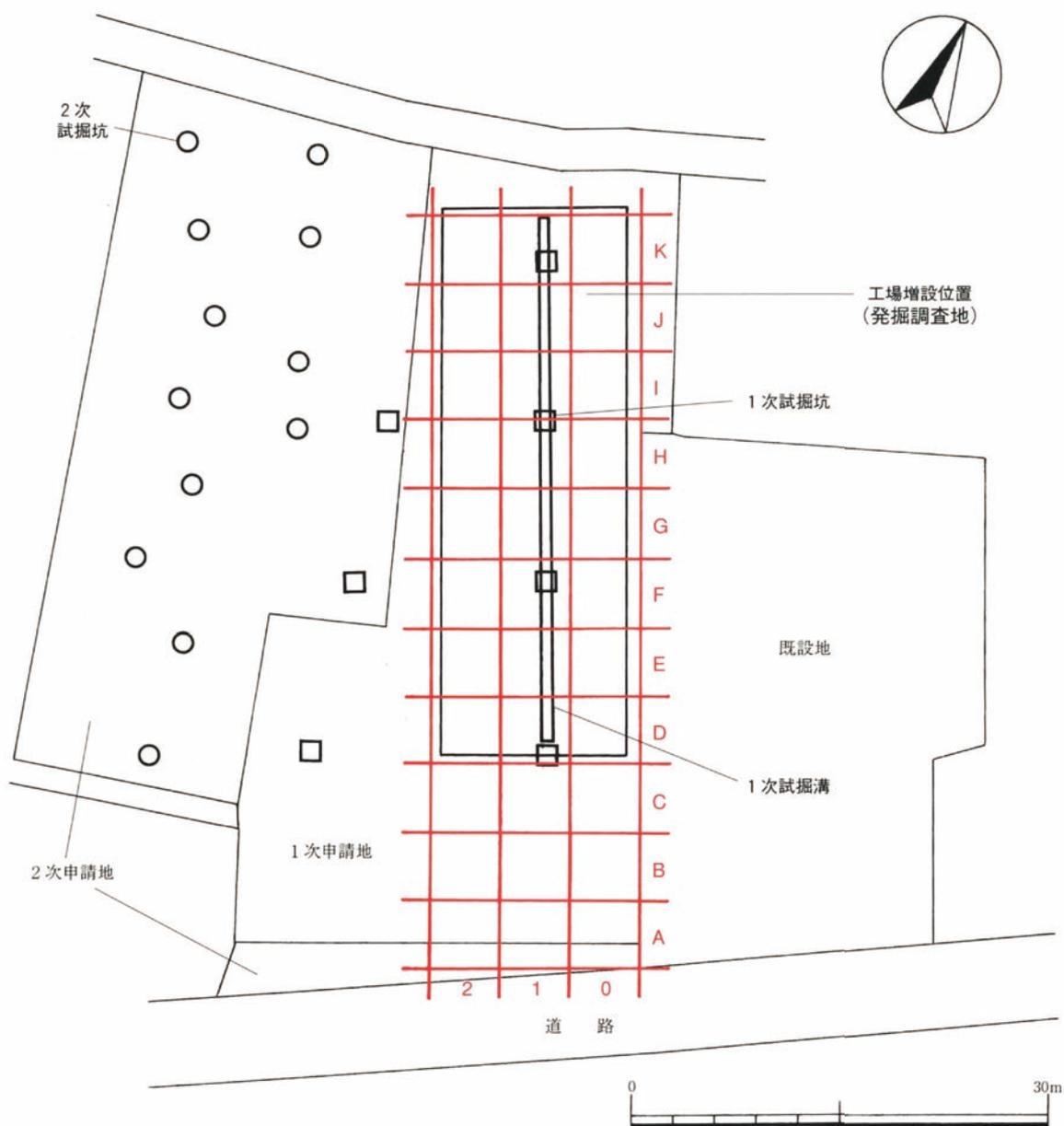
その後、事業者と協議を重ね、当該計画が工場建物であり、工場内に重量のある機械を設置するため、厚い基礎工事が必要であるとのことであり、よって、埋蔵文化財の破壊が免れない基礎工事区域の594.16㎡を発掘調査対象とし、他の部分は現況面での簡易舗装のため現状保存することで合意した。また、事業者が個人経営の小規模零細事業者であり、調査費用の負担が困難である旨を申し出たため、石川県教育委員会と協議のもと審査した。この結果、事業者が小規模企業者とするには従業員数において該当外であるものの、調査面積が少ないことと調査経費の半分程度を事業者が負担するという条件で、発掘調査を国庫補助事業として行うこととなった。これを受けて、同年9月22日付けで事業者より、埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出され、同年9月26日付けで双方の間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を取り交わした。そして、同年9月27日付けで事業者に対し埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。同年9月29日付けで、石川県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が事業者に対して通知された。

発掘調査は、平成17年10月4日から開始した。同年12月25日までに終了する予定だったが、12月14日から3日間降雪し続け、その後も悪天候に見舞われたため、やむなく調査を中断せざるをえなくなった。年をまたぎ、平成18年1月13日に除雪作業を行い、調査を再開して平成18年1月17日に現地調査を終了した。その後、平成18年1月18日付けで、事業者に対し発掘調査結果についての通知を行い、当該地の引き渡しを行った。

以上が1次協議申請地における経緯である。

なお、1次申請地内の発掘調査実施中に、隣接地である道路側の小松市矢田野町式五字144番1、西側隣接地である扇原町124・125・126・127番地における1,142㎡についても、駐車場用地を目的として協議書が同事業者より提出された。先に、扇原町124・125・126・127番地において平成17年10月13日付け協議書提出、市教育委員会が同年10月14日付けで回答、同年10月17日付け試掘調査依頼書が提出され、同日これに対する回答を行い、同年10月20日に試掘調査を実施した。試掘調査で、任意に12カ所の試掘坑を設け調査を行った結果、1カ所を除く11カ所から遺物包含層、4カ所から遺構、7カ所から遺物を検出し、当該区のほぼ全体に埋蔵文化財が確認された。その後の協議により、当該区は駐車場用地を目的とした簡易アスファルト舗装する工事であり、遺物包含層までに工事の影響がな

いものと判断されたため、現状保存するに至った。しかし、立木の除去に際してのみ工事立会することとなり、同年12月9日に実施している。矢田野町式五字144番1については、この時実施されていた発掘調査地及び西側申請地の試掘調査の遺構密度状況から判断して、埋蔵文化財の存在は明らかであった。また、発掘調査地の状況から、旧地表が南に向かい緩やかだが徐々に深くなっていることが判明していた点と、1次協議申請地でも発掘調査を行わない区域に続く狭小地である点、やはり目的が駐車場用地であることから、工事が地下に影響を及ぼさないと判断され、現状保存扱いとなった。この該当区については、同年11月4日に事業者より協議書提出、これに対し同年11月8日には回答を行っている。また、これら2カ所の区域については、10月31日付けで、「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会に提出されている。以上が、2次申請地における経緯であり、2次申請地はすべて現状保存されたのである。



第3図 矢田野遺跡VI 工事区域及び試掘坑配置図・調査区グリッド配置図 (S=1/500)

第 2 節 調査の概要と経過

1. 発掘調査方法の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのグリッドを任意に設定した。精査し、遺構プラン検出後、土層断面を観察するため、アゼを設定して遺構掘削を行った。土層断面図を1/20または1/10で作成後、掘削を完了、後に1/20平面図をトータルステーションで作成し、掘立柱建物はエレベーション図（断面図）を1/20で作成した。写真撮影は、ネガ・ポジ・モノクロフィルムとデジタルカメラを用い、土層断面の撮影と遺構完掘撮影を主に行い、この他必要と思われるものを適宜撮影した。出土遺物は、精査段階ではグリッドごと一括して、遺構検出後は遺構ごとに取り上げた。遺構掘削の際、遺物は可能な限り層位一括で取り上げ、重要と判断された床面遺物などは1/10平面図を作成して遺物番号を付して取り上げた。

2. 遺構番号について

矢田野遺跡では、小松市教育委員会並びに（財）石川県埋蔵文化財センターが、5回の発掘調査を行っている。よって今回の調査で第Ⅵ次ということになる。よって、遺構Noは、これまで矢田野遺跡内で発掘調査され検出されてきた遺構数の続き番号となるようにして付すこととした。よって今回は、竪穴建物が18軒目から、掘立柱建物が38棟目からである。ただし、土坑はトータル数がわからなかったため、6回目の調査ということを加味して601から遺構Noをつけることとした。

3. 発掘作業の経過

調査地は、表土除去された状態で小松市教育委員会に引き渡され、平成17年10月4日より作業を開始した。まず、木株の撤去を慎重に行い、ベルトコンベアーを配置するなどの準備を行った。10月11日に遺構検出作業を開始する。遺構確認面まで包含層を掘削して精査し、遺構プラン確認作業を行った。竪穴建物プランや柱穴プランが次々と検出されて、10月13日にはプラン確認作業を終了する。10月18日から竪穴建物の掘削を開始した。10月24日には掘立柱建物の柱穴を半裁し始めた。同日SB38で2本の柱穴・柱痕が検出され、建て替え建物と判明する。SI18内に大型土坑SK603の存在が確認され、11月4日に掘削を開始する。11月8日、SI20が壁周溝を伴うことが判明、同時に壁周溝から木舞と思われる小ピット列が検出され、掘削を開始する。同日SK603の床・壁全体が被熱することが明らかとなり、周囲からも小土坑が検出される。11月21日には、落ち込みを持たない大規模被熱も検出されてSJ601と遺構番号を付した。同日、SI20の床下調査を行っていたところ、支柱穴と考えられる規模の柱穴が4本検出され、SI20構築以前に大型建物が存在していたことが判明したため、これをSI21とした。12月1日に遺構掘削は終わり、12月4日に平面図や掘立柱建物のエレベーション図の作成を開始、12月7日には調査区全体の完掘写真を撮影した。あと少しで作業も終わろうという中、12月13日午後から雨が雪に変わり、一夜にして大量に積雪した。その後3日間、雪は降り続き、近年稀にみる大雪となってしまった。調査地は吹き溜まりも含め60～70cmも雪が積もり、その後も悪天候に見舞われたため、発掘作業を中断せざるをえない状況となった。翌年1月13日、数日間晴れるとの天気予報を受け、除雪作業を行う。翌日より図面作成を再開し、1月17日に現地調査を完了した。

4. 出土品整理

出土品は、平成17年度に遺物洗浄作業を行い、平成19年度に注記・分類・接合・復元作業を行った。平成20年度には、調査員が改めて分類・復元作業を行い、整理作業員が計測作業を行った。実測作業は、調査員と整理作業員で行い、トレース作業は整理作業員が行った。

第 3 節 遺跡範囲・概要・既往の調査

矢田野遺跡は、(財)石川県埋蔵文化財センターが県営ほ場整備事業に伴って平成11年度、平成13年度、平成14年度、平成15年度、平成16年度に調査を行っている。矢田野遺跡の調査としては、この度の調査で6回目ということになる。当遺跡は、長径約1km、短径約600mに広がる周知の古代集落遺跡だが、単独の遺跡ではなく、矢田借屋古墳群をはじめ、百人塚古墳、矢田野古墳といった古墳群と重なり合っていることが特徴である。遺跡中央の南西から北東にかけてJR鉄道線が横切っており、県の調査は、主に鉄道線の南側を中心とした位置を調査した格好となる。これまで小松市教育委員会でも、県調査区域から線路を挟んで北側に隣接する区域で、矢田野遺跡・矢田借屋古墳群の調査を行ってきた。平成10・13年度は発掘調査、平成12年度は詳細分布調査を行っているが、古代集落跡の遺構が検出されていないことから、矢田借屋古墳群を報告する形で2000『矢田借屋古墳群』、2006『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 矢田借屋古墳群』を刊行した。しかし、平成12・13年度調査の出土遺物に、7・8世紀代のものがまとまって検出されており、遺物のみを平成19年度に市内遺跡発掘調査報告書Ⅲで報告した。

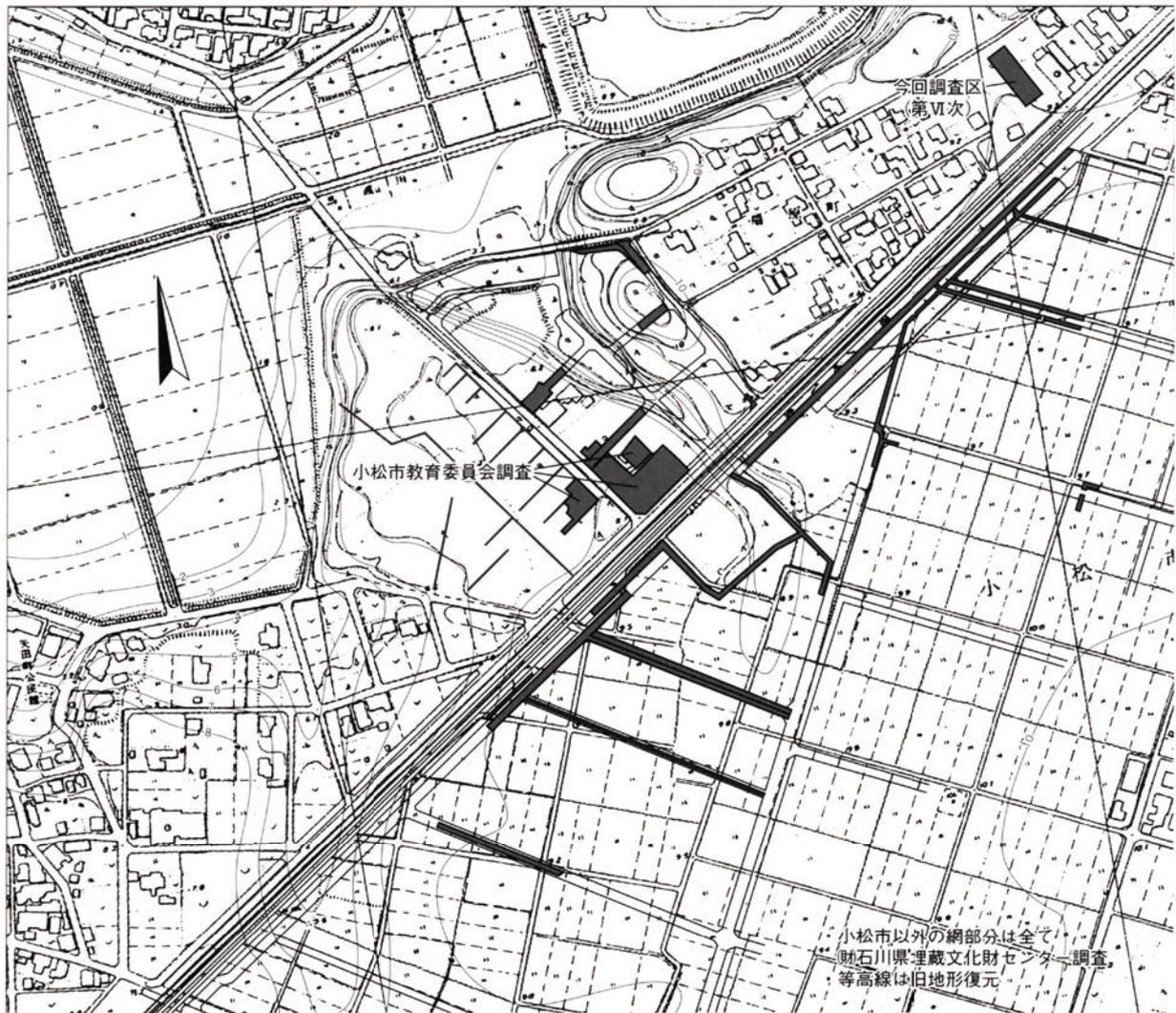
前述でも触れたが、矢田野遺跡は、7世紀から8世紀前半を盛期とした集落遺跡である。平成13年度と平成16年度の県調査で、渡来系であるL字型カマドを付設する竪穴建物が2軒検出されたことが知られ、集落としての特徴の1つと言える。同じ月津台地上では、台地西側にあたる額見町遺跡や額見町西遺跡でL字型カマド付設の竪穴建物が検出され、また、台地北東にあたる薬師遺跡からもL字型カマド付設の竪穴建物が検出されている。なお台地上の殆どの遺跡から鍛冶関連遺構・遺物の検出や窯道具等の出土が認められる。台地南東に谷を挟み低丘陵部生産遺跡群が展開しているため、台地上の集落がこれに係わった可能性と、強いては渡来人関与の可能性が高いと判断されるのである。

また、県の調査で、矢田野遺跡では、古墳域と集落域が重複しておらず、古墳群を取り囲むように集落が展開していることがわかっており、集落が機能していた時点では墳丘のみが残存していたものと考えられている。さて、今回の調査地は、矢田野遺跡の範囲で北側にあたり、県調査の北端から北へ約50m地点に位置している。

第 4 節 発見された遺構

1. 基本層序

現況面の標高は10.050m、深さ15～30cmに現代層である表土、その下に旧表土とも言える盛土が認められる。地元の方の話によると、かなり以前にこの付近一帯で切り盛り工事を行ったということである。旧表土下には、遺物包含層並びに遺構覆土層が認められ、厚さは北側で15～20cm、最も南側で25cmを測り、全体的に主体は20cm程である。遺構の検出状況から、遺構の上面が削平された後に、盛土調整されたものと考えられる。要するに、遺構上面が破壊を受けていた。調査区の東側、南北全範囲において、旧表土から、赤道と呼ばれる家と家の地割り境に設けられた通路が硬化面を伴い検出され、この赤道の西側にピット列にきれいに並んでいる。これらは、いずれも現代のものであり、カクランとして扱うべきものだが、全体図に示されているので、古代遺構とは関連のないことを記しておく。地山土は、最下層に褐色土、1つ上層で暗褐色土、最も上層で黒褐色土と続く、当台地特有の層を呈している。地山土標高では、旧地表は南北に若干傾斜をもち、標高差30cmを測る。なお、本遺跡の基本層序図に関しては、SI19のCライン土層断面図を参照にされたい。



第4図 矢田野遺跡VIの調査地及び矢田野遺跡既往調査地位置図 (S=1/2500)

2. 検出遺構

当調査区からは、竪穴建物4軒、掘立柱建物9棟、土坑2基、底面の被熱した土坑1基と周囲の土坑3基が検出された。また、竪穴建物では、床レベルに広い範囲で被熱焼結面が検出された。

底面の被熱した土坑は、建物内に収まる形で検出された。竪穴建物の床を切るように掘り込まれた土坑の底面が著しく被熱するものである。また、同じ竪穴建物内で、床面レベルに広がる被熱焼結を検出した。これは、竪穴中央に設けられるような炉の規模をはるかに超える規模をもつ焼結層である。これら一連の遺構群は、同じ項にて述べてゆきたい。他の竪穴建物では、4本主柱の大型建物、同じく4本主柱と考えられる小型建物、そして壁立式建物と様々なタイプの竪穴建物が検出されている。また、掘立柱建物もまとめて検出されており、このうち2棟においては、同位置での建物の建て替えが行われている。掘立柱建物は、柱圧痕が白色粘土状に残っているものが多く、柱穴の掘り込みも深く大きい。古代初頭の掘立柱建物の傾向である柱間を狭くもつといった特徴をよく反映する建物や、その後出現するような方形プランを呈している建物も認められる。これら検出された遺構は、田嶋編年IV期（8世紀中頃～後半）の土坑が2基ある以外は、すべて田嶋編年I～II3期（7世紀代～8世紀初頭）にあたる遺構であり、中でも主体を7世紀後半代にもつ。

(1) 竪穴建物

① SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601

〈立地・規模・形態と状況〉SI18は、E・F-0・1Grに位置し、カマドや柱穴を伴わない竪穴状の遺構である。SK603ab・604・605そしてSJ601と重複している。これら遺構群の重複の状況と、それぞれの出土遺物時期や接合状況、そして使用痕跡をもつ遺物が極めて少ないということから、総じて工房としての機能を果たした可能性が高いと考えている建物と遺構群である。

SI18の内部に柱穴は検出されていないが、この周囲に同時期のSB44が検出されている。このSB44がSI18の柱穴になるのかもしれない。しかし、竪穴プランの主軸と掘立柱建物主軸が全く合わないため、別のものとして報告することとする。

当建物プランは部分的にしか検出されておらず、全体の1/2強にあたる。正方形に近い状態で、規模は490×480～530cm、推定面積24.75m²、主軸はN-135°-WもしくはN-45°-Eである。

〈SI18の状況〉SI18の床は、すべてが地山床であり、南端壁からSK603の間の一部が、若干硬化している程度である。この若干の硬化を基本面として、標高8.50～8.54mを主体にフラット面が広がり、またこの面より完形遺物がまとまって張り付くように検出されていたことにより、床面と捉えたものである。北壁中央付近では、厚み5～6cmで灰白色(7.5YR7/1)粘土の集堆積塊が検出されており、白色粘土を置いたものかと思われる。貼床を施していないので、当然であろうと思われるものの、竪穴自体の明確な掘方は、確認されていない。南端壁からSK603間で、黒色ベース土がかるうじて検出されており、これが掘方になろうかと思われるが、極めて部分的である。この土は、軟らかい黒色土であり、貼床らしい堅さや質をもっていないものである。

南壁中央から、SK603aを取り囲むように、地山土の盛り上がりが見出されている。床レベルから測り、厚み6～10cmのもので、調査当初はカマドソデと考えていたものであった。土は地山土そのものと現地で判断されており、この部分を残して周囲を掘削したこととなり、判断に困難な痕跡である。但し、SK603aと何か関連があるものと予想している。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具126点、土師器煮炊具479点、焼成粘土塊57点である。図No3・4・5の坏A蓋は床レベルで張り付いて検出されたもので、田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2と判断され、時期判断には信憑性が高い遺物と言える。

〈SK603aの状況〉SK603aは、SI18の西南・南東壁の軸に添った形で位置している。規模は、長径215cm、短径200cm、SI18床面より深さ50cmを測り、逆台形状プランを呈す。底面は、東側にテラスが設けられ、緩やかに下がって底は丸く、西側に至ると直立気味に壁が立ち上がる。SK603a右側と、SI18南東壁を繋ぐ形で、T字状の盛り上がった地山が認められることは前述のとおりである。本土坑の底面・西側壁では被熱面が確認された。底面のほぼ全体が酸化状態で赤褐色を呈し、西側壁は、底面より33～35cmの高さで焼け、最も上面いわば上端近くは焼けていない。また、底面の西側は、特によく被熱し焼結している。なお、この被熱は、地山が焼けているものである。

本土坑の周囲には、小ピットが7本検出されている。P1～P4は、土坑の上端レベルで、相対する位置に配置されているが、他のピットは土坑内からの検出であり、相対するような綺麗な配置となっていない。P3は、周囲の上面並びにピット内壁面が被熱している状態である。P1・2・7は半円形状で径14～18cm程度、深さはP1が28cm、P2が15cm、P7は13cmである。この他は土層断面の通りであるが、P6が20～38cmと最も深く、P5は斜めに入り込む形となっている。

出土遺物は、SK603ab合わせて、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具10点、土師器食膳具56点、土師器煮炊具は、焼け弾き品39点を含む204点、そして焼成粘土塊68点である。なお、出土遺物の時期は、



第5図 矢田野遺跡Ⅵ 全体遺構図 (S=1/150)

田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期と判断される。

〈SK603b・604・605の状況〉 これら3基の土坑は、SK603aにぴったりとくっつくように、次々と掘り込まれたと考えられるもので、土坑規模としては径50cm弱の小規模なものである。深さは、SK603bとSK604が20cm、SK605が50～55cmである。SK605は、底面に砂っぽい感触の白色粘土を検出しているため、粘土を溜めておく機能をもっていたのではないかと考えられる。また、SK604には、集中して土器が廃棄されていた。

出土遺物は、SK604が須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具が焼け弾き品6点を含む125点、そして焼成粘土塊30点である。時期は、田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期と判断されるものである。なお、SK605からの出土遺物はない。

〈SJ601の状況〉 SJ601は、SI18中央の床面レベルが被熱するものである。規模は、長径155cm、短径105cmを測り、地山が被熱している。被熱面は平坦で、焼結して固く、特に西と東端で更に強く焼結して、明黄褐色を呈している。SJ601の北西にも小規模な被熱箇所が認められる。この焼面遺構は、図面上はSK603aをはじめ周囲の土坑に切られているように見えるが、SK604の上に若干のつて構築されており、これら土坑群の中では最も新しいものと現地調査で判断している。

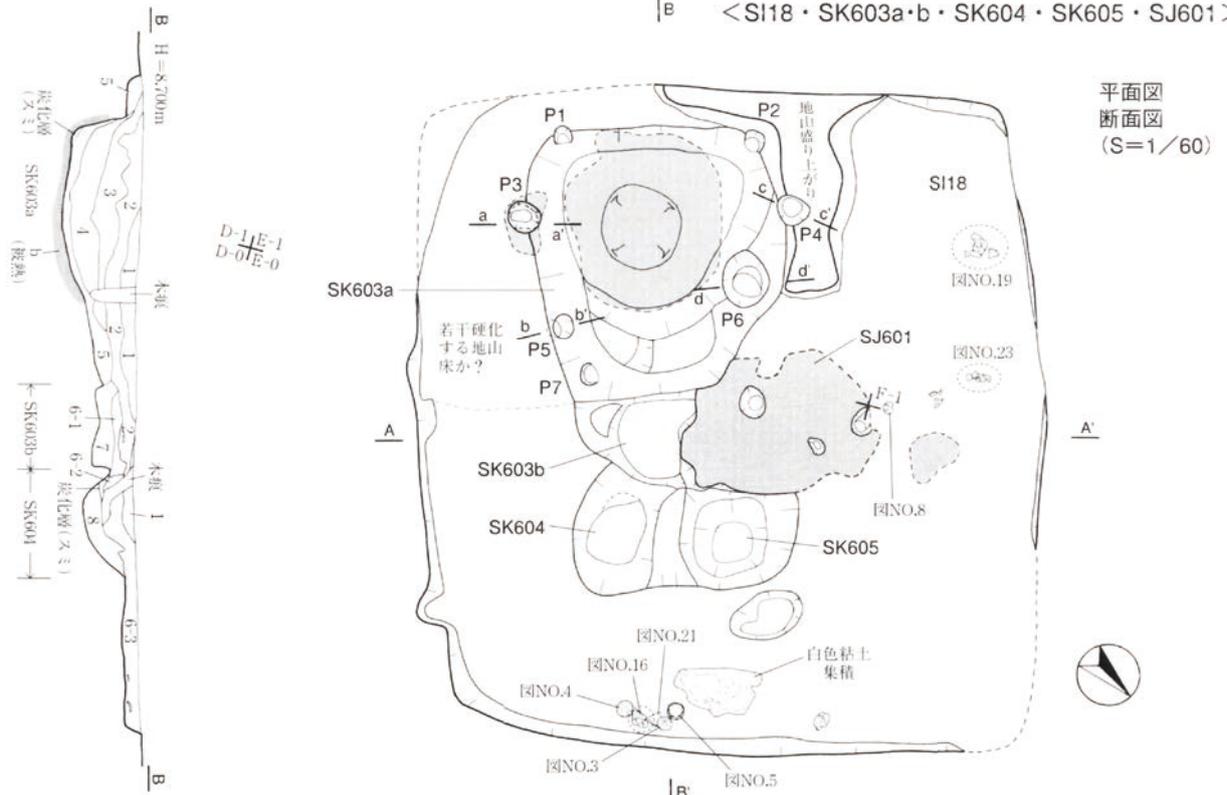
SJ601からの出土遺物は、土師器食膳具が焼け弾き品6点を含む21点、土師器煮炊具14点、焼成粘土塊4点である。

〈覆土〉 SI18の覆土は、SI18の床レベルから10cm程の厚みを主体とし、最大で14cmを測る。この14cmが最大壁高ともなるわけであるのだが、堅穴内覆土がSK603やSK604内部に落ち込むように流れ込んでいる土層断面を呈している。SK603aの最下層にあたる5層は、炭や焼土、地山塊が多量に入るので、この層上面にあたる4層との間の部分に、スサ入りの焼成粘土塊の集中を検出している。なお、5層と被熱面の間には、薄い炭層が検出されている。5層を切っているのがSK603bの覆土となる7層である。SK604にあたる8層の上面で、SK603b側にも炭層が認められる。1層～4層と6層は、深い部分に向かって落ち込んでいるため、自然堆積層と判断してよいのだろう。

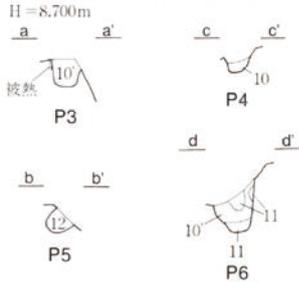
〈遺物について〉 出土遺物の量については、各遺構で述べたような数値となっているのだが、遺物は何層からでも、満遍なく出土している状況である。特筆すべきは、これら遺構間の接合が多いということと、焼け弾き品、粘土焼成塊が出土しているということである。また、当遺跡では総数1,500点の土師器が出土しているが、この遺構群の合計数が1,068点であり、土師器の71%がこの遺構群から出土している。なお、焼成粘土塊の出土においては98%を占め、焼け弾き品もこれら遺構群でのみ出土する。接合については、SI18+SK603、SI18+SK604、SK603+SK604、SI18+SK603+SJ601といった組み合わせが見られ、この他SI18+SK603+SK604+SJ601というように、すべての遺構間で接合できている遺物も多い。このような場合は、焼け弾き品が多いことが特徴である。また、この他の接合に関しては、SI18+SB39・P8というものや、SI18+SK603+SK604+SJ601+SB39・P7といったものあり、SB39がこれらの遺構群と同時併存していた可能性が高いと思っている。なお、遺物の接合は、土坑の覆土下層と、堅穴建物床面との接合といった具合に、比較的信憑性の高いものが多く見られる。焼け弾き品は、土師器の表面を剥いだように割れている状態、片面のみ調整が残る状態であり、堅緻なものが多いため、焼成温度が高くなりすぎたことにより、弾き焼け飛んだのではないかと考えている。このような焼け弾き品は、土師器焼成遺構に多く見られるものであり、また、多く検出されている焼成粘土塊も同様である。

〈遺構群の性格〉 以上から、SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601は、土師器焼成を目的とした施設ということができよう。遺構の切り合いから、まず50cmの深さをもつSK603焼成坑を構築して

＜SI18・SK603a・b・SK604・SK605・SJ601＞



ピット層断面図 (S=1/60)



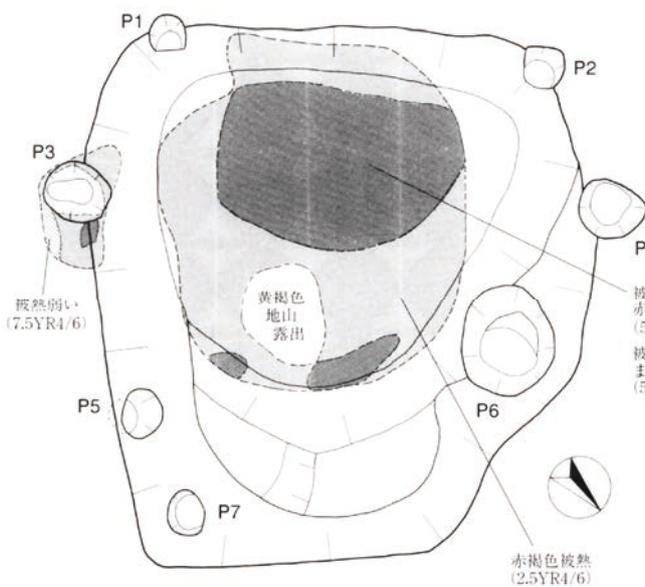
ピット覆土層註

層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・夾雑物/(備考)
10層/黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/H/なし/弱/
10層/黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/H/なし/弱/
11層/地山斑/
12層/黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/H/なし/弱/焼土・地山粒1-2%

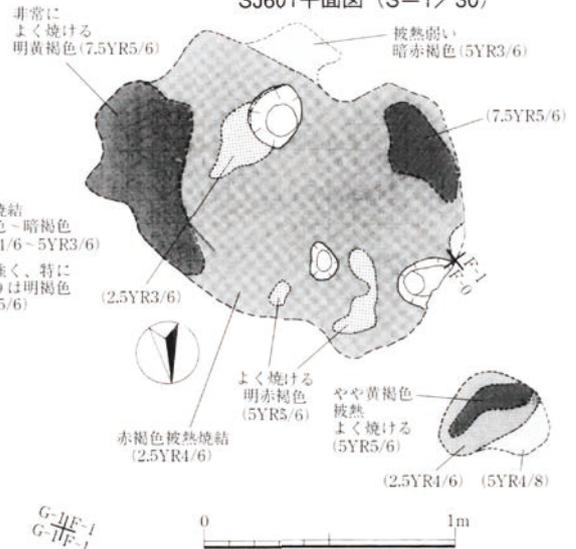
SI18・SK603・604・SJ601覆土層註

層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・夾雑物/(備考)
1層/黒色埴壤土/(10YR2/1)/H/なし/弱/焼土粒10-20%/
2層/黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/H/なし/弱/炭片あり/
3層/黒褐色埴壤土/(7.5YR3/1)/H/なし/弱/焼土・地山粒2-3%/
4層/黒色埴壤土/(7.5YR2/1)/H/なし/弱/焼土・地山粒2-3%/
5層/焼土・地山斑/-/H/-/-/黒褐色(7.5YR3/2)埴壤土(SI18階床と同位か上位)
6-1層/黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/H/なし/弱/炭・土層に焼土斑(5YR4/4)/(SI18階床と同位か上位。SK603・5層より上位)
6-2層/黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/H/なし/弱/中央に焼土・地山斑/
6-3層/黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/H/なし/弱/焼土・地山斑/
7層/黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/H/弱/弱/焼土粒3-7%/
8層/灰褐色埴壤土/(7.5YR4/2)/H/なし/弱/地山粒25-30%・焼土・炭片2-3%/(基質も地山質。土坑層に土器蓋あり)
9層/黒色埴壤土/(7.5YR2/1)/H/なし/弱/-/
a層/赤褐色・棕色/(5YR4/8-6/8)/-/-/-/SJ601地山被熱
b層/にふい赤褐色/(5YR4/4)/-/-/-/SJ601地山被熱

SK603a平面図 (S=1/30)



SJ601平面図 (S=1/30)



第6図 矢田野遺跡VI 遺構図(1) <SI18・SK603a・SJ601> (上段S=1/60:下段S=1/30)

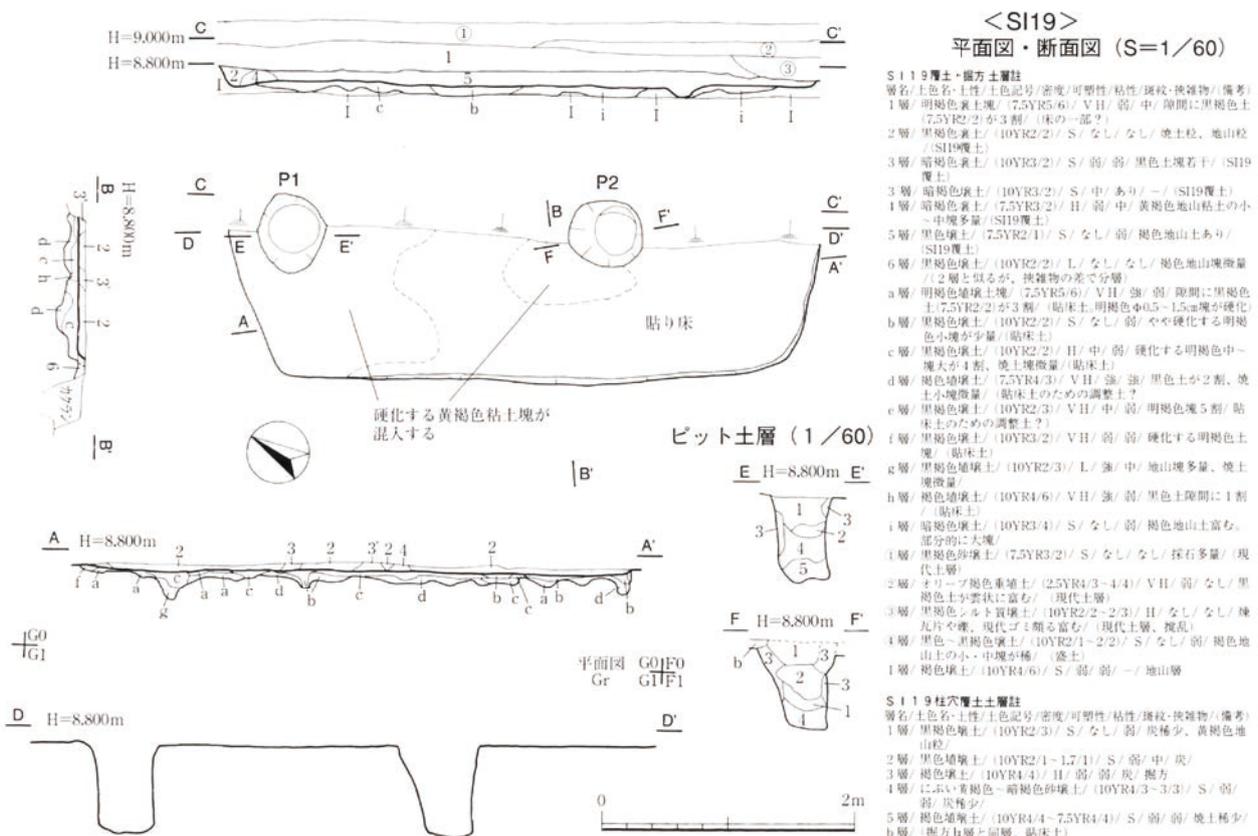
いる。周囲にピットが取り囲んで並ぶため、覆屋または焼成方法に関係した構造をもっていたと考えられる。焼成時の覆い焼きに関連して、周りに杭のようなものが打ち込まれた構造であったものか、もしくは仮設天井のような重厚な構造であった可能性も考えられようが、この時の堅穴状建物と関係は如何ばかりであったか。しかし、7世紀後半代での土師器焼成坑という事例が、北陸では確認出来ておらず、ロクロ成形から非ロクロ成形へと移り変わる時期の、初現期段階の土師器焼成坑と言えようが、いずれにせよ、特異な例であることは間違いない。

SK603土師器焼成坑を切って掘り込まれているのがSK604で、SK603の埋没後というより、掻き出した灰を溜めるために、時間差で機能したようなものと考えられる。SK604上面の一部にかかるように構築されたのがSJ601の焼面である。堅穴状建物の中央に平坦面をもって位置するため、堅穴状建物と併存した可能性は高い。ただし、この形状は本当に平坦であったただけなのか、本来は土坑状で既に周りが削られてしまっているのかは不明である。

② S I 1 9

〈立地・規模・形態〉 G・F-0Grに位置、建物全体の約1/4が検出されたものである。堅穴の深が最大で15cmを測る部分もあるが、殆どが2～6cmの深さしかなく、上面の削平が著しい。堅穴プランは隅丸形状と思われるが、北壁ラインが両柱穴軸に対して歪であり、壁の落ち込みも確認されなかったため、もっと北側にプランが延びる可能性が高い。主軸はN-58°-Eである。

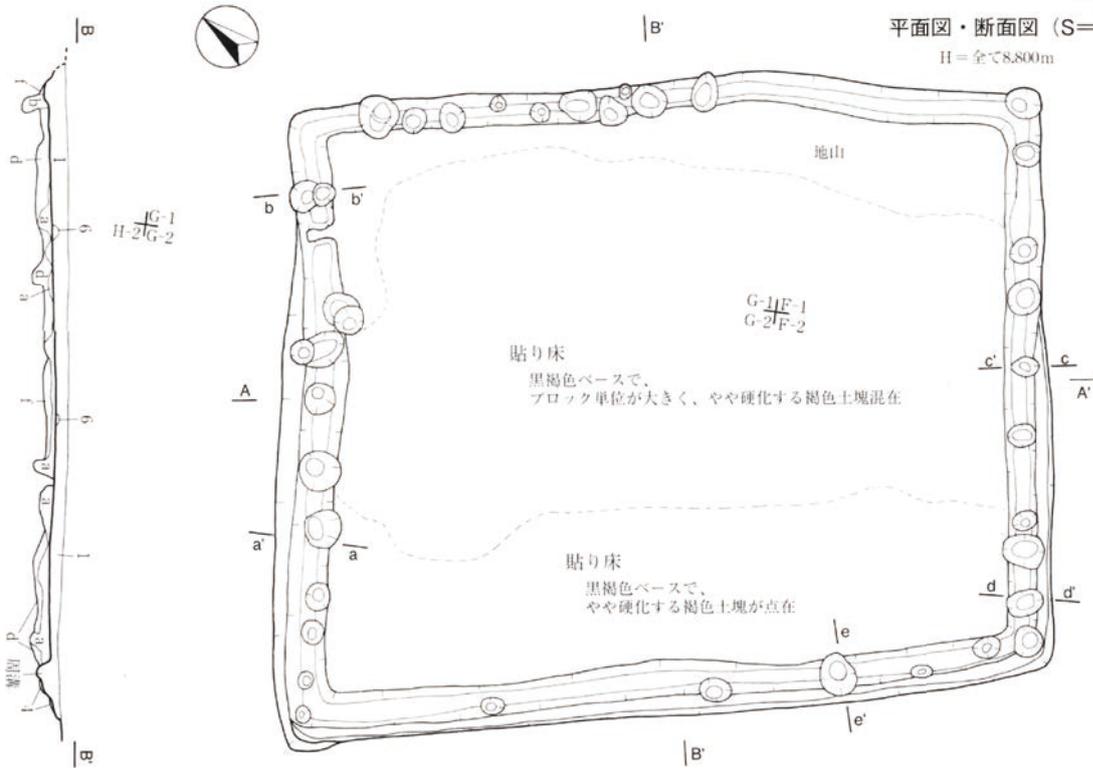
〈柱穴・覆土堆積と出土遺物〉 本来は4本支柱穴と考えられるが、2本のみが検出されており、残り2本は調査区外である。柱穴規模は、径58～64cm、深さ68cm、柱間規模260cmであり、しっかりとし



<SI20>

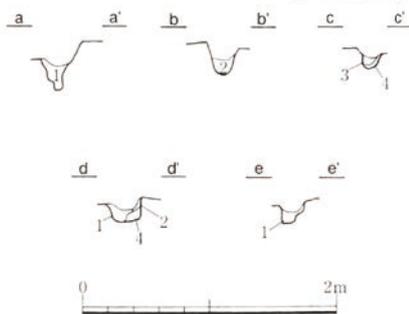
平面図・断面図 (S=1/60)

H=全て8,800m



周溝内ピット土層断面図 (S=1/60)

H=全て8,800m



SI20周溝内ピット土層註

- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/備考
- 1層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/H/弱/弱/黄褐色(10YR5/6)中~大塊多量/
 - 2層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/H/中/強/黄褐色少量/
 - 3層/黒色シルト質壤土/(10YR1.7/1)/S/中/強/明褐色土(7.5YR5/6)4割/
 - 4層/褐色壤土/(7.5YR4/6)/H/中/弱/黒褐色土(10YR2/2)が4割程混在/

SI20覆土土層註

- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/備考
- 1層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/S/なし/弱/地山塊粒、焼土粒、炭粒/
 - 2層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/S/なし/弱/地山粒多量/
 - 3層/褐色埴壤土/(7.5YR4/4)/H/極強/中/黒色土の弱状/(地山でなく、粘土塊)
 - 4層/黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/S/中/弱/褐色粘質塊多量で4割程混在/
 - 5層/褐色埴壤土/(7.5YR4/4)/S/中/中/暗褐色塊2割程混在/
 - 6層/暗褐色壤土/(10YR3/3)/S/中/中/黄褐色地山塊の小~少量混入/

SI20掘方土層註

- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/備考
- a層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/H/中/弱/床レベル部分に、やや硬化する明褐色(7.5YR5/6)小~大塊、最大4cm塊。やや硬化する黒色(10YR2/1)大塊点在/(床構築土)
 - b層/黒褐色壤土/(10YR2/3)/H/中/中/褐色(10YR4/4)小塊/(床構築土)
 - c層/暗褐色壤土/(10YR3/3)/VH/強/弱/黒褐色土(10YR2/3)2割程混在/(床構築土)
 - d層/褐色土壤土/(7.5YR4/4)/VH/強/弱/黒褐色土(10YR3/3)3・4割程混在/(床構築土)
 - e層/褐色土埴壤土/(7.5YR4/4)/VH/強/中/黒褐色土(10YR2/2)1割程混在/(床構築土)
 - f層/褐色壤土/(10YR4/6)/VH/強/弱/暗褐色土(10YR3/3)シミ状/(地山との漸移層)

第8図 矢田野遺跡VI 遺構図(3) <SI20> (S=1/60)

た掘り込みをもつものである。柱穴の土層では、4層のような掘方埋土が認められ、他は抜き取り後の埋土層を示す。検出された柱穴位置から壁の立ち上がりまでの床間隔が狭いことから、竪穴の中央に対して、ずれて柱穴が配置するタイプと見受けられる。

カマドソデ崩壊土が確認できなかったため、カマドは調査区外に位置するものと思われ、覆土を見ると、単層を呈しており、建物廃絶後一括埋め戻しがなされたものと判断される。出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点のみであり、極めて出土遺物は少ない。しかし、掘方から出土した坏G身(図No30)が田嶋編年Ⅱ1期にあたり、図化はされていないがⅡ1~Ⅱ2期に位置づけられる坏Aも出土することから、構築段階ではⅡ1期、その後Ⅱ2期まで使用された可

能性があると考えている。

〈床の状況と掘方〉 床は全面貼床を施している。北側1/3とP2北側位置で、床の弱い硬化が確認できる。貼床は、黒褐色土をベースに硬化する明褐色土塊が3～4割混在するもので、掘方と貼床が一体となった土層断面と深さを呈している。掘方土坑は認められない。

③ S I 2 0

〈立地・規模・形態〉 F・G-1・2Grに位置し、壁周溝と壁支柱を伴う壁立式建物と考えているものである。プランは歪な長方形を呈し、建物規模は、480～510×595～615cm、面積29.95㎡を測る。カマドは検出されておらず、主軸はN-49°-E。

〈壁周溝と壁周溝内ピット〉 壁には、幅25～32cm、深さ5～15cmの壁周溝が廻る。深さについては、東側の溝が非常に浅く10cm以内に留まるものの、他の3本の溝は10～15cmの深さを呈している。周溝内では、ピットが検出された。ピットの規模は様々で、浅くて10cm以内、深くて28cmを測り、ピットの径も大小様々である。ピットは等間隔に並ぶものではなく、密度をもって並ぶ箇所もあれば、東側周溝の南側のようにピットが検出されていない箇所もある。このピット列は木舞の痕跡ではないかと考えている。

〈床の状況・覆土・掘方、遺物出土〉 建物の3/4に貼床が認められ、建物東側は地山床である。貼床は、掘方と一体となった土層を呈しており、黒褐色土ベースにやや硬化する黄褐色や褐色の地山塊が混入する土を主体としている。床面は、中央が若干マウント状を示すものの、ほぼフラットと言えるものであり、標高8.6mを基準としている。

覆土は、5～15cmの厚さで、上面がかなり削平されていることを物語るが、床面近くに地山ブロック塊が僅かに見られる以外は、単層を示す。掘方には、掘方土坑など一切認められない。

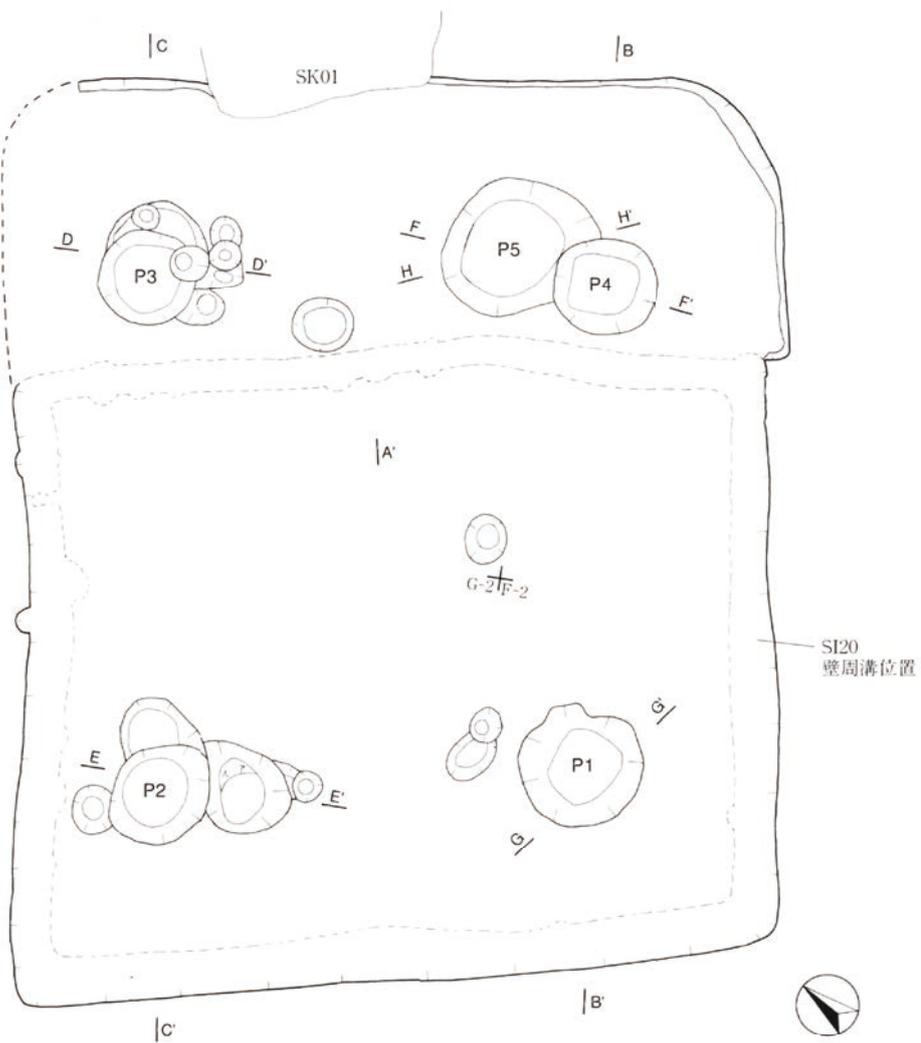
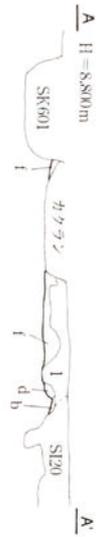
出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具16点のみである。床面に張り付いて出土するような遺物はなく、覆土から出土している。時期はⅠ～Ⅲ期にあたり、坏Hの蓋(図No31)・身(図No32)がⅠ期、7世紀代Da類とDc類当て具をもつ須恵器甕が壁周溝やピットから出土すること、覆土から出土するⅡ1～Ⅱ2期にあたる坏Aが2点、底面にケズリをもつ盤もしくは坏Bの身はⅢ期以降のもので1点、この他、在地型の調整をもつ土師器煮炊具が3点と、ロクロ成形の調整をもつ煮炊具が1点である。

④ S I 2 1

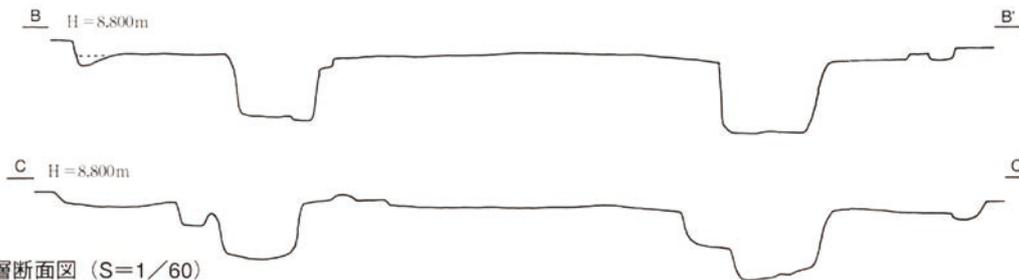
〈立地・規模・形態〉 SI20床下の掘方掘削後に、大型柱穴が検出されたことを受け、改めてSI20建物外の東側を精査したところ、柱穴や部分的な浅い落ち込みが検出された。SI20床面レベルでは柱穴は全く見えなかったため、SI20構築以前に4本主柱の大型建物が存在したと判断したものである。部分的に検出できた壁の落ち込みは、高さ10cm以内である。規模は推定で、740×590～620cm、建物面積は45㎡程になろうと思われる。竪穴主軸は、柱穴軸に合わせると、N-50°-Eとなる。北東壁はSK601に切れ、カマド位置は不明で、カマド被熱や、カマドの地山被熱さえも一切検出されなかった。

〈柱穴・覆土と床・掘方・遺物出土〉 柱穴規模が径80～100cm、深さ50cmを主体にP3のみ40～44cmを測り、しっかりと掘り込みをもつ。柱間寸法は、縦軸で390cm、横軸350cmを測る。廃絶時には全ての柱が抜き取られ埋め戻されており、部分的に掘方埋土が残存している。

覆土と床の境は明確に確認できない状況であった。覆土そのものは、SI20覆土と非常によく似たものであり、殆ど同じと行ってよいかもしれない。掘方についても、掘方埋土らしき土層は確認できていないが、1'層が既に掘方埋土である可能性が伺える。床面が検出されていないことから、この建

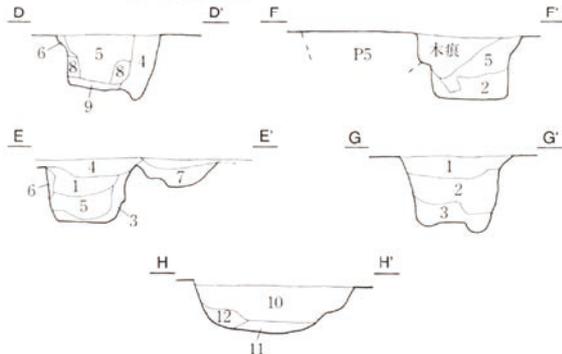


- SI21 覆土・掘方土層註**
 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/(備考)
- 1層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/S/なし/弱/地山塊や多め、焼土粒/(SI20の1層とはほぼ同じ、挟雑物の違いのみ)
 - a層/黒褐色壤土/(10YR2/3)/H/中/中/褐色(10YR4/4)小塊/(床構築土、SI20のb層と同層)
 - b層/褐色土壤土/(7.5YR4/4)/VH/強/弱/黒褐色土(10YR3/2)3・4割程混在/(床構築土、SI20のd層と同層)
 - c層/褐色壤土/(10YR4/6)/VH/強/弱/暗褐色土(10YR3/3)シミ状/(地山との漸移層、SI20のf層と同層)



ピット土層断面図 (S=1/60)

H=全て8.700m



SI21ピット土層註

- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/(備考)
- 1層/黒色シルト質壤土/(10YR2/1)/L/中/中/褐色地山小塊・炭化物多量/
 - 2層/黒色シルト質壤土/(10YR2/1)/L/中/中/褐色土・地山塊多量、一部筋状/
 - 3層/暗褐色壤土/(10YR3/3)/H/中/中/明褐色土(7.5YR5/6)4割/
 - 4層/黒褐色シルト質壤土/(10YR2/2)/H/中/中/褐色地山塊が少量/
 - 5層/黒色シルト質壤土/(10YR2/1)/L/中/中/褐色地山粒/
 - 6層/黒褐色壤土/(10YR2/2)/H/中/中/褐色(10YR4/6)地山小塊が5割程で混在/(掘方土?)
 - 7層/暗褐色壤土/(10YR3/3)/VH/中/中/褐色大塊が3割/
 - 8層/褐色シルト質壤土塊/(10YR4/6)/L/強/弱/隙間に暗褐色土3割/(掘方土)
 - 9層/黒褐色シルト質壤土/(10YR2/2~2/3)/L/中/中/-/
 - 10層/黒褐色壤土/(10YR2/3)/H/弱/弱/褐色大塊多め、所々因まり筋状/(掘方土坑?)
 - 11層/黒色シルト質壤土/(10YR2/1)/L/中/中/-/ (掘方土坑?)
 - 12層/黒色シルト質壤土/(10YR2/1)/L/中/中/褐色小塊少量/(掘方土坑?)

第9図 矢田野遺跡VI 遺構図(4) <SI21> (S=1/60)

物は、SI20よりも上面レベルで建物床があった可能性も考えられる。SI21廃棄後、SI21の床を剥ぎ取る形で更に掘り込んでSI20を構築したと考えるのが妥当でなかろうか。そして、現代カクランにより、SI20建物外の部分のSI21の床も削平されてしまったと思われる。

小型の床下土坑が2基、いずれも柱穴に接して検出されている。P5は、長径122cm深さ36cmを測る、黒褐色土や黒色土で埋められている状態であった。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点のみであり、極めて少ない。

(2) 掘立柱建物

① SB38 I・II

2棟の建物が重複するもので、SB38 Iの後にSB38 IIが建てられている。両者とも西部分が調査区外となるが、当調査区で検出されている他の掘立柱建物から予想すれば、4ないし5間×4間の側柱建物となるのだろう。建物規模は、Iが、桁行推定6.2mまたは7.8m、梁行6.0mで、推定面積37.2m²もしくは46.8m²となる。IIは、桁行推定がIと同様に6.2mまたは7.8m、桁行6.12mで、推定面積が37.94m²もしくは47.73m²となる。IとIIは建て替え建物と考えられるが、同じような規模に留まったようだ。建物主軸は、IがN-40°-W、IIがN-39°-Wとほぼ変わらない。

SB38 IもSB38 IIも、殆どの柱穴で柱圧痕が残っており、柱底面が土に接していた部分が、硬化し、柱設置部分が白色の粘土質となっていて、非常に分かり易い痕跡である。柱径は25cm程である。IもIIも柱間寸法は、概ね140cmか160cmに決まっているものの、柱筋の通りがよいとは言えない。IではP3とP9が柱の中心を通らず、外側にずれて柱に接する配置をとっている。また、IIでは、P6底面の窪みが‘柱のあたり’とすれば、かなりずれることになり、また、P8は内側にずれがみられる。

柱穴規模について、P8はI・II合わせて径156cmを測り、それぞれでは、Iが径60~80cm、深さ30~70cmでP5のみ20cmである。IIでは径72~92cm、深さ30~60cmで、P5のみ5cmと極めて浅く異質を呈すが、他には検出されなかったものである。埋土については、IとIIの分層は困難であった。かろうじて新旧を確認できたのは、P2やP3であり、殆どの埋土が入り混じった層をなしている。II段階でIの柱を抜き取り後、柱穴を埋め戻し、柱位置を南東へ少しずらして構築しているため、I段階の柱穴内埋土がII段階で見られる埋土と混じる現象が非常に多い。

出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点が破片総数で出土する。須恵器食膳具がI期にあたる坏Hの身と蓋、土師器煮炊具はすべて在地型・非ロクロ成形タイプである。

② SB39

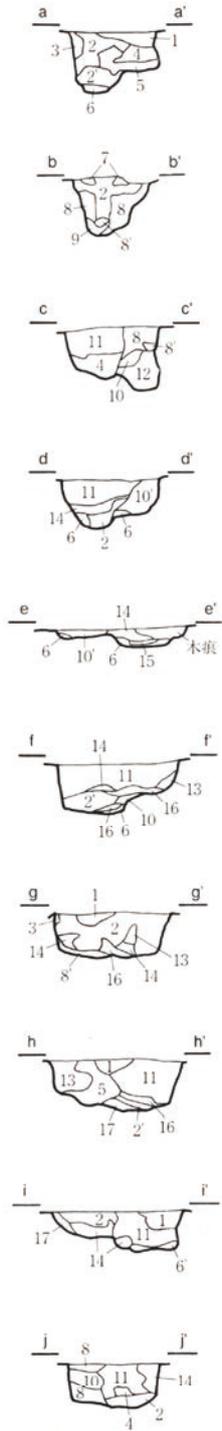
H・I-1・2Grに位置する、桁行9.08m梁行5.8mで面積52.66m²を測る、5間×4間の側柱建物である。SB40・SB41・SB42と重複し、SI20・SI21とほぼ建物軸を同じにもつ。建物主軸はN-52°-E。柱間寸法は120~160cmを主体とし、柱圧痕の検出されている箇所では、全て140cmを測る。桁行それぞれ1カ所ずつでは280cmの値となると箇所があり、中間に柱が1本あればちょうどよいのだが、検出されていない。柱穴プランは擬方形プランが多く、方形を意識するに留まったものであろう。

柱穴規模では、径が64~80cmで隅柱が必ず80cmとなっている。深さは、60cmを主体として、最も深いもので80cm、最も浅いもので44cmを測るものの、底面が標高8.1mラインに収まって中柱にバラツキをもつといったところである。柱は廃絶時に、抜き取られ埋め戻されており、抜き取り方向に一定性はない。P12で‘柱のあたり’が確認でき、この径が25cmである。また、6カ所で柱圧痕が残存しており、この径が20~26cmであった。柱筋の通りは、桁行梁行とも良好である。

出土遺物は、総破片数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊

柱穴 土層断面図 (S=1/80)

H=全て8,600m



SB38 覆土 土層註

層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雜物/ (備考)

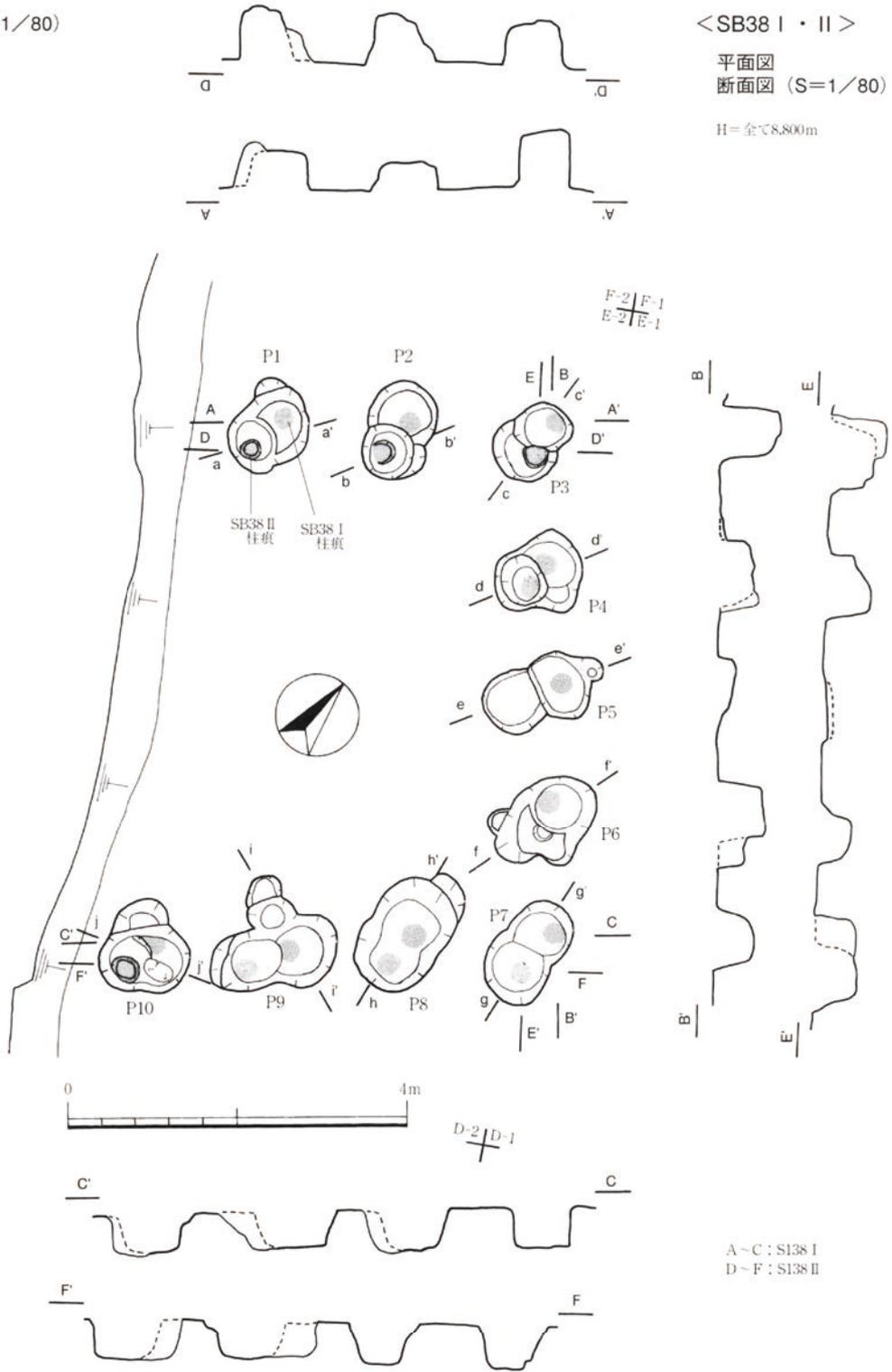
- 1層/ 黒褐色壤土/(10YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ 褐色土塊(7.5YR4/6) 4割混在/
- 2層/ 黒褐色壤土/(10YR2/2)/ S/ 中/ 弱/ 褐色地山微小塊が若干/
- 3層/ 黒褐色壤土/(10YR2/1)/ S/ 中/ 弱/ 褐色地山微小塊が若干(2層と似る)
- 4層/ 黒褐色堆積土/(10YR2/2)/ H/ 強/ 中/ 褐色地山小~中塊多量/
- 5層/ 黒褐色堆積土/(10YR2/1)/ H/ 中/ 中/ 明褐色土(7.5YR5/6)塊5割率で混在/ (しっかり締まって意図的に埋めた印象)
- 6層/ 暗褐色軽粘土/(10YR3/3)/ S/ 強/ 中/ 褐色粘土大塊少量/
- 7層/ 褐色砂壤土/(10YR4/6)/ V H/ なし/ なし/ 黄褐色地山中塊多量/
- 8層/ 暗褐色壤土/(10YR3/3)/ H/ 弱/ 弱/ 褐色大塊(10YR4/6)が4割/(掘方土か?)
- 8層/(ほぼ8層と同層だが、褐色塊の比率が6割)

<SB38 I・II>

平面図

断面図 (S=1/80)

H=全て8,800m



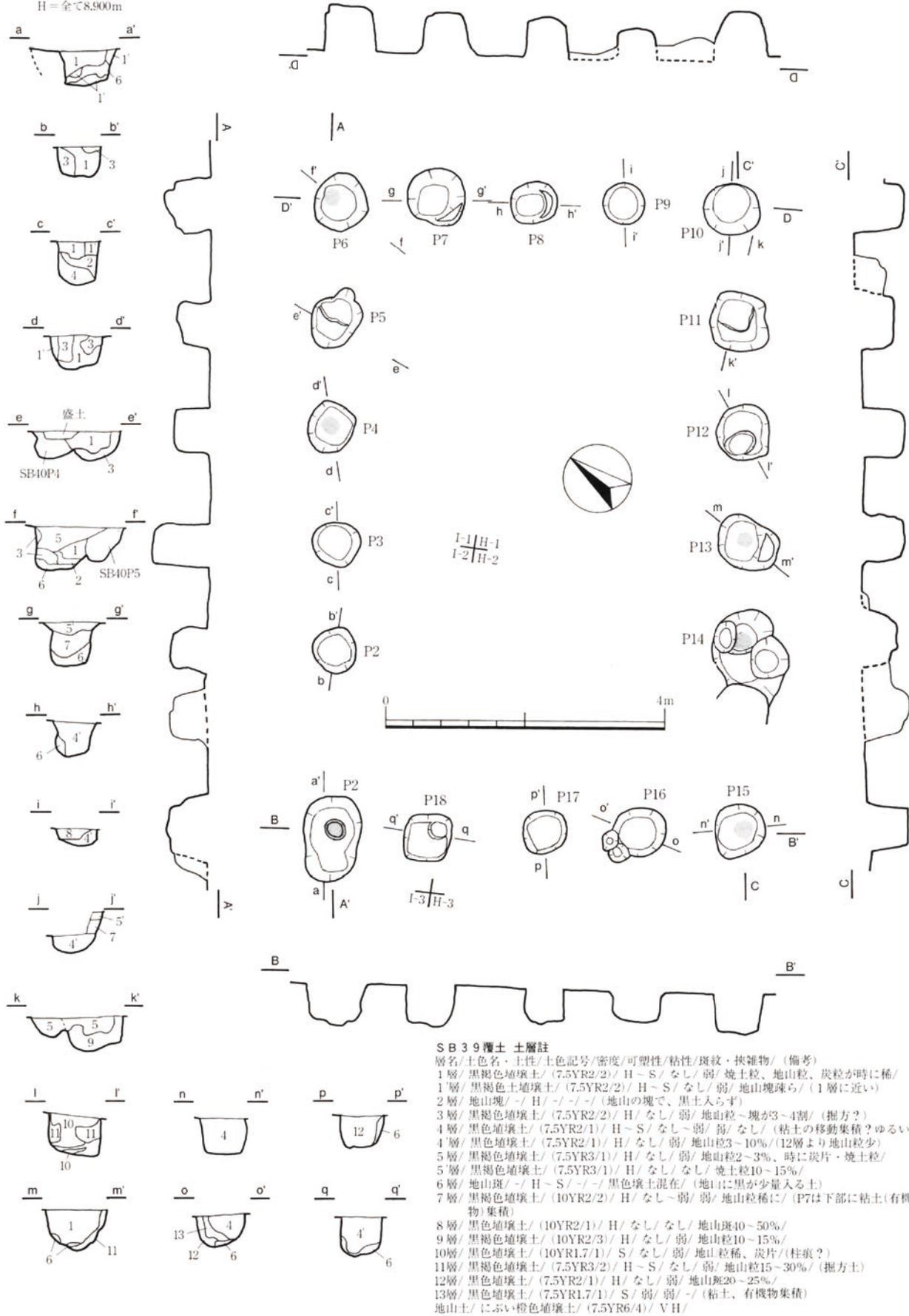
A~C: S138 I
D~F: S138 II

第10図 矢田野遺跡VI 遺構図(5) <SB38 I・II> (S=1/80)

柱穴土層断面図 (S=1/80)
H=全て8,900m

平面図・断面図 (S=1/80) H=全て8,900m

<SB39>

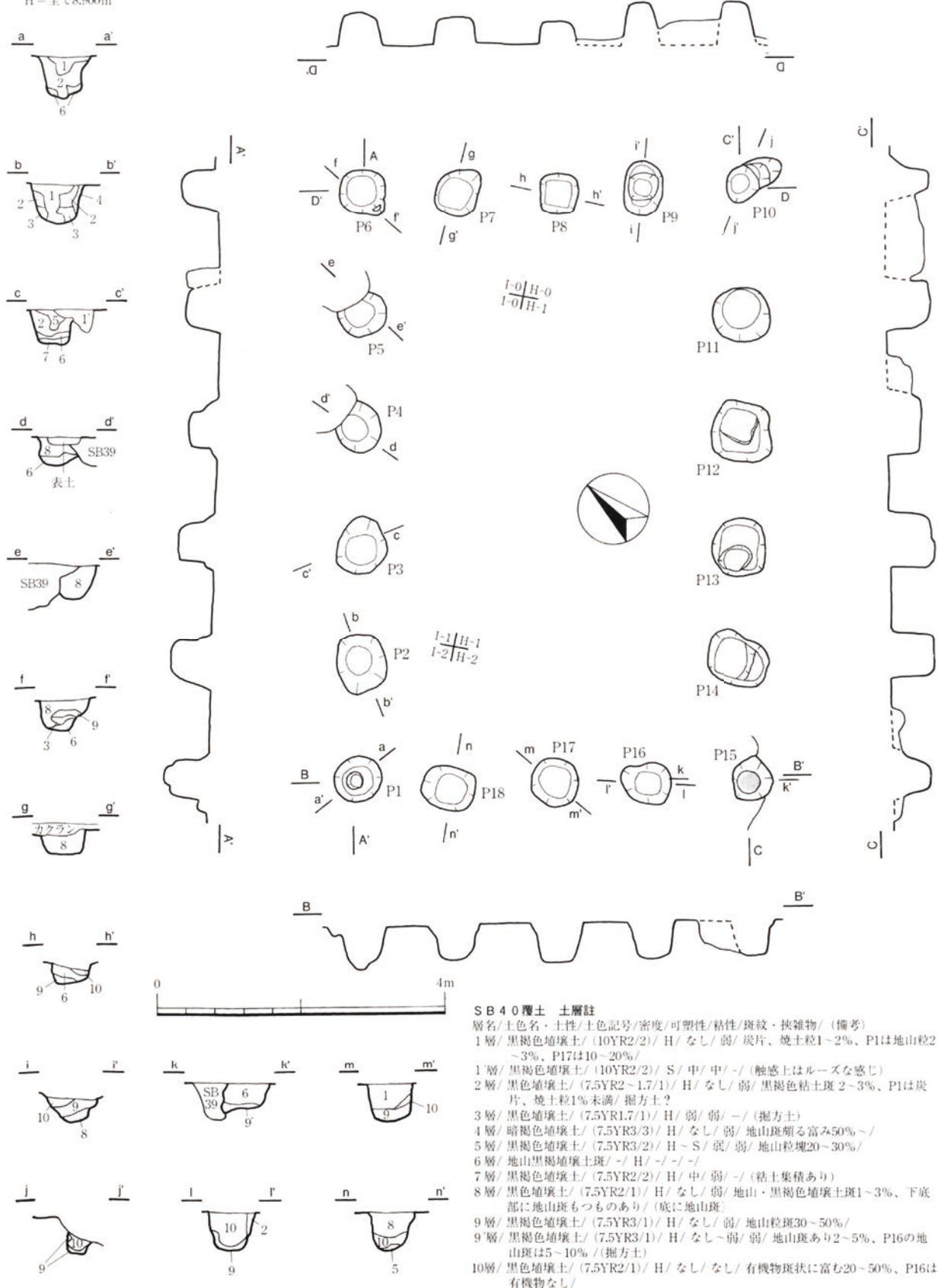


第11図 矢田野遺跡VI 遺構図(6) <SB39> (S=1/80)

柱穴土層断面図
(S=1/80)
H=全て8,900m

平面図・断面図 (S=1/80) H=全て8,900m

<SB40>



第12図 矢田野遺跡VI 遺構図(7) <SB40> (S=1/80)

具20点、鉄滓1点、焼成粘土塊2点である。時期はI・II期にあたり、またIV期の盤Aが1点出土しているが混在したものだろう。前述したようにSI18と接合している遺物があること、また、土師器煮炊具では非ロクロ形成の破片は3点、ロクロ形成のものが17点認められる。

③ SB40

SB39よりもやや東へずれて位置し、SB41・SB42とも重複する。桁行8.2m 梁行5.4m、面積44.28㎡を測る、5間×4間の側柱建物である。建物主軸は、N-50° -Eである。柱間寸法は、桁行が160cmに統一されており、梁行は1間分が120cmとなるが、他は140cmに統一されている。柱圧痕はP15のみ検出されて、径が24cm程である。柱穴プランは擬方形が多いものの、側が揃うということもないため、SB39同様に方形を意識した故と思われる。

柱穴規模は、径65cmを主体に、最大で76cm、最小で60cmを測る。南東桁行の柱穴P11～P14は、SB39柱穴と共有しており、そのために規模が大きい。深さは、52～60cmが主体で、最も浅いもので40cmを測る。柱は、廃絶時に抜き取られ埋め戻されており、抜き取り方向は多方向である。柱筋の通りは、P10がずれているように思われるが、上層カクランのため下底部分のみが検出されている状況なので、全体としては非常に良好と判断される。なお、前述したように、SB39と4本の柱穴が共有されたものか同じ位置にあり、P4・5がSB39柱穴に切られていることから、SB39はSB40の建て替え建物である可能性がもたれよう。

出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具22点である。須恵器食膳具ではI期、土師器煮炊具では非ロクロ成形破片が13点、ロクロ成形破片が9点である。

④ SB41

I-1Gr主体に位置する2間×2間の総柱建物である。建物規模は、桁行4.4～4.72m、梁行3.72～3.84mで、P7のみ桁行と梁行が直行するが、これ以外は直行せず、歪んだ平面プランとなる。建物面積は17.24㎡で、建物主軸はN-45° -Wをとる。柱間寸法も揃うところはなく、176～256cmを測る。柱圧痕が比較的良好に残っており、柱筋の通りについては、P1は外側にずれ、P8は内側にずれるため、柱筋の通りは悪い。しかし、深さがあり、しっかりと掘り込まれた柱穴である。P7では‘柱のあたり’が認められ、この径が20cm、他多く検出されている柱圧痕は、径18～22cmを測るため、柱の太さは20cm程であったと思われる。

出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具18点。

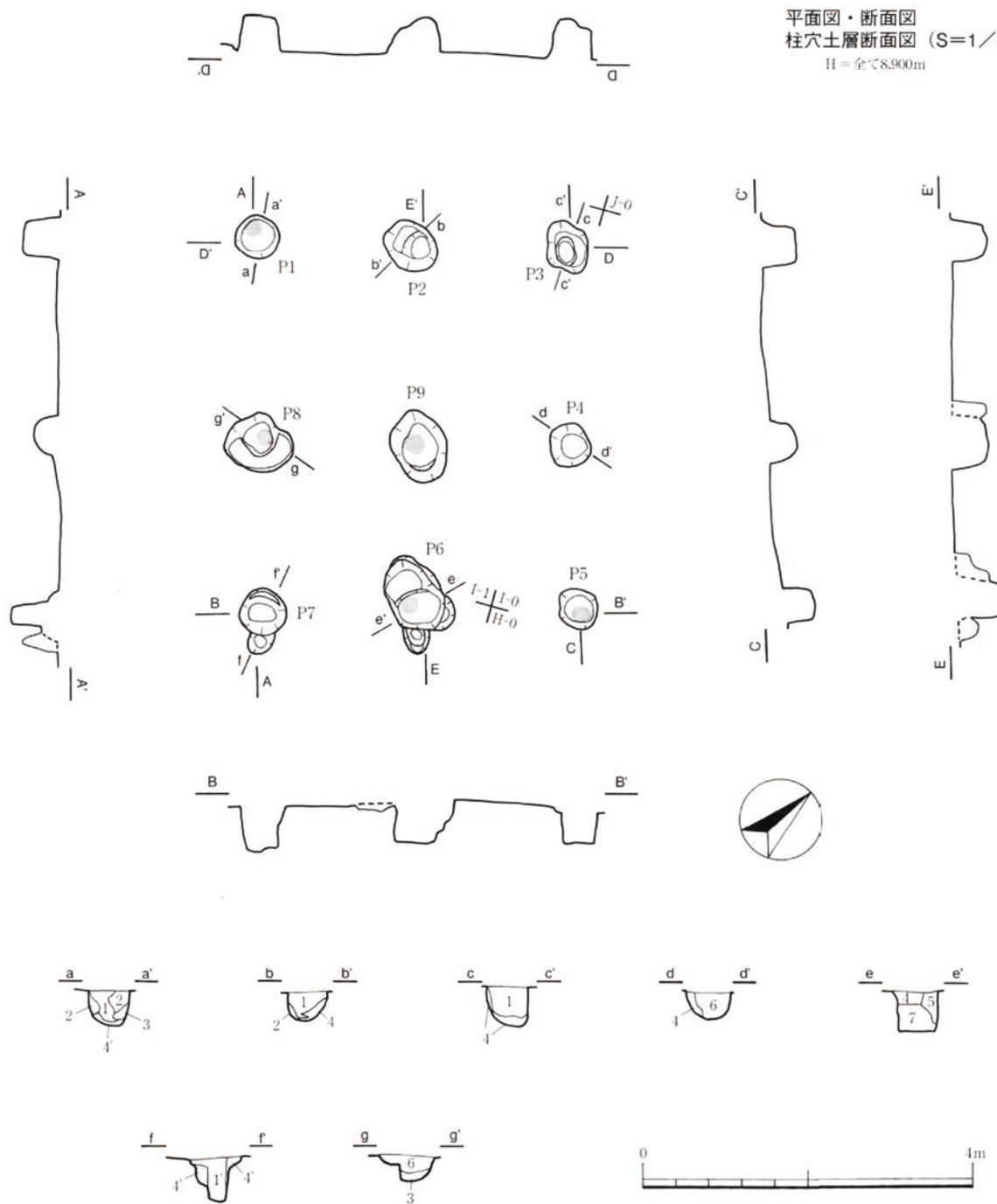
⑤ SB42

H・I-1・2Grに位置する建物で、SB39・SB40・SB41と重複する。建物規模は、桁行6.2～6.6m、梁行6.52～6.6m、建物面積29.18㎡を測る、4間（南東桁行3間）×4間の側柱建物である。現地調査で、P9南側に良好なピットが続いて2本、P13にも続いて1本のピットが並んでいたため、6間×4間の横配置建物と考えて調査していたのだが、掘立柱穴の深さの方が堅穴建物掘方よりも深いはずにもかかわらず、堅穴建物区域から掘立柱穴が検出されなかったため、現地で4間×4間の規模として判断したものである。この建物は北西桁行と南西梁行が直行しておらず、また、南桁行は3間で、他の掘立柱と柱穴を同じにもつという、いずれにしても疑問が残る建物である。やはり、6間×4間の可能性は否定できず、そうなれば桁行9.8mとなって建物面積は64.29㎡となる。建物主軸はN-53° -E。

柱間寸法は、144～172cmで、東梁行は160cmときちんと配置されている。柱穴は不整形円形や擬方形プランを呈し、規模は径60cm前後を主体に、最大でP13の80cm、最小でP3の52cmを測る。深さは、隅柱をやや深めにもっており60cm前後、中柱は40cm程となっている。深さからみても、南桁行の柱穴は、特異な深さを呈している。柱筋の通りは良好であり、柱圧痕が9カ所で検出されている。その径

<SB41>

平面図・断面図
柱穴土層断面図 (S=1/80)
H = 全て8.900m



SB41 覆土 土層註

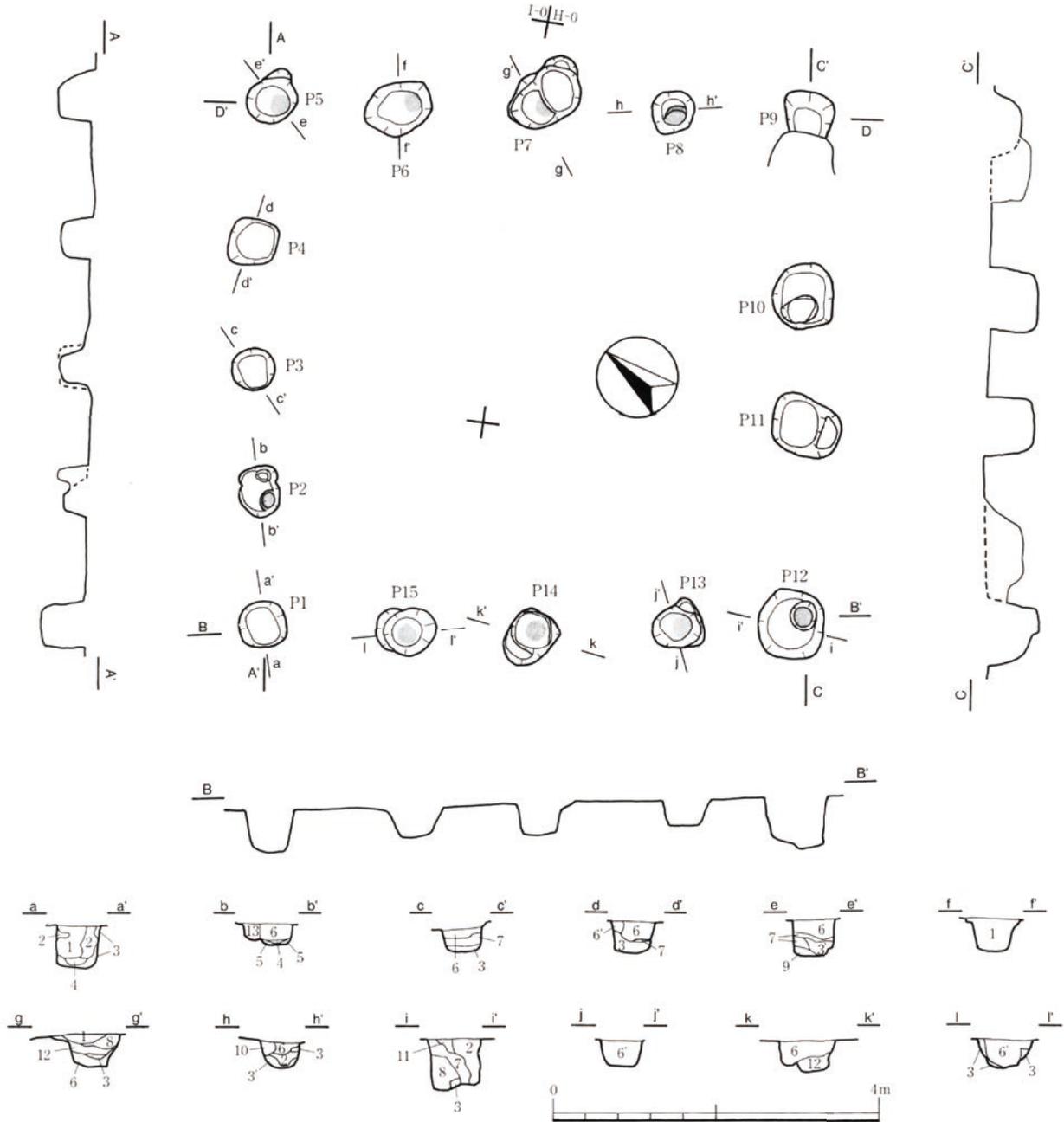
- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/ (備考)
- 1層/ 黒褐色埴壤土/ (10YR2/2)/ H ~ S/ なし/ なし/ 地山粒1~2%/
 - 1'層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山斑1~10%/
 - 2層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR2/2)/ S/ なし/ なし/ 地山粒斑30~40%/ (掘方)
 - 3層/ 黒色埴壤土/ (7.5YR2/1)/ H ~ S/ なし/ 弱/ 有機物あり/ (粘土集積)
 - 4層/ 灰褐色埴壤土/ (7.5YR4/2)/ H/ 弱/ 弱/ 地山斑40~50%/ (掘方?)
 - 4'層/ 黒褐色埴壤土/ (10YR3/2)/ H ~ S/ なし/ 弱/ 地山斑50%位/
 - 5層/ 黒褐色埴壤土/ (10YR3/2)/ S/ なし/ 弱/ 地山斑ほんやり/
 - 6層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR2/2)/ H/ なし/ なし/ 焼土粒1~2%、黒褐色埴壤土斑20~30%/
 - 7層/ 黒色埴壤土/ (7.5YR2/1)/ S/ 弱/ 弱/ 地山粒塊30~40%/ (黒色埴壤土は粘土集積あり)
 - 8層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ 焼土粒1~2%/

第13図 矢田野遺跡VI 遺構図(8) <SB41> (S=1/80)

平面図・断面図
柱穴土層断面図
(S=1/80)

H=全て8,900m

<SB42>



SB42 覆土土層註

層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋/挟雑物/(備考)

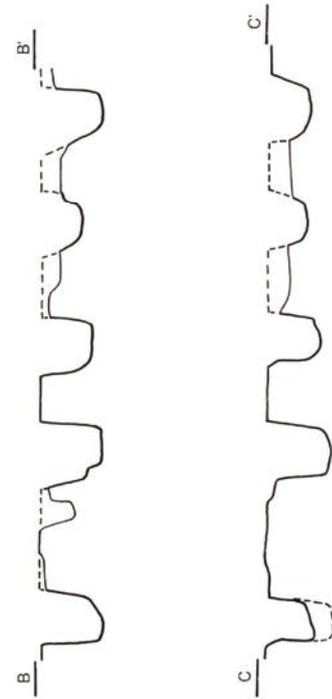
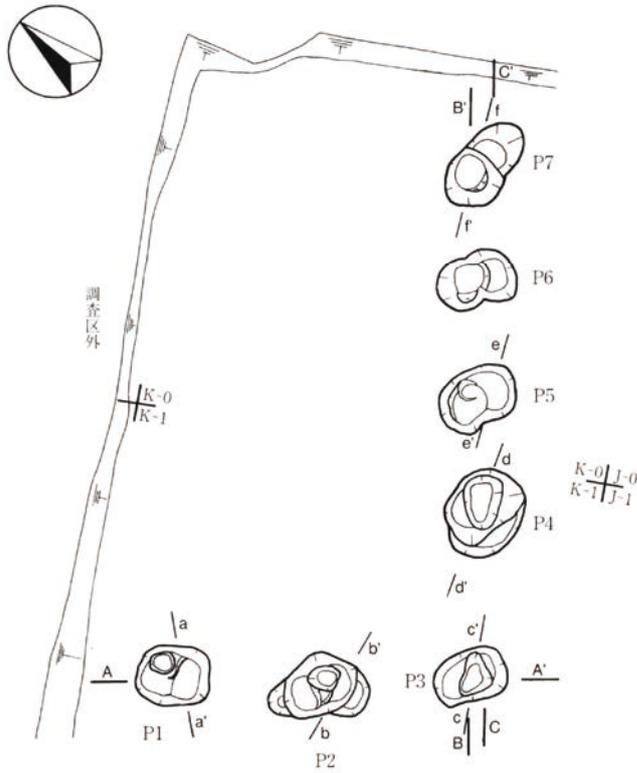
- 1層/ 黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/ H/ なし/ なし-弱/ 黒色粒1~2%または、地山・焼土粒5~10%/
- 2層/ 黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山粒斑40~50%/
- 3層/ 地山斑50%超え/-/ H/ -/-/ 黒色土僅か/
- 3層/ 黒褐色埴壤土/(7.5YR3/1~3/2)/ H/ なし-弱/ 弱/ 地山粒斑40~50%/
- 4層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ H/ 弱/ 弱/-/ (粘土集積)
- 5層/ 黒色埴壤土/(10YR2/1)/ H/ 弱/ 弱/-/ (粘土集積)
- 6層/ 黒色~黒褐色埴壤土/(7.5YR2/1~2/2)/ S~H/ なし-弱/ なし-弱/ 地山粒5%以内または稀に/
- 6層/ 黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山粒1~3%/(ほんやり地山斑)

- 7層/ 黒色埴壤土/(10YR2/1~7.5YR2/1)/ S~H/ なし/ なし-弱/ なし。但しP13のみ稀に地山・焼土粒1%以下/
- 8層/ 黒色埴壤土/(10YR1.7/1)/ S/ なし/ 弱/ 黒褐色埴壤土斑40~50%/
- 8層/ 黒色埴壤土/(10YR2/1)/ S/ なし/ なし/ 地山粒斑50%/
- 9層/ 黒褐色埴壤土/(7.5YR3/2)/ S/ なし/ なし/ 地山粒斑5~20%/
- 10層/ 黒褐色埴壤土/(7.5YR3/1)/ H/ 弱/ 弱/ 地山・焼土粒2~3%/(地山斑ほんやり)
- 11層/ 灰黄褐色埴壤土/(10YR4/2)/ H/ なし/ なし/ 地山斑40~50%、炭片3~50%/
- 12層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ S/ なし/ 弱/ 地山斑10~30%/
- 13層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ H/ なし/ なし/ 地山粒斑5~7%/

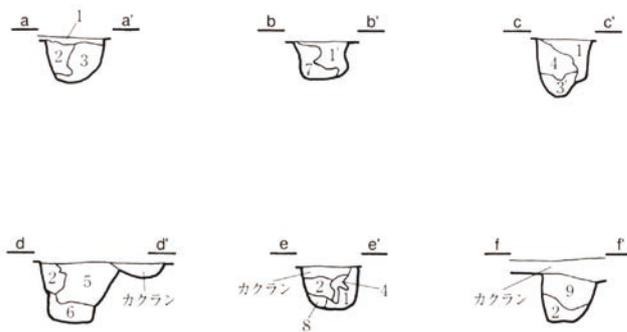
第14図 矢田野遺跡VI 遺構図(9) <SB42> (S=1/80)

平面図・断面図・柱穴土層断面図 (S=1/80)

H=全て8,900m



断面A……SB43 I・II 共通
断面B……SB43 II
断面C……SB43 I



SB43 覆土層註

層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/ (備考)

1層/ 黒褐色埴壤土/ (10YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ P1炭片あり 2~3%、P3地山粒1%以下、P5なし/

1層/ 黒褐色埴壤土/ (10YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山斑30~50%以上/

2層/ 黒色埴壤土/ (7.5YR2/1)/ S/ なし~弱/ 弱/ 地山斑塊/

2層/ 黒色埴壤土/ (7.5YR2/1)/ S/ なし/ 弱/ なし/

3層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 焼土粒5~10%、地山斑30~40%/

3層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR3/2)/ S/ 弱/ 弱/ 地山斑50%以上/

4層/ 暗褐色埴壤土/ (10YR3/3)/ H/ なし/ 弱/ 焼土、地山粒、炭片20~30%/

5層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山粒5~7%/

6層/ 黒色埴壤土/ (7.5YR1.7/1)/ S/ なし/ 弱/ 地山斑/

7層/ 黒色埴壤土/ (10YR2/1)/ H/ なし/ 弱/ 地山斑/

8層/ 地山斑

9層/ 黒褐色埴壤土/ (7.5YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山粒斑・黒色粒10~20%/

第15図 矢田野遺跡VI 遺構図(10) <SB43 I・II> (S=1/80)

は23～25cmが主体であった。建物廃絶時に柱は抜き取られており、若干掘方埋土が残存する状態で埋め戻されている。

出土遺物は、破片総数で、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具22点である。

⑥ SB43I・II

K-0・1Grにあたる調査区の北端から検出された側柱建物である。南桁行4間分、西梁行2間分が検出され、残存桁行5.6m、残存梁行3.4mを測る。建物規模を推定すると、桁行7m梁行6.4m、推定面積は44.8㎡程になるものと思われる。この建物は2棟の建物が重複している。最初に、柱を深く掘って立てた方が先で、これを抜いて少し内側に柱位置をずらし、柱間寸法を若干縮小して、先よりも浅く柱を掘って立て、建て替えたものと考えている。土層断面での確認が難しく、唯一dラインでのみ確認できたため判断した。6層がIを埋め戻した土層で、5層・2層がII段階の廃絶時に埋め戻された土と考えている。建物主軸は、N-51°-E。

柱間寸法は、Iが120・140・160・180cm、IIが120・160・180cmである。180cmという長さについては、P3・4間のみであり、SB39と同様に、建物のこの柱間だけを長くとしている。柱穴規模は、I・IIとも径60cm前後を主体としており、深さは、IのP3が最も深く60cm、他は旧地表に添った掘り込みをもつ。IIは、四隅が深めとなっている。

出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具12点である。

⑦ SB44

F・E-0・1Grに位置する建物で、SI18やSK603と重複し、柱穴2本のみ調査区外で欠けるが、全体の復元は十分可能である。建物規模は、桁行6.6m、梁行5m、建物面積33.0㎡を測る、3間×4間の側柱建物で、建物主軸はN-18°-Eをとる。柱間寸法は、120～232cmを測り、南梁行で柱間寸法120cmが2間分と140cmが1間分で、値が揃っているものの、他では揃う所はない。柱穴規模は、径40～44cmが主体で、最大径72cm。深さは28～32cm測り、浅いもので16cmである。柱は、建物廃絶時に抜き取られているが、‘柱のあたり’を確認することができ、この径が10～14cmである。出土遺物の破片総数は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具3点と極めて少ない。

(3) 土坑

① SK601

G-1Grに位置、SI21を切って掘り込まれている土坑である。規模は、長径170～188cm、短径80～84cmを測り、深さ30cm程、長方形プランを呈している。底面は平坦で、南側では一段低い落ち込みを有す。遺物が出土していないため、時期は不明だが、主体覆土の1層には、含有物が殆ど混入しない黒褐色土であることや、方形プランの形状から、この土坑は墓壇の可能性がもたれる。

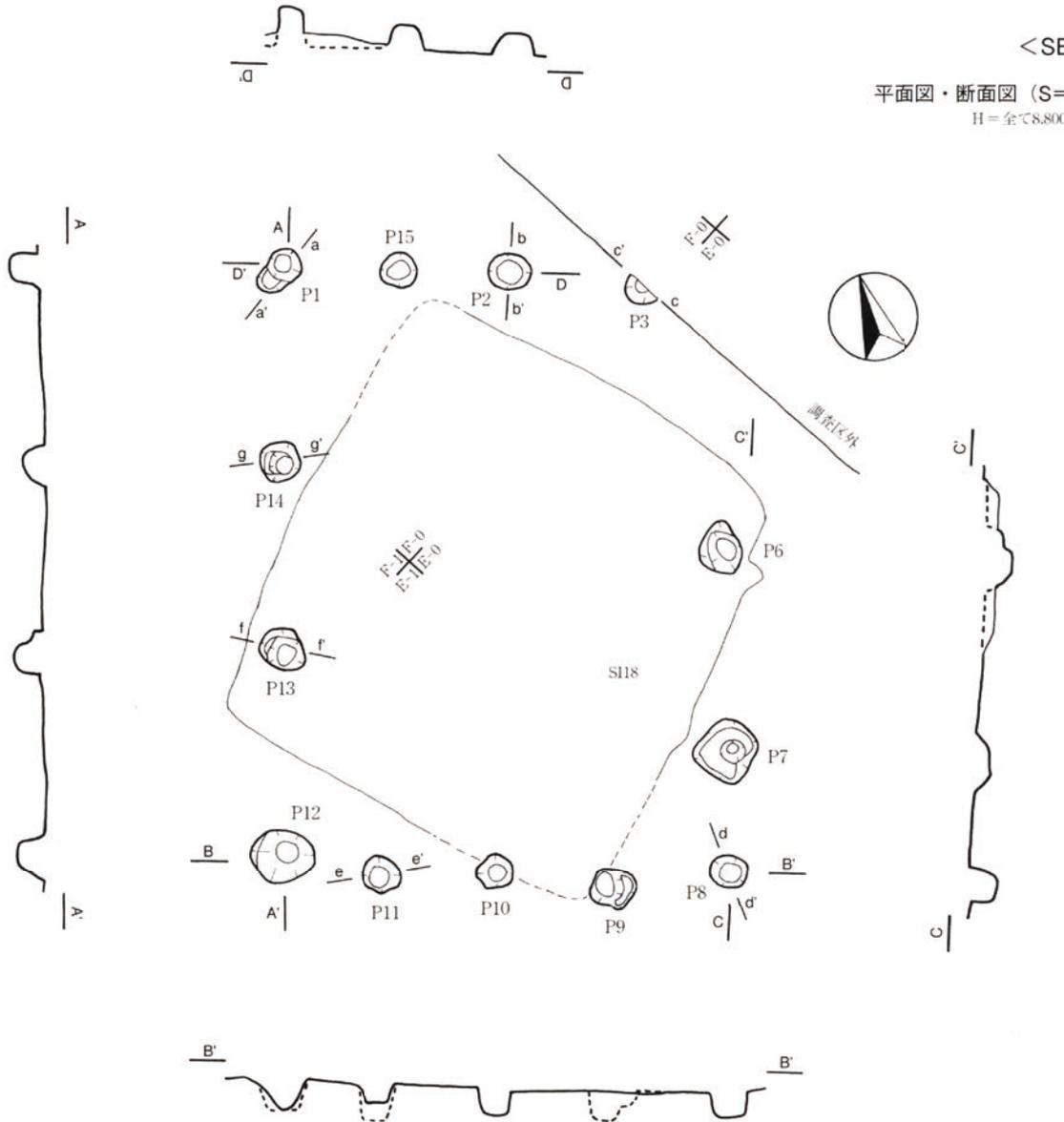
② SK602

長径140cm、短径100～106cm、深さ35cmを測る不整楕円形プランを呈し、底面には北から南へ向かい段状の落ち込みをもつ土坑である。覆土は上下2層を主として埋土が認められるが、自然堆積層であろう。出土遺物は、在地型・非ロクロ成形の煮炊具破片2点、ロクロ成形の煮炊具1点、糸切りの平底赤採塊1点出土しており、I～IV期までの時期幅をもつが、IV期とするのが妥当だろう。廃棄土坑とするには非常に出土遺物が少なく、機能は不明である。

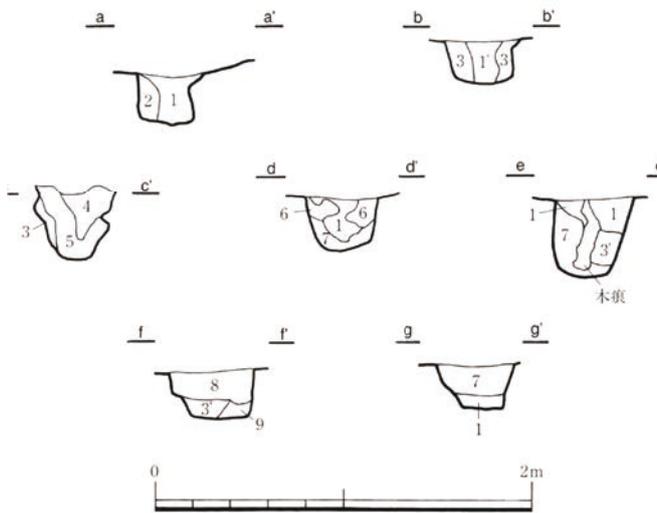
<SB44>

平面図・断面図 (S=1/80)

H=全て8.800m



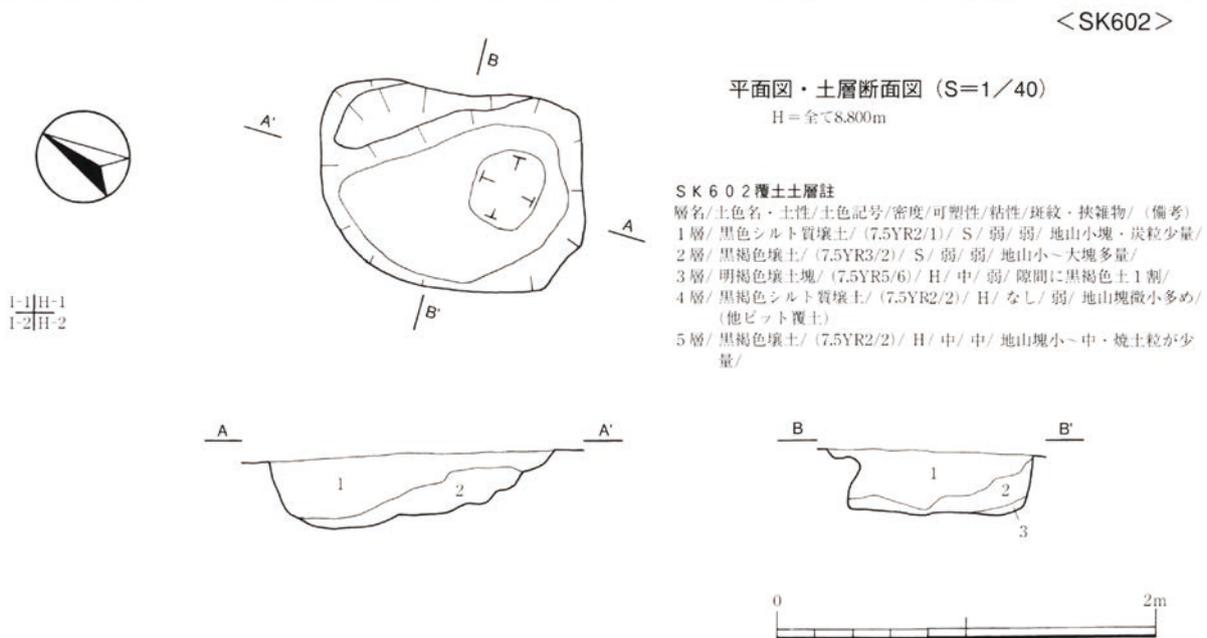
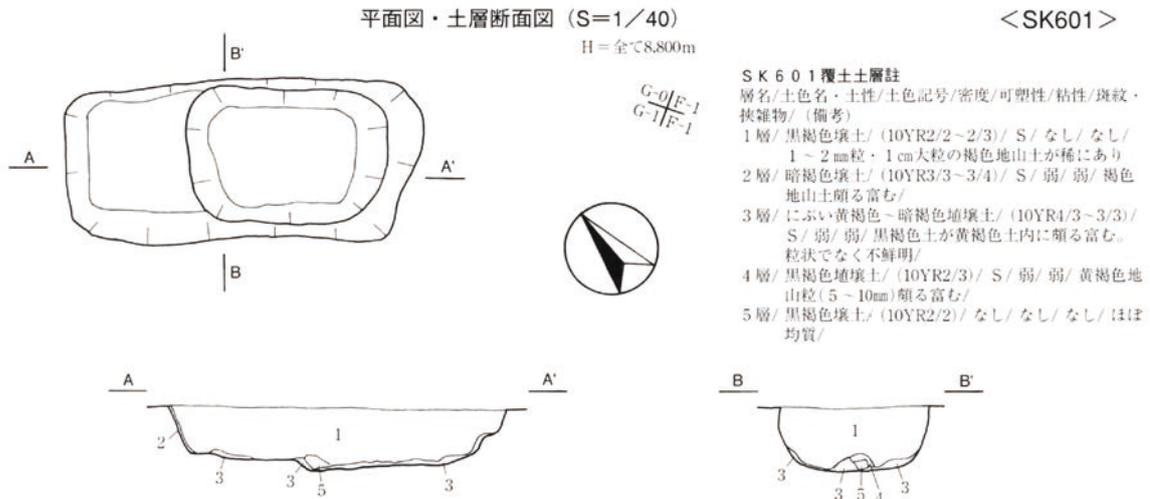
柱穴土層断面図 (S=1/40) H=全て8.700m



SB44覆土 土層註

- 層名/土色名・土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・挟雑物/(備考)
- 1層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ S~H/ なし/ なし/ なし~地山粒斑/
 - 1層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山・焼土粒1~2%/
 - 2層/ 黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/ S/ なし/ 弱/ 地山・焼土粒1~2%/
 - 3層/ 黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/ H/ なし/ 弱/ 地山粒斑・黒埴壤土斑(10YR2/1)20%/
 - 3層/ 黒色埴壤土/(7.5YR2/1)/ S/ 弱~なし/ 弱~なし/ 地山粒斑3~5%/
 - 4層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/2)/ V H/ なし/ 弱/ 地山粒7~10%/
 - 5層/ 黒褐色埴壤土/(7.5YR3/1)/ H/ なし/ 弱/ 地山・焼土粒3~5%/
 - 6層/ 黒褐色埴壤土/(10YR2/3)/ H/ なし/ なし/ 地山粒斑・炭片1%未満/
 - 7層/ 暗褐色埴壤土/(10YR3/3)/ H~S/ なし/ 弱~なし/ 地山斑40~50%/
 - 8層/ 黒褐色埴壤土/(10YR3/2)/ H/ なし/ なし/ 地山粒斑・黒色埴壤土斑50%/
 - 9層/ にぶい褐色埴壤土/(7.5YR5/4)/ S/ なし/ 弱/ 地山斑50%以上/

第16図 矢田野遺跡VI 遺構図(11) <SB44> (S=上段1/80, 下段1/40)



第17図 矢田野遺跡VI 遺構図(12) <SK601・SK602> (S=1/40)

第5節 出土遺物

当遺跡からは、バンケースで8箱の遺物が出土した。遺物破片数では、須恵器食膳具91点、須恵器貯蔵具129点、土師器食膳具266点、土師器煮炊具1,234点、鉄滓2点、焼成粘土塊161点で、総数1,885点である。遺構別データは、表2を参考にされたい。全体を通して、須恵器出土率が低いということが言え、遺構としてのカマドが1基も検出されていないのにも係わらず、土師器煮炊具の出土が非常に多いということが特徴である。集落跡からの出土傾向は、土師器に比べれば大抵低いものだが、それでも須恵器食膳具で出土率が全体の10%弱から20%前後の数値を示す傾向をもつのに対し、当調査区では4.8%と低い。

竪穴建物SI18の項で述べたように、SI18・SK603・SK604・SJ601の出土遺物は、遺構間での接合が

遺構名	須恵器		土師器						石製品	鉄製品関連	焼成粘土塊	
	食膳具	貯蔵具	食膳具			煮炊具						
			計	非ロクロ	ロクロ	計	非ロクロ	ロクロ				
SI18	12	24	126	10	27	479	130	349			57	
SI19	2	1	0			2		2				
SI20	5	5	0			16	10	6				
SI21	1	2	0			7	7					
SE38	2	2	0			7	7					
SE39	5	2	3	1	1	20	3	17		1	2	
SB40	3	0	2	2		22	13	9				
SB41	5	2	1	1		18	11	8				
SB42	2	0	0			22	12	10				
SB43	1	0	2	1		12	9	2				
SB44	1	1	1			3	1	2				
SK601	0	0	0			0						
SK602	0	0	1	1		3	2	1				
SK603	12	10	56		22	204	60	144			68	
SK604	2	1	20		2	125	12	113			30	
SJ601	0	0	21		2	14	4	10			4	
Pit	6	17	7			106	85	21		1	1	
包含層	32	62	26			174	60	114			1	
	91	129	266			1234				2	163	1885
	4.8%	6.8%	14.1%			65.5%				0.1%	8.6%	100%

※土師器でのロクロ、非ロクロは確認可能なもののみカウント

※SK604の土師器煮炊具ロクロ形成品は、焼け弾き品6点を含む

※SK603の土師器煮炊具ロクロ形成品は、焼け弾き品39点を含む

※SJ604の土師器食膳具は、焼け弾き品6点を含む

第2表 矢田野遺跡Ⅵ 遺構別出土遺物破片数データ表

可能であり、焼け弾き品が多量に出土することや、焼成粘土塊の出土も合わせ、これらの遺構群が土師器焼成坑の関連遺構と判断できた。そして、これらの遺構群から出土する土師器は、本調査区の実に7割以上を占める。逆に、土師器焼成坑関連以外の出土量は非常に少ないわけだが、上面がカクランを受けて、遺構が削平されていたことが、少ないことへの要因になるのだろう。

上記のように、当調査区では、土師器が主体で出土するわけだが、ここで、土師器煮炊具について見てみる。非ロクロ成形破片は425点、ロクロ成形破片は809点を数える。非ロクロ成形のものは、所謂、在地型とも言える伝統的な器種、器形、技法を受け継いでいるものである。例えば、胎土に多量の混和材を入れ、口縁が頸部から外側に‘くの字’に反り、成形後に内外の縦ハケを施して器面を調整する、所謂、在地に古墳時代から受け継いでいる伝統的とも言える技法である。これに対し、ロクロ成形破片は、ロクロ回転による工具痕跡が認められるものである。器面には、ロクロ成形後にハケ調整やケズリ調整を行うなどの器面調整を行うが、ロクロ成形という新しい技法と古墳時代から受け継がれてきた技法が融合した、両者の技法をもつものもあれば、ロクロ回転による工具痕跡のみを有するだけのものも認められる。

当調査区では、古来の技法から、新技法への過度的な技法をもつ破片が多いということが言え、これが土師器焼成坑と何らかの関わりがあるものと考えている。

1. 竪穴建物出土遺物

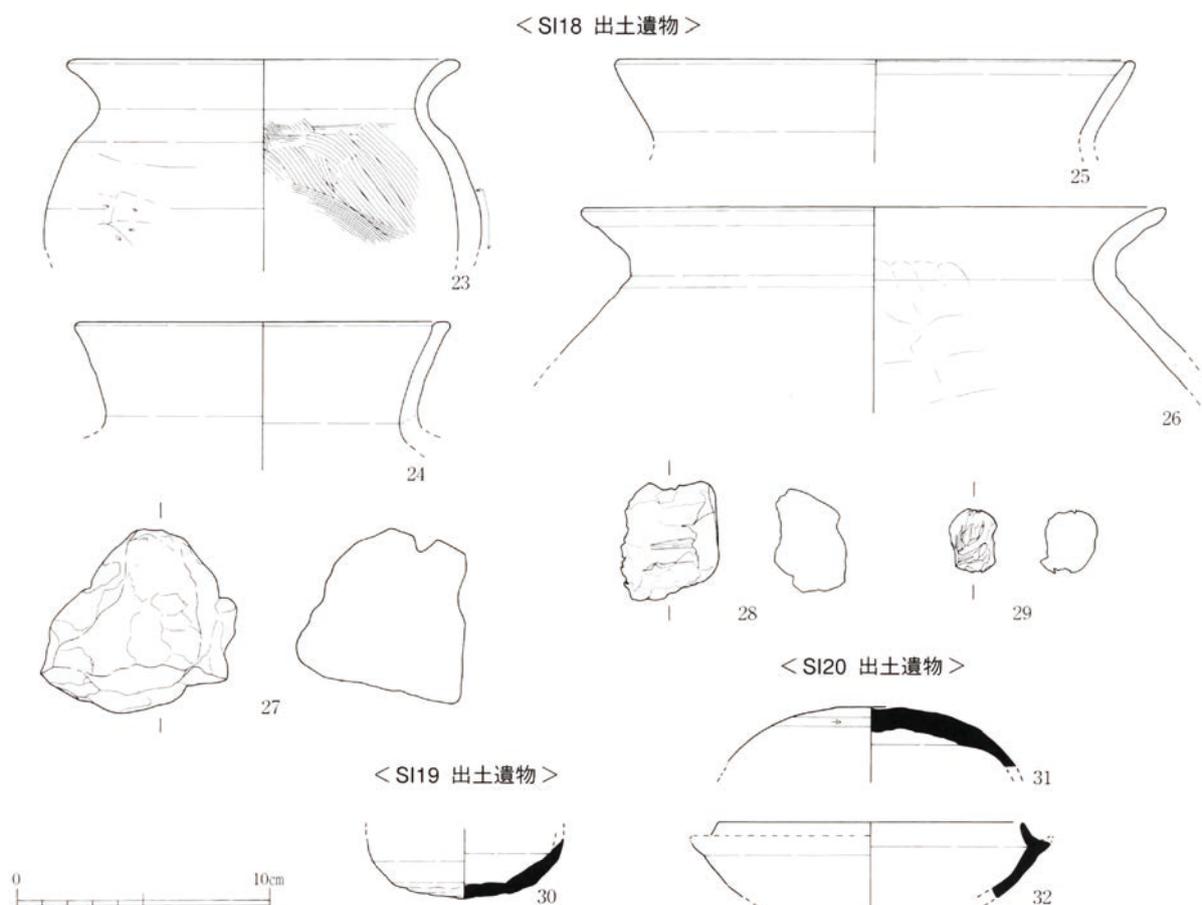
(1) SI18出土遺物

① 須恵器

この竪穴建物から須恵器食膳具は、坏Hが2点（図No1・2）、坏Aが7点（実測は図No3～6）出土している。坏Hは、受け部高が短く内傾する最終段階の様相をもち、多く出土する坏Aは器形や鉗など扁平を呈している。このほか、図No7の甑は、口縁と胴部の接合がしっかりしていないものであるが、



第18図 矢田野遺跡VI 出土遺物(1) <SI18①> (S=1/3)



第19図 矢田野遺跡Ⅵ 出土遺物(2) <SI18②・SI19・SI20> (S=1/3)

同一個体と見なしてよいと思われるものである。生焼け品、つまり焼成不良で柔らかく白色に近い灰色を呈するもので、柔らかいために胴部外面の調整はよくわからないものの、ロクロ成形で、内面には当て具、縦ハケ、指ナデ調整が施されている。

② 土師器

土師器の片口鉢(図No16)は、口径18cmを測り、口縁端部が若干内湾気味で、片方に指で下方へ引っ張ったとみられる片口がつけられているものである。三湖台地では通常みられない器種であり、埴にしては法量が大きく、胴部から口縁に至って垂直気味であり、また、小型鍋にしては法量が小さすぎ、その上、片口である。外面下半にヨコハケ後ケズリを伴い、内面にもケズリ調整が認められる。内面ケズリ調整は、「近江系煮炊具」の10様式(TK10古)に成立した古い調整であり、その後12様式(TK209・TK217、7世紀前半)に内外ハケ調整後外面下半のみケズリ調整といった手法が成立したとされ、この調整は近江甕に見られるものである。しかし出土した片口鉢はこのような調整をもっているものの、胎土は在来型であり、近江系煮炊具の調整の影響を受け在地で作られたと思われる。

土師器高坏は、全てロクロ成形の脚部中空の高坏Gであり、図No8は焼け弾き品である。いずれも内外ミガキや内黒品・赤彩品は確認できず、Ⅱ2期と考えられるものである。

土師器埴は、非ロクロ成形の埴H(図No12)と、ロクロ成形の埴F(図No13・15)が確認できる。埴FのNo13は深身で内面にケズリをもち、No15は深身で体部が開く器形で内面にミガキを施している。両者とも底面にケズリを伴う。まだ、宮都的な様相は認められない段階と考えられる。

煮炊具は、長胴釜、短胴釜、小釜、浅鍋が出土している。この他、口縁端部に面をもつ釜の口縁と考えられるものも出土している。いずれも、非ロクロ成形とロクロ成形のものが認められる。長胴釜は、非ロクロ成形で、頸部内面に横ナデ調整、外面に縦方向のハケ調整を施す、典型的な在来型の手法で作られているものである。短胴釜には、非ロクロ成形とロクロ成形の両者が認められる。非ロクロ成形品の図No20・21は在来型手法であるが、内面はケズリ調整ではなくハケ調整が施されている。小釜は、ロクロ成形で、内面胴部に斜め方向のハケ調整を施し、外面胴部にはハケ調整は見られないが、下半にケズリ調整をもつものであり、近江系煮炊具の影響を受けたものと考えられる。煮炊具からは、典型的な在来型の手法をもつもの、在来型と移民系煮炊具が融合した調整をもつものが認められる。

③ 時期

以上の出土遺物から、須恵器では田嶋編年Ⅰ期と考えられる坏Hが出土しているものの、数量としてはⅡ1以降から出土する坏Aが多いことが上げられる。土師器煮炊具においては、額見2B期（Ⅱ1期）では、「当該階では、在来型に内面ハケ目調整を施すものはなく、在来型煮炊具に移民系煮炊具からの顕著な影響は認めがたい」とされること、次段階である額見3A期で「定型化した坏Aの出現段階」とされることから、時期は、額見3A～3B期、田嶋編年Ⅱ1新～Ⅱ2期に位置づけることが妥当と考えられる。

(2) S I 1 9 出土遺物

当建物からの出土遺物は極めて少なく、実測可能であったのは、図No30の坏G底部のみである。器肉は薄く、底面は丸く、ロクロヒダを顕著にもつものであり、焼成は非常に堅緻で、紫がかった青灰色を呈しており、内面には灰がびっしりとかかっている。この他、実測不可能だったが、須恵器坏A蓋の口縁端部が出土しており、土師器では内面にハケ調整や当て具痕をもつ煮炊具破片が出土する。時期を決定させるには遺物に乏しいが田嶋編年Ⅱ1期～Ⅱ2期になるものと思われる。

(3) S I 2 0 出土遺物

当建物からの出土遺物も少なく、実測可能であったのは、図No31の坏H天井部と、図No32の坏H身である。この他には遺構で記述してとおりであり、時期の詳細を提示するのは難しいが、坏A破片が2点出土していること、7世紀代と考えられる当て具痕をもつ甕胴部破片の出土と、Ⅲ期の遺物がたまたま混入したものとすれば、Ⅱ2期とするのが妥当と思われる。

(4) S I 2 1 出土遺物

この建物からの出土遺物も少なく、実測不可能なものばかりであった。遺物の詳細は遺構で述べた通りなのだが、唯一須恵器食膳具で出土した坏Aまたは坏Bの口縁破片が1点でⅡ期にあたると思われるもの、甕胴部はDb類当て具がみられるので7世紀代のものである。土師器煮炊具は内面ケズリ調整、外面ハケ調整が施されているものばかりで、非ロクロ成形の在来型である。時期を決定付ける遺物は少なく、SI20との切り合いから考えれば、Ⅱ1期以前とするのが妥当だろう。

2. 掘立柱建物出土遺物

(1) S B 3 8 出土遺物

SB38Ⅰ・Ⅱからは、須恵器坏Hの蓋と身が出土しており、両者ともケズリ調整はなく、図No34は受け部が内傾して短く、口径12cmを測るものである。土師器煮炊具は、全て非ロクロ成形の在来型であり、よって時期は、Ⅱ1期までにあてはまることとなろうが、Ⅰ期とするのが妥当と思われる。

(2) S B 3 9 出土遺物

SB39からは、特に土師器煮炊具破片が非常に多く出土する。非ロクロ成形の釜底部（図No40）は、

平底を呈しており、内面にハケ調整が施されるものである。図No39は短胴釜口縁で、くの字口縁という在来型の口縁形態でありながらも、ロクロ成形であり頸部内面にカキメ調整が見られるもの。この他にも土師器煮炊具破片は多く、ロクロ成形破片が非ロクロ成形破片より破片数は多い。ただし、ロクロ成形でありながら、内面ケズリ外面ハケ調整といった在来系調整をもつものや、そうではなく内外カキメ調整のもの、外面にケズリをもつものなども出土しており、移民系煮炊具の影響が顕著に現れているといえようか。勿論この他にも多様な調整をもつものが出土している。平底器形という朝鮮系煮炊具の影響を受けつつも、内面はハケ調整を施すといった、在地化現象と判断できる。よって、SB39は、坏Hの身と蓋や臑といった田嶋編年Ⅱ1期までに位置づけられるものもみられるが、他の出土遺物では額見3A～3B期に時期をもち、田嶋編年Ⅱ1新～Ⅱ2期に位置づけられよう。

(3) SB40 出土遺物

SB40からは、坏Hでケズリを伴った底部や蓋の破片、(図No44)は土師器小型鍋で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を伴う。図化可能だった2点の土師器はいずれも非ロクロ成形のものである。この他にⅡ2期以降に出現する坏Bの蓋天井部分や、口縁端部がⅣ期の特徴をもつ鍋も出土しているものの、各1点ずつである。圧倒的に出土が多いのは土師器煮炊具破片で、在来型の調整をもつものが多い。以上から時期は、SB39との切り合い関係も含め、額見2A期、田嶋編年Ⅱ1期までに収まるものと思われる。

(4) SB41 出土遺物

SB41で図化したのは、天井にケズリをもった坏H蓋(図No46)、体部の立ち上がりが弱く内向する額見2A期に相当する坏H身(図No47)、器肉が薄く口縁端部が外反する器形の図No48は坏A身とした。須恵器中甕口縁(図No50)は、口縁端部にかけて内湾気味で内面に段を有するものであり、Ⅱ期に認められる端部形態である。土師器の短胴釜底部は、平底を呈して内外にハケ調整が認められるもので、平底という朝鮮系煮炊具の影響と、内外ハケ調整という近江系煮炊具の影響も窺えようか。この他に、土師器煮炊具で非ロクロ成形の在来型調整をもつ破片が多いが、ロクロ成形の破片でも在来型の調整をもつものがある。総じて時期は、額見2A～3B期の田嶋編年Ⅱ期にあたるが、Ⅱ期でも初段階のⅡ1期やⅡ2期あたりになるのではないだろうか。

(5) SB42 出土遺物

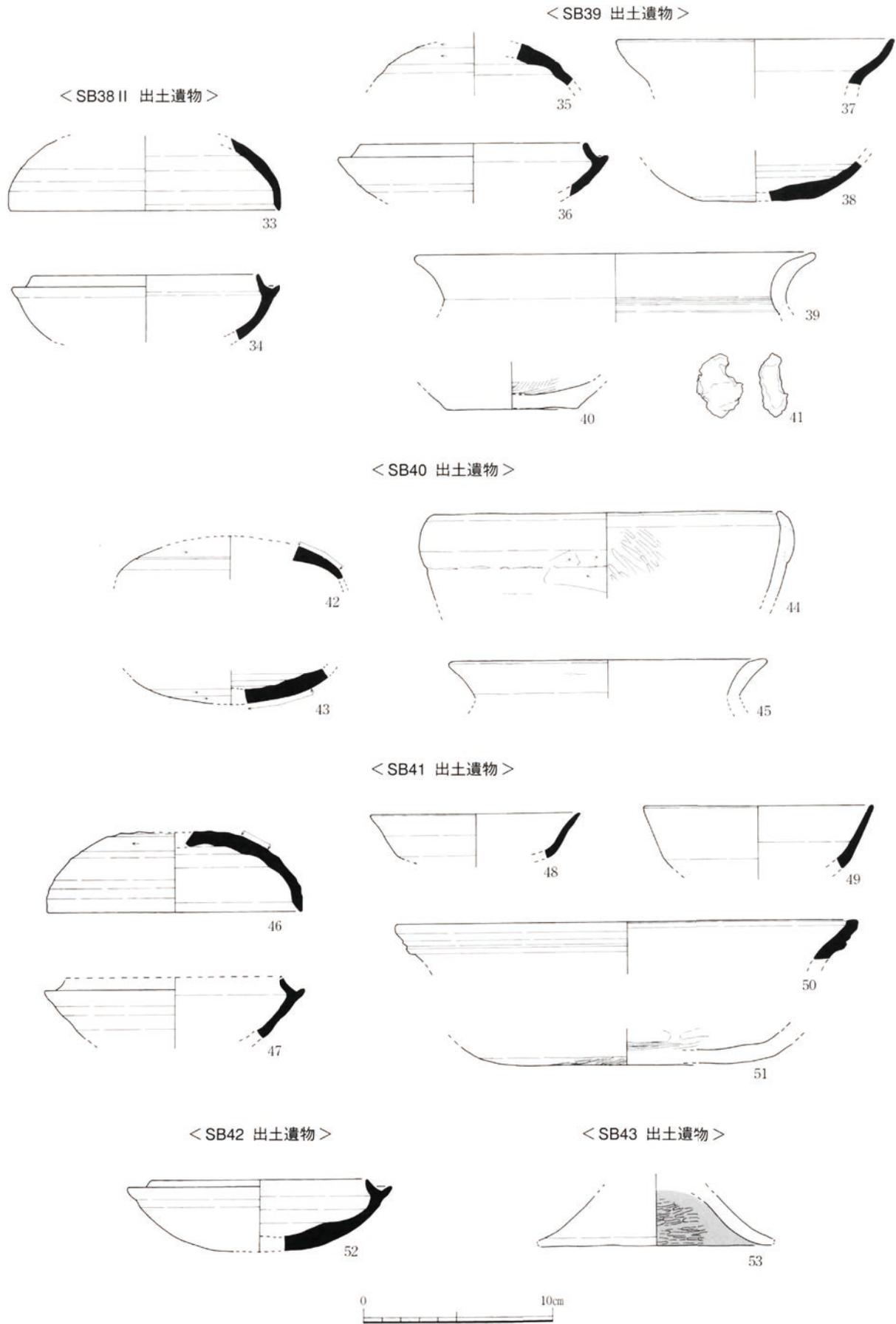
この遺構からの遺物も出土は少なく、図化出来たのは坏H身(No52)1点のみである。この他、Ⅱ3期以降に出現する口縁端部に重焼痕跡をもつ坏A破片が1点出土しており、土師器煮炊具では、非ロクロ成形破片12点、ロクロ成形破片10点が出土し、約5割率といった比率を示す。時期は田嶋編年Ⅱ3期までに位置づけされるとと思われる。

(6) SB43 出土遺物

SB43で図化出来たものは、図No53の土師器内黒高坏の脚部である。外面は剥離が著しく調整をみることができなかったが、内面は内黒が施されヨコミガキ調整がなされており、脚端部の形状から中実になるものと思われる。なお、内黒高坏は、田嶋編年Ⅰ期からⅡ3期まで残る器形である。この他、やはり土師器煮炊具破片が多く出土し、調整は在地化が進んで、様々な調整をもつ破片が認められる。時期は、額見3A～3C期の田嶋編年Ⅱ1期～Ⅱ3期となる。

(7) SB44 出土遺物

SB44で図化できた遺物はない。遺物量については、遺構で既に記述済みである。Ⅱ1期以降の須恵器中空高坏が出土している。



第20図 矢田野遺跡Ⅵ 出土遺物(3) <SB38・SB39・SB40・SB41・SB42・SB43> (S=1/3)

3. 土坑・土師器焼成坑・被熱遺構出土遺物

(1) SK601・SK602出土遺物

SK601から出土する遺物はなく、図化は不可能である。SK602から出土する遺物で、図化したものは、底部が糸切りの土師器赤彩埴F(図No54)である。糸切り痕が見られるのは、田嶋編年Ⅳ期遺構であり、これと相当の時期と位置づけされるものである。

(2) SK603(土師器焼成坑)出土遺物

この土坑からの出土遺物は非常に多い。須恵器では、坏A蓋(図No55・56)は全体に扁平を呈しで、天井にケズリをもち、図No55は天井部から口縁端部から丸く落ち込む形状となっている。図No57も天井にケズリをもった丸い形状のものだが、図No55よりも器高が高い。

土師器の出土は多い。埴F(図No59)は、赤彩ではないものの、浅身で内外にミガキ調整を施され、焼け弾き品でもあり、SI18、SK604、SJ601、SB39と接合出来ている。このような比較的大型の埴もあれば、小型タイプとなる埴F(図No60・61)も出土しており、底部の図No60は内外ミガキが認められるものであり、両者とも質が非常に堅緻で、焼け弾いた品である。土師器高坏は、いずれも中空高坏、ロクロ成型品である。図No62は大型口径の坏部(盤状のもの?)が取り付くと思われるもので、焼き弾きは著しく歪みもある。

土師器煮炊具の釜口頸部(図No66)は、典型的とも言える在来系の非ロクロ成型品だが、他に比べ突出して器肉が厚いものである。浅鍋(図No68)も同じく非ロクロ成形で外面が典型的とも言える縦ハケ調整を施す在来型で、内面はケズリ調整後にナデ調整をし、その後頸部工具ナデを施している。甑底部(図No65・67)は、いずれも焼け弾いており、内面が殆ど剥がれてしまっている。両者ともロクロ成型品であり、図No67は、内外カキメ後に指ナデ調整されている。

この土坑からは、焼け弾き品が最も多く出土しており、またSI18出土品との接合がされていることや出土傾向がよく似ていることから、同時期に機能したと判断してよかろう。詳細は、前述した竪穴建物の①SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601の項で述べている。

(3) SK604出土遺物

この土坑からの出土遺物は、SK603と同様に圧倒的に土師器が多く出土する。実測可能であったものは土師器ばかりだが、出土した須恵器は、坏A破片2点と貯蔵具破片1点のみであった。

土師器の埴F(図No74)は、ロクロ成形で内面にミガキ調整、外面底部にケズリ調整が施されたもので、赤彩は施されていない。短胴釜の胴部(図No77)もロクロ成形で内外に底部張り出しのタタキ・当て具痕がみられ、外面上部にはカキメ調整が施されている。最終調整で内面と外面底部に縦方向のハケ調整を施すという、在来型技法を併用しており、朝鮮系煮炊具が在地化したものと判断できる。この短胴釜は、焼け弾き品である。

この他に図化できたものは、いずれもロクロ成型品ばかりで、全体としてもロクロ成型品が多いのだが、非ロクロ成形の在来型の煮炊具胴部破片も出土している。器種別の出土傾向、またSI18やSK603との接合が認められることから、ほぼ同時期に機能していたものと判断され、詳細については、前述した竪穴建物の①SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601の項で述べている。

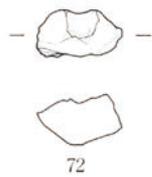
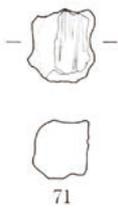
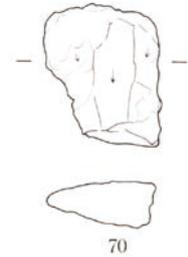
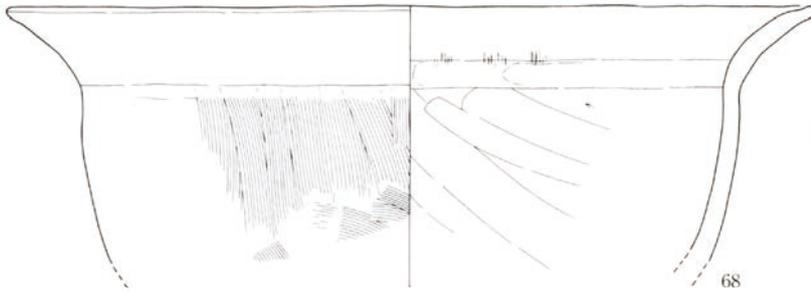
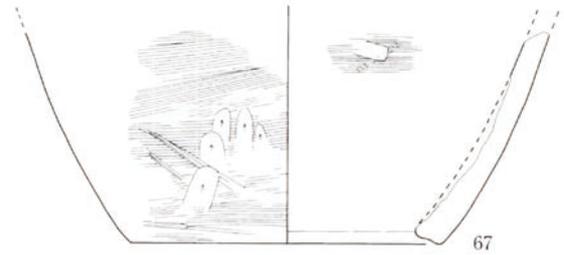
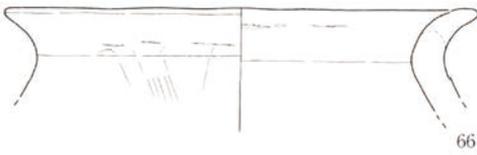
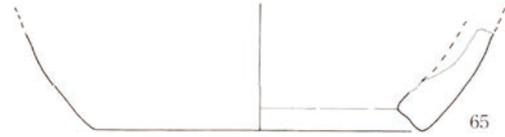
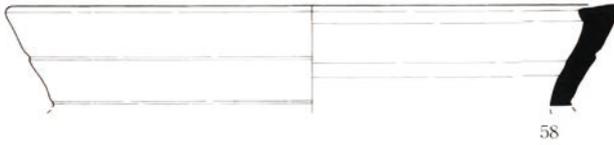
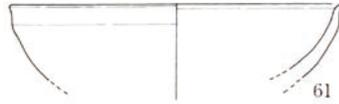
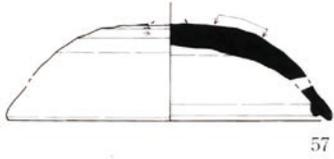
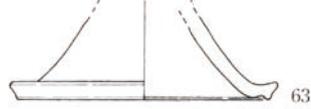
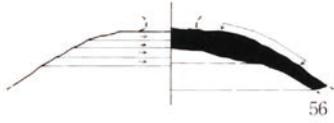
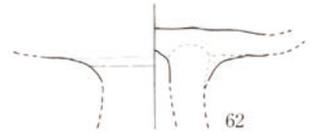
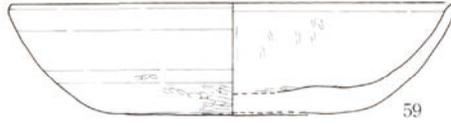
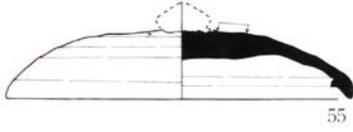
(4) SJ601出土遺物

この焼面遺構からは、土師器のみが出土している。図化した2点の土師器はいずれもロクロ成形で作られたもので、図No80の埴Fは外面底部にケズリが認められ、内面にはミガキが確認できるが、赤彩は施されていないものである。また、図化されているものを含め出土する土師器高坏は全て中空のロクロ成型品である。これに対し、非ロクロ成形の外面がハケ調整、内面にケズリ調整をもつような

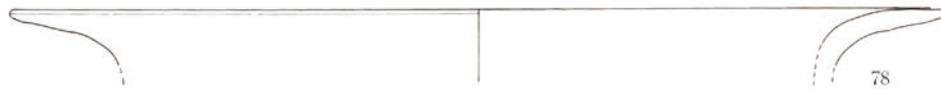
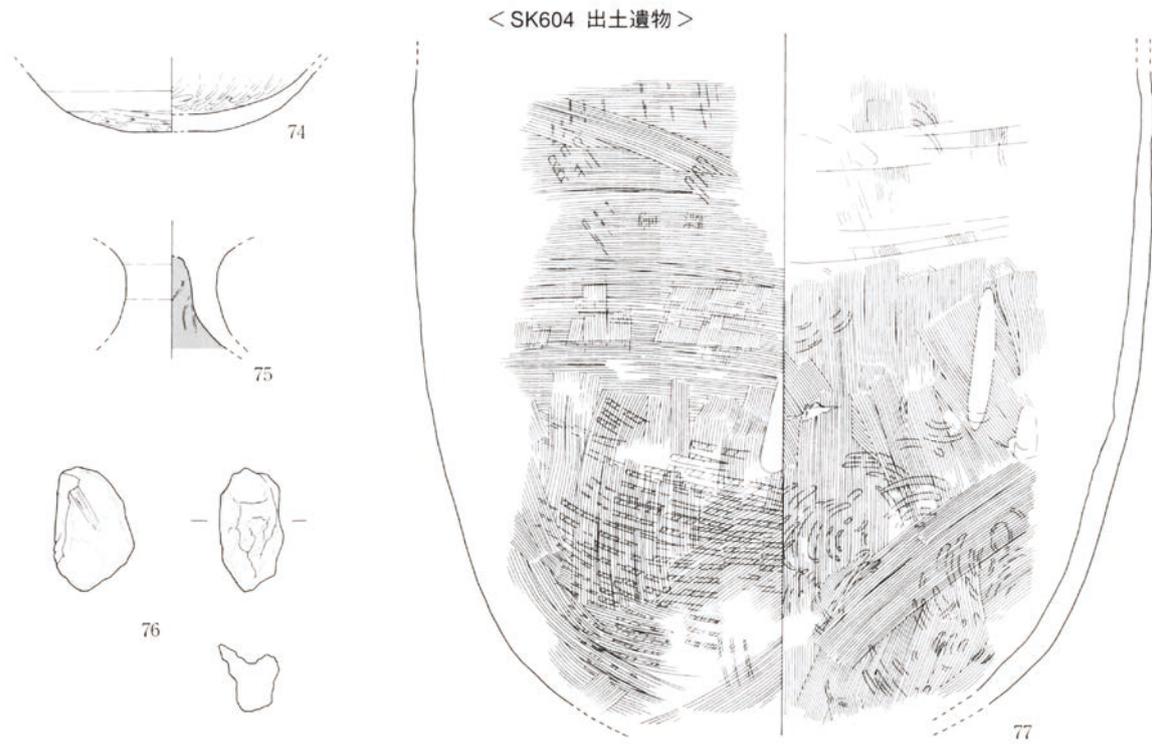
<SK602 出土遺物>



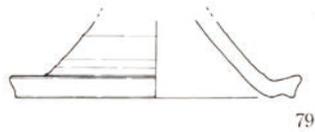
<SK603 出土遺物>



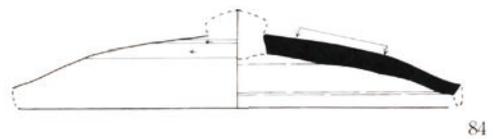
第21図 矢田野遺跡VI 出土遺物(4) <SK602・SK603> (S=1/3)



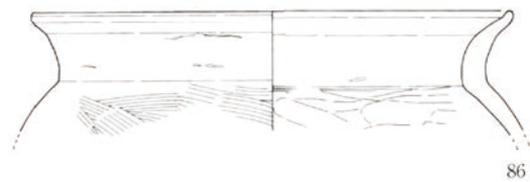
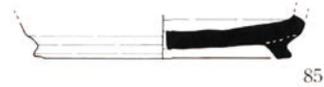
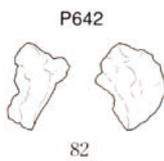
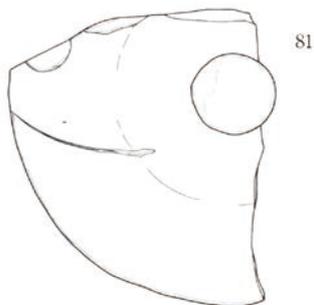
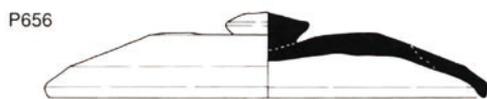
< SJ601 出土遺物 >



< 包含層 出土遺物 >



< ピット 出土遺物 >



第22図 矢田野遺跡VI 出土遺物(5) <SK604・SJ601・ピット・包含層> (S=1/3)

在来型の釜胴部破片も出土している。焼け弾き品も認められ、SI18、SK603、SK604との接合も確認できる。時期は田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期が主体と判断されるが、SI18遺構群の中で遺構の切り合いからみて最も新しい段階のものと考えられる。

4. ピット、包含層（Gr）出土遺物

ピットや包含層から出土する遺物で、特に包含層遺物には時期幅が認められる。遺構から出土する遺物の時期である田嶋編年Ⅰ期～Ⅱ2期は勿論だが、Ⅳ期に相当する遺物が認められる。

5. 焼成粘土塊

焼成粘土塊は、遺構で記述したように、SI18・SK603・SK604・SJ601の遺構群から全体の98%が出土している。全体としてパンケース1箱分であり、総重量は約2.8kgである。最も多く出土しているのはSK603で、5層を主に次いで4層から多量に出土する。その次に多く出土するのはSI18であるが、SK603の半分以下の量である。その次にSK604でSI18の出土量のそのまた半分強であった。

出土する焼成粘土塊は、粘土の質からみると2通りの質をもっている。1つは、土師器胎土と同様の土（Ⅰ類）で、砂の多少により細分類も可能だろうが、ここでは一連のものとしておきたい。もう1つは、粘土がベースとなっているのだが、混和材等を多く混在させているとみえ、軽鬆で脆く、中にはスサ混在の痕跡をもつものもある（Ⅱ類）。

また、粘土の質以外にも、焼成粘土塊の表面に痕跡をもつものがある。

（Ⅰ類）では、押しつけたような平坦面をもつもの、平坦面には稲藁圧痕が認められるもの。稲藁の圧痕のみが認められるもの。粘土紐が認められるもので、稲藁圧痕がみられるもの。板状の粘土を重ねたものを軽く丸めているもの。以上6種類の表面痕跡が認められる。

（Ⅱ類）では、割れているものも多いため、断面に痕跡が残っているものがある。まず、平坦面をもつもの。稲藁が混在するもの。小枝と思われる痕跡をもつもの。工具で撫でつけたような痕跡をもつもの。稲藁圧痕も平坦面も工具痕も認められるものがある。以上5種類の表面痕跡が認められる。Ⅱ類のものは、SI18とSK603でのみ出土している。

第6節 まとめ

当調査区で、最も古い段階（田嶋編年Ⅰ期）の建物はSB38で、これと同時期もしくは少し後に、SI20（田嶋編年Ⅱ1期）が構築される。次の段階（田嶋編年Ⅱ1新期～Ⅱ2期）では、SI18と内部に収まる土師器焼成坑・土坑群、被熱遺構、SI19、掘立柱建物の重複群が構築される。そして、SI21はSI20に建て替え、或いはSI21の廃絶窪みを利用して構築された建物だった可能性をもつ。前段階に収まるかもしれないが、最終的段階にはSB42・SB43（～田嶋編年Ⅱ3期）が加わってゆくと思われる。以上のような建物の変遷を捉えることができる。

大きく捉えれば、7世紀前半には数棟の建物しかなかったのに対し、7世紀中頃から後半に入ると、恐らく工房であろうSI18と土師器焼成坑にて土師器生産が開始され、外来系として知られる壁立式建物SI20や小型建物のSI19、そして掘立柱建物の数も増えて、活性化の様相を見せると言えよう。要するに7世紀前半と後半とで格段の変化がみられるのである。

また、当調査区での堅穴建物からは、造り付けカマドが検出されないという事実がある。調査区が狭いことや、SI19のように調査区外に延びる堅穴建物もあることから、偶然カマドが検出されなかっただけなのかもしれない。通常地山に残る被熱痕跡すら認められず、造り付けカマドを使用した可能性が低いのではないかと思われる。大型建物であるSI21は、当然カマドを伴うべき規模と構造をもつ

ものである。但し、SI20構築時の際に、カマド被熱までも削り取られた可能性も否定できない。勿論、移動式カマドを使用した可能性もあろうが、使用痕跡をもつ土師器煮炊具も極端に少なく、全体として生活痕跡が薄い印象を受けるのである。通常、集落遺跡からの土師器出土率は高い。当調査区もこれに準じ土師器出土率は高い。しかし、出土する土師器はSI18に収まる遺構群、つまりSK603土師器焼成坑と、この周辺に掘り込まれた土坑群から出土するものが、調査区全体の出土数1,500点のうち、1,068点を占める。要するに、土師器全体で71%を占め、また焼け弾き品は、全てこれら遺構群からの出土である。

さて、出土遺物からは、在来系土師器と外来系土師器の併存若しくは在来系土師器の変質や外来系土師器の在地化が認められる。合わせて考えれば、当調査区は、7世紀後半に入り、外来系である壁立式建物（SI20）が建てられ、土師器焼成坑で土師器生産を行うという、新しい土師器づくりが導入され浸透して在地化しつつある段階であるということが、特徴として挙げられる。

このような様相は、望月精司氏が2007「第IV章総括－三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相－」『額見町遺跡Ⅱ（B地区及びC地区一部区域の調査）』で述べられているとおりであり、当調査区はこれを裏付ける形となろう。ここで望月氏は、額見2期を「2期は三湖台地集落群の中で先行して成立した集落が終焉する一方で、新たな集落が成立する画期にあたり、集落再編期であり、従来の‘在来型土師器’に、朝鮮半島や近江、丹波等の移民がもたらしたと予想される‘移民系土師器’が出現するとともに、器種構成においても新旧交代の様相が見えてくる、従来の在来型土師器生産の変質が見られる段階」として、田嶋編年Ⅰ2期を額見2A期、田嶋編年Ⅱ1期を額見2B期としている。また、額見3期を「移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入の段階」とし、田嶋編年Ⅱ1新段階～Ⅱ2最古段階を額見2A期としている。当調査区は、額見2B期～3A期に相当し、主体をおくものと考えられる。

引用・参考文献

望月精司2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落－移民系煮炊具と竪穴建物構造、集落経営の視点から－」『日本考古学 第23号』日本考古学協会

望月精司2007「第IV章総括－三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相－」『額見町遺跡Ⅱ（B地区及びC地区一部区域の調査）』石川県小松市教育委員会

北野博司1988「重焼の観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』（財）石川県埋蔵文化財センター

花塚信雄1984「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会
（財）石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会2006『矢田野遺跡群』

矢田野遺跡Ⅵ 凡例

遺構図について

- ・遺構名称は、竪穴建物跡をSI、掘立柱建物をSB、土坑(焼土坑も含め)をSK、ピットをPとした。
- ・遺構図版内の縮尺は、竪穴建物が1/20、掘立柱建物が1/80、土坑が1/30及び1/40である。
- ・遺構図の中で、掘立柱建物の柱穴内の網点は柱位置を示す。掘立柱建物以外の網点は、被熱部分を示す。
- ・土層註について。土色名、土色記号は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。土性、密度、可塑性、粘性は、日本ペドロジー学会編1997『土壌調査ハンドブック改訂版』に基づいている。なお()内は、名称に対する記号を示している。

「土性」は、野外での土性判定目安として次のように示される。砂土(S)=殆ど砂ばかりで、粘り気を全く感じない、砂壤土(SL)=砂の感じが強く、粘り気は僅かしかない、壤土(L)=ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じ位に感じられる、シルト質壤土(SiL)=砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような触感がある、埴壤土(CL)=僅かに砂を感じるが、かなり粘る、軽埴土(LiC)=殆ど砂を感じないでよく粘る、重埴土(HC)=砂を感じないで非常によく粘る。

「密度」は、判定方法として親指の貫入程度による方法があり、土壌断面を親指で押したときのへこみの程度から次のように区分されている。なお、ここでは「ち密度」を略して「密度」と表記している。すこぶるしょう(VL)=殆ど抵抗なく指が貫入する、しょう(L)=指が土層内にたやすく深く入る、軟(S)=はっきりと深い指のあとが容易にできる、堅(H)=強く押ししても指のあとが僅かしか残らない、すこぶる堅(VH)=強く押ししても指のあとが残らない、固結(EH)=移植コテによってやっと土壌を削れる。

「可塑性」は、力を加えてゆくと変形し、力を除いたときにその変形を保持する能力をいい、可塑性の強弱は、土壌に十分な湿りを与え、親指と人差指の間で粒団を壊し、こねている間に水分が蒸発して土が指に付着しなくなった時に棒状に捏ねて伸ばし、その状態により次のように区分するものである。なし(NP)=全く棒状に伸ばせない、弱(SP)=辛うじて棒状になるが直ぐに切れてしまう、中(P)=直径2mm程度の棒状に伸ばせて、こね直すのに力を要しない、強(VP)=直径1mm程度の棒状に伸ばせて、こね直すのにやや力を要する、極強(EP)=長さ1cm以上の極めて細い糸状に伸ばせて、こね直すのにかなりの力を要する。

「粘性」は、粘着性を略して表記してもので、土壌を親指と人差指の間で押し引き離すときの付着する性質を示し、次のように区分される。なし(NS)=土壌が殆ど指に付着しない、弱(SS)=土壌が一方の指に付着するが、他方の指には付着しない、指を離れた時に土壌は伸びない、中(S)=両指頭に付着する、指を離れた時に土壌が多少糸状に伸びる傾向を示す、強(VS)=両指頭に強く付着する、指を離れた時に土壌が糸状に伸びる。

遺物図に関して

- ・遺物図版内の縮尺は、全て1/3である。
- ・土器の器種名は、基本的に須恵器・土師器ともに食膳具は北陸古代土器研究会で使用するものに準じた。
- ・本書で示した土器編年並びに暦年代観については、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年軸を基本として、1997年北陸古代土器研究会10・11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の南加賀編年修正を加えたもの(=田嶋編年)に準じた。
- ・土器図版中で示す右側断面に書き込んである「」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。
- ・土器図版中の右断面の中の破線は、粘土紐接着痕を示す。
- ・土師器で、薄い網点は赤彩を示し、濃い網点は黒色を示す。

遺物観察表に関して

・焼成、焼き色(色調)で示す用語は、「堅緻」が良好以上の強い堅緻な焼きのもの、「良好」が堅緻よりも焼き締まりの弱いもの、「良」が還元状態は保つが焼き締まりの弱いもの、「不良」は白い還元状態のものや焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。焼き色は、降灰部分や釉付着部分を除いた大まかな色調である。2種類の用語を提示している場合は、その遺物が約半割ずつの焼き色もっていることを示す。

・法量で示した、口=口径、底=底径、台=台径、台高=高台高、つまみ径=蓋つまみ径、つまみ高=蓋つまみ高さ、基=基部径、坏高=高坏部高、高=器高、残高=残存器高、頸=頸部径、頸高=口頸部高、胴=胴部最大径、長=長軸長、巾=最大径、厚=平均厚、最厚=最大厚、孔=孔径を示し、「残」は残存部分での法量を示す。単位はcmである。

- ・完存は、無記であれば全体での完存割合、口、胴、底、坏、脚の表示があれば、その部位のみ完存割合を示す。
- ・胎土で示す用語は、須恵器では、「通常」が南加賀窯跡群の戸津オオダニ地区で通常見られる、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土、「砂多」が、通常の胎土よりも砂の混入が多いもの、「砂少」が砂粒の混入が少ない良質の土を示す。土師器では、「Ⅰ」は、砂が通常の状態に混入しているもの、「Ⅱ」は砂が多く混入するもの、「Ⅱ^{*}」は砂が非常に多く混入するもの、「Ⅲ」は砂が多めだが粘土の木理が細かく粘土を精製した感があり手触りの柔らかいもの、「Ⅳ」は砂が少なく赤色粒のシャモット?が混入するもので手触りは柔らかい、「Ⅴ」は砂が少なく手触りの柔らかいもの、「Ⅵ」は砂の混入は通常だが手触りが柔らかいもの、「Ⅶ」は砂多く、シャモットなど混和材が多いものを示す。

・備考中の重焼痕の分類は、北野博司氏の分類(「重焼の観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』(財)石川県埋蔵文化財センター1988年)に基づき、Ⅰ類は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたもの。Ⅱa類は、蓋を逆位にして身を重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの、Ⅱb類は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋口同士が合わさるように柱状に重ねたものを示す。

・貯蔵具の胴部成形・調整で示すタキ及び当て具の分類については、花塚信雄氏の分類(「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会 1984年)に基づいており、「Ha類」が木目直行の平行文、「Hb類」が木目左下がりの平行線文、「Hc類」が木目右下がりの平行線文、「He類」は木目の見えない平行線文、「Da類」が木目の見えない同心円文、「Db類」が木目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」が柎目状木目が入る同心円文、「SD類」が年輪木目のみが見える細かな同心円文(木製無文)で示してある。

・土師器の色調については、「表」は内外面の表面色調、内外面の表面色調が異なる場合に「内」は内面色調、「外」は外面色調を示す。また、表面に酸化痕跡が認められるものについては、「酸」は表面で酸化した部分の色調、「否酸」は酸化しない表面色調を示し、そして「断」は断面色調、内外断面とも同一色である場合は土色記号のみで記した。色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づく。

第3表 矢田野遺跡Ⅵ出土遺物観察表

掲載 No	写真 No	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	色調	胎土	残存	調整等	備考	備考2
1	1	須忠器	坏H・蓋	SI18-CI区	I113.0,残高2.9	良	内・断: 5GY6/1、 外:10Y4/1	南加賀・ 砂多	I11/36			
2	2	須忠器	坏H・身	SI18-AI区	I114.1,残高2.7	良	10YR7/2	南加賀・ 通常	I12/36			
3	3	須忠器	坏A・蓋	SI18-CI区・8	I112.0,高3.3, 紐1.75,紐高0.85	良好	5Y7/1	南加賀・ 砂多	完形	天井ケズリ、内面中 央3本指ナデ	正位焼、紐歪み。 ロクロ右回転	
4	4	須忠器	坏A・蓋	SI18-DI区・6	I112.0,高3.8, 紐1.8,紐高1.0	良好	10Y6/1	南加賀・ 砂多	完形	天井ケズリ、内面中 央2本指ナデ	重焼IIa類、極歪み。 ロクロ左回転	
5	5	須忠器	坏A・蓋	SI18-9	I112.3,高3.2, 紐1.8,紐高0.95	堅緻	N6/	南加賀・ 砂多	完形	天井ケズリ、内面中 央2本指ナデ	正位焼、紐歪み。 ロクロ右回転	
6	6	須忠器	坏A・身	SI18-DI区	I112.2,残高2.5	不良	2.5Y8/1	南加賀・ 砂多	I12/36		ロクロ右回転	
7	7	須忠器	甌	SI18-CI区+ SK603-5層	I126.9,残存高18.8	不良	5Y7/1~7/2、 内面と外面一 部の表面: 10Y4/1	南加賀・ 通常	1/10	外面:口縁部縦 ハケ、胴部タタキ あり 内面:同心円紋→ 縦ハケ、把手周りに 3 幅工具痕→ 指ナデ		
8	8	土師器	高坏G	SI18-BI区+SI18-4+ SK604-1層+SJ601	I114.0,残坏高 3.95,基4.6,脚8.6、 残脚高5.35	堅緻	表:10YR8/4 断:7.5YR8/3	II	9/10	脚の坏部縁に指押さ え痕	ロクロ右回転、焼き弾き品 で、坏部と脚部の接点ない が、同一個体	ロクロ成形
9	11	土師器	高坏G・脚部	SI18-CI区	脚11.1,残高2.95	良	10YR7/4	I	脚1/4			ロクロ成形
10	10	土師器	高坏G・脚部	SI18-DI区	残高3.8	良	表:10YR7/4、 断:10YR5/1~ 4/1	I	—			ロクロ成形
11	9	土師器	高坏G・脚部	SI18-AI区	脚7.0,残高3.35	良	7.5YR8/1,8/4	V	脚1/4			ロクロ成形
12	13	土師器	塊H	SI18-AI区	I116.0,推高5.75	良	表:10YR8/4、 断:2.5YR6/1、 6/2	VI	1/4	外面ハケ→底面ケズ リ→ナデ、内面ミガ キ		非ロクロ、 在地系
13	14	土師器	塊F	SI18-AI区+DI区	I115.7,底10.6	良好	表:10YR4/1~ 3/1、 断:10YR5/1	VI	1/4	内外底部ケズリ	ロクロ右回転、瓦質。 口縁と底部に接点ないが、 同一個体	ロクロ成形
14	12	土師器	高坏G・坏部	SI18-BI区	I115.6,残高3.5	良好	外:7.5YR7/4、 内・断:	I	I13/36	底部にケズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形
15	15	土師器	塊F	SI18-DI区、SK604・8 層	I118.0,残高6.2	良	10YR7/4	I	1/10	外面底部ケズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形
16	16	土師器	片口鍋	SI18-7+SI18-BI区+ SI18-CI区	I118.0,残高8.9	良	表:7.5YR8/5、 断:N3/	III	1/4	外面:カキメ→ハケ →底部ケズリ、 内面:底部ケズリ	ロクロ右回転、No.30並と 同一個体だが、接点がない	ロクロ成形
17	17	土師器	鍋・底部	SI18-DI区	残高3.4	良	表:7.5YR7/5、 断:N3/	III	底1/5	外面:ハケ→ナデ 内面:胴底部に ケズリ、底面ナデ	外底面に黒斑	ロクロ成形
18	26	土師器	把手	SI18-AI区		堅緻	7.5YR7/5、 10YR7/4	VI	—	ハケ→ケズリ・ 指オサエ		非ロクロ 在地系
19	18	土師器	長胴釜	SI18-1+SI18-B、 SI18A-B・C・D、 SB39・P8、P685	I121.5,頭16.7、 残高13.6	良	5YR7/5	II	1/16	外面ハケ、内面ナデ		非ロクロ、 在地系
20	19	土師器	短胴釜	SI18-BI区	I119.8,頭17.8、 残高3.7	不良	10YR8/4	III	I12/36	外面ハケ、内面ハケ	造り荒い	非ロクロ、 在地系
21	20	土師器	短胴釜	SI18-7	I120.0,頭18.0、 残高8.1	良	表:10YR7/5、 断:10YR5/2	II*	I12/36、全 体で1/8	外面ナデ?、内面ハ ケ→ナデ		非ロクロ、 在地系
22	25	土師器	浅鍋	SI18-DI区+S118-A +SK604・8層	I139.6,残高2.4	不良	表:10YR6/3、 断:7.5YR4/1	VI	I12/36	外ナデ、内ハケ		非ロクロ、 在地系
23	21	土師器	小釜	SI18-2+SI18-BI区	I115.5,頭13.0、 残高7.7	堅緻	10YR8/4	VI	I11/4	外面ケズリ、 内面ハケ	ロクロ左回転、焼け弾き品	ロクロ成形
24	23	土師器	釜・口縁	SI18-AI区	I114.8,頭12.3、 残高4.2	良	表:7.5YR8/4、 断:N4/	II	I11/4		ロクロ右回転	ロクロ成形
25	24	土師器	短胴釜	SI18-DI区+SK603-2 層	I120.2,残高3.3	堅緻	一方は 5YR7/4、 もう一方は 10YR6/3	IV	I11/9		ロクロ左回転、焼け弾き品	ロクロ成形
26	22	土師器	短胴釜	SI18-BI区	I122.8,頭19.0、 残高5.9	堅緻	内:7.5YR8/4、 外:10YR8/2、 断:N5/~4/	VI	I12/36	内面ナデツケ	ロクロ左回転、焼け弾き品	ロクロ成形
27	27	土師質	粘土塊	SI18-DI区	長7.3,短7.2、 最厚6.6	良好	酸:5YR6/6、 7/4、古酸: 10YR7/3、底: 10YR5/2	VI				
28	28	土師質	粘土塊	SI18-AI区	長4.7,短3.9、 最厚2.9	良好	5YR7/6	I			稲葉圧痕、重量35.6g	
29	29	土師質	粘土塊	SI18-AI区	長2.6,短1.9、 最厚1.9	良好	10YR8/4.7/4	V	完形		幾つもの粘土細板を重ね 丸めた形状、重量8.7g	

掲載No	実測No	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	色調	胎土	残存	調整等	備考	備考2
30	30	須恵器	坏G?	SI19・C区・掘方	胴7.7、残高2.4	堅緻	表:N5/、断:5Y4/1	南加賀?砂少	底1/3		ロクロ左回転。内面も降灰蓋なして焼成	ロクロ成形
31	31	須恵器	坏H・蓋	SI20・D区・1層	残高2.35	良	2.5Y7/1	南加賀・通常	天井1/3	外面ケズリ	ロクロ右回転。外面降灰	ロクロ成形
32	32	須恵器	坏H・身	SI20・D区・1層	口112.0、受高0.9、残高3.05	堅緻	表:5Y6/1~5/1、断:10YR6/2	南加賀・通常	111/36		内外、受部割れ口にも降灰	ロクロ成形
33	33	須恵器	坏H・蓋	SE38Ⅱ・P10	口114.3、残高3.35	堅緻	内:2.5YR6/1、外:2.5YR5/1、断:10YR6/2	南加賀?砂少	111/36、全体で1/20		ロクロ右回転。外面降灰	ロクロ成形
34	34	須恵器	坏H・身	SE38Ⅱ・P4	口112.0、受14.2、受高0.85、残高3.4	堅緻	内:5YR5/1、外:2.5YR5/1、5/2、断:10YR5/2~4/2	南加賀・通常	113/36		ロクロ左回転。内外降灰、蓋なして焼成。32と同一の可能性高い	ロクロ成形
35	35	須恵器	坏H・蓋	SB39・P7	残高1.9	良好	2.5YR6/1	南加賀・砂多	—	天井ケズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形
36	36	須恵器	坏H・身	SB39・P18	口112.0、受14.4、受高0.8、残高2.9	良	表:2.5Y6/1、断:2.5Y6/2	南加賀・通常	113/36		外面受部のみ降灰、蓋付き正位焼。体部外面に火ダスキ	ロクロ成形
37	38	須恵器	皿	SB39・P3	口114.8、残高2.5	良	5Y6/1~7/1	南加賀・通常	111/36			ロクロ成形
38	37	須恵器	碗F	SB39・P18	底7.0、残高1.8	良	5Y7/1	南加賀・通常	底1/9	内面指ナデハライ	ロクロ右回転	ロクロ成形
39	40	土師器	短胴釜	SB39・P3	口121.0、頸18.2	良	表:10YR7/4、断:10YR7/4、5/2	Ⅱ	113/36		ロクロ左回転。口縁部、ロクロ右回転のナデ	ロクロ成形
40	39	土師器	平底釜	SB39・P16	底7.0、残高1.0	良	表:7.5YR8/6、7/4、断:10YR8/4	Ⅱ	底1/6	内面ハケ	底ヘラ切り	非ロクロ成形
41	41	鉄関連	鉄滓	SB39・P13	長3.4、短2.45、最厚1.25						重量15g	
42	43	須恵器	坏H・蓋	SB40・P9	—	堅緻	5Y7/1	南加賀?砂少	—	天井ケズリ		ロクロ成形
43	42	須恵器	坏H・蓋?身?	SB40・P2	—	良好	7.5Y7/1	南加賀・砂多	底1/4	ヘラ切り、底部ケズリ		ロクロ成形
44	45	土師器	小型釜	SB40・P18	口118.4、残高4.6	良好	表:10YR8/4、断:5Y6/1	Ⅵ	111/36	外面ケズリ、内面ミガキ		非ロクロ、在地系
45	44	土師器	短胴釜	SB40・P6	口116.8	良好	5YR6/6	Ⅱ	111/9			非ロクロ、在地系
46	46	須恵器	坏H・蓋	SB41・P5	口113.5、高4.3	良	10YR6/1	南加賀・砂多	1/5	天井ケズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形
47	47	須恵器	坏H・身	SB41・P3	受13.9	良	5YR7/1	南加賀?砂少	113/36		ロクロ右回転	ロクロ成形
48	48	須恵器	坏A・身	SB41・P3	口111.2、残高2.45	良好	N6/	南加賀・通常	111/7		外面のみ降灰。ロクロ右回転	ロクロ成形
49	49	須恵器	坏A・身	SB41・P6	口112.0、残高3.4	良好	N7/~6/	南加賀・砂多	111/9		ロクロ右回転	
50	50	須恵器	中甕	SB41・P8	口124.4	良	7.5Y7/1	南加賀・通常	111/36		ロクロ左回転	ロクロ成形
51	51	土師器	平底短胴釜	SB41・P7	底15.8、残高1.1	良	外:5YR7/4、内:7.5Y6/4、断:10YR8/4	Ⅲ	底1/5	内外面ハケ	外面被熱。使用痕	非ロクロ、在地系
52	52	須恵器	坏H・身	SB42・P15	口111.4、高3.8、受14.0、受高0.6	不良	5Y8/1	南加賀・通常	1/7			ロクロ成形
53	53	土師器	内黒高坏	SB43・P6	推底12.6	良	外-断:10YR7/4~7/6、内:10G2/1	Ⅱ	底3/36	内面内黒、ミガキ		非ロクロ、在地系
54	54	土師器	赤彩碗F	SK602・B区	底7.0、残高1.3	良	表:2.5Y5/6、断:7.5Y8/3~8/4	Ⅰ	底1/5	内外赤彩、ミガキなし		ロクロ成形
55	55	須恵器	坏A・蓋	SK603・3層	口113.5、残高2.8	良好	N7/	南加賀・通常	紐欠け	天井ケズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形
56	56	須恵器	坏A・蓋	SK603・B区+SK604・8層	残高2.3	不良	表:10YR8/3、断:5Y8/1~7/1	南加賀・通常	紐・口縁部欠け	天井ケズリ	ロクロ右回転	
57	57	須恵器	坏A・蓋	SK603・4層、SK603・B区、包J-1	口112.7	不良	5Y8/1	南加賀・通常	紐・口縁部欠け、1/36	天井ケズリ		ロクロ成形
58	58	須恵器	甕	SK603・1層	口124.0	良好	外:5Y5/1、断:7.5Y5/1	南加賀・砂多	112/36		ロクロ右回転。正位焼	ロクロ成形
59	59	土師器	碗F	SK603・5層、SK603・2層、SK603・1層、SK604・2層、SI18・B区、SJ601、SB39・P7	口117.2、高4.5	堅緻、不良	7.5YR6/4、10YR3/1、10YR8/4	Ⅵ	1/8	内外ミガキ	ロクロ左回転。焼け弾き品で、色や堅さに違いがある	ロクロ成形
60	60	土師器	碗F	SK603・5層	残高2.5	堅緻	7.5YR7/3~7/4	V	底1/2	ヘラ切り、内外ミガキ	ロクロ右回転	ロクロ成形

掲載 No	実測 No	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	色調	胎土	残存	調整等	備考	備考2
61	61	土師器	埴F	SK603・5層、SK603・4層+S118・B区	口113.0、残高3.0	堅緻	7.5YR7/4	V	口11/6		焼け弾け品	ロクロ成形
62	62	土師器	高坏G	SK603・5層	残高2.15	堅緻	7.5YR7/2~6/2	VI	坏部底1/2弱	内面にヘラミガキ	焼け弾け品	ロクロ成形
63	63	土師器	高坏G	SK603・3層	脚10.0、残高3.3	良	表:10YR7/4、 断:2.5Y5/1	I	脚1/4			ロクロ成形
64	66	土師器	短胴釜?	SK603・1層	残高1.05	堅緻	内・断: 10YR7/2~ 7/4、 外:2.5YR6/4~ 6/6	III	底1/2	外面にケズリ、内面 ハケ→ケズリ	外面、赤化。非ロクロ成形の 技術なのだが、 土はロクロ成形のもの	ロクロ成形
65	67	土師器	甗	SK603・5層+5層下底	底12.8、残高3.9	不良	10YR8/4、7/4	I	底1/5		ロクロ左回転 焼け弾き品	ロクロ成形
66	64	土師器	短胴釜	SK603・1層	口118.6、頸16.0、 残高3.6	良好	外:10YR5/2、 内:5Y4/1、断: 10YR6/2	II'	口11/9	外面ハケ		非ロクロ、 在地系
67	68	土師器	甗	SK603・B区-6-1層	底12.0、残高8.45	堅緻	内・断: 10YR6/5、外: 5YR6/3~6/4	I	底1/7	外面ハケ→ケズリ 内面ハケ	ロクロ左回転。焼け弾き品	ロクロ成形
68	65	土師器	浅鍋	SK603・2層+3層	口131.9、頸26.0、 残高10.2	良好	外:10YR8/6、 内:7.5Y8/3~ 7/6、断: 5YR5/1~4/1	II'	口11/4	外面ハケ 内面、ケズリ→ナデ、 頸部ナデ→ 頸部工具ナデ	外面口縁にスス	非ロクロ、 在地系
69	71	粘土質	粘土塊	SK603・5層	長4.0、短3.7、 最厚2.2	不良	酸:7.5YR7/6、 10YR8/4、舌 酸:10YR6/3、 5/3	VI			重量22.4 g	
70	72	粘土質	粘土塊	SK603・5層	長5.7、短4.6、 最厚1.8	良・ 不良	良:2.5YR6/6~ 6/8、不良: 7.5YR7/6~7/8	VI			工具痕跡。重量33.9 g	
71	70	粘土質	粘土塊	SK603・5層	長2.9、短2.7、 最厚2.4	良好	酸:7.5YR7/6、 6/6、舌酸: 10YR7/4	VI			小枝痕跡? 重量13.6 g	
72	69	粘土質	粘土塊	SK603・5層	長3.4、短1.9、 最厚1.9	堅緻	7.5YR6/2~6/3	IV			小枝痕跡? 重量9.5 g	
73	73	粘土質	粘土塊	SK603・5層	長9.0、短8.8、 最厚4.0	良好	表:5YR7/6~ 6/6、 底:7.5YR7/6、 6/6	VI			指ナデ痕跡。底の平坦面に 桶蓋圧痕。重量227.6 g	
74	74	土師器	埴F	SK604	残高2.45	良好	表:5YR6/6、 断:7.5YR7/4~ 7/6	I	底1/3	外面ケズリ→ミガキ 内面ミガキ	ロクロ右回転	ロクロ成形
75	75	土師器	内黒高坏G	SK604・8層	残高3.6	良好	外:10YR7/2~ 7/4、内: 10YR3/1	II		内面絞り痕跡	ロクロ右回転	ロクロ成形
76	78	粘土質	粘土塊	SK604・2層	長4.9、短2.6、最厚 2.5	良好	酸:10YR6/6、 舌酸:10YR5/3	VI	完形		粘土板状を巻いて丸めた 形状。桶蓋圧痕。重量24.7 g	
77	76	土師器	短胴釜	SK604・1層+2層+8 層下+S118・D区、 SK604・8層+S118・A 区+S118・C区、 SK603・3層	最胴29.1、残高25.4	堅緻	7.5YR7/3、7/4	VI	胴1/2	外面Hc類タタキ・ ハケ→ナデ 内面Hc類当て具・ ハケ→ナデ	ロクロ右回転。焼け弾き品	ロクロ成形
78	77	土師器	浅鍋	SK604・2層+8層下+ SK603・B区、SK604・ 1層、包D-0	口137.1、残高2.3	堅緻	7.5YR7/4	III	口11/7		ロクロ右回転	ロクロ成形
79	79	土師器	高坏G	SJ601床直	底10.9、残高3.05	良好	7.5YR7/6~6/6	I	底1/4		ロクロ右回転。焼け弾き品	ロクロ成形
80	80	土師器	埴F	SJ601	底7.2、残高1.1	良好	表:2.5Y6/6、 断:10YR7/2	VI	底1/5	外面底部~底面手持 ちケズリ、 内面底部ミガキ	ロクロ左回転	ロクロ成形
81	81	須恵器	坏B・蓋	P656	口117.1、高3.4、 鈕3.2、鈕高1.2	良好	N6/	南加賀・ 通常	1/2		ロクロ右回転。正位焼。天井 に「一」ヘラ記号。火ふくれ	ロクロ成形
82	82	鉄関連	鉄滓	P642	長3.4、短2.2、 最厚2.1						重量19 g	
83	83	須恵器	坏A・蓋	包E-0	残高1.7	良好	表:10YR5/3、 断:10Y7/1	南加賀・ 通常	天1/7		ロクロ右回転	ロクロ成形
84	84	須恵器	坏B・身	表土	台10.2、台高0.5、 残高1.7	良好	2.5G7/1	南加賀・ 通常	底1/3			ロクロ成形
85	85	須恵器	坏B・蓋	包D-0	残高2.4	良	7.5Y6/1~7/1	南加賀・ 砂多	天3/36		ロクロ右回転。重焼IIb類	ロクロ成形
86	86	土師器	小甕	包I-0	口118.8、頸17.0、 残高5.0	堅緻	内:10YR6/4、 外:7.5YR6/4、 断:5Y5/1	I	口11/6	外面ハケ、内面ナデ	ロクロ左回転	ロクロ成形

第Ⅲ章 千代オオキダ遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯等

金沢市米泉町在住の山上幸一氏より、小松市千代町乙98番地1での住宅建設計画に伴い、平成18年10月30日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である千代オオキダ遺跡に含まれていたことから、事業者の協力もあり、即座に同日付けで試掘調査を実施した。その結果、一部区域で埋蔵文化財が確認されたため、工事実施の際には保護措置が必要である旨を事業者に伝えた。しかし、当該工事計画が地盤改良工事を実施するものであったことから、工事による埋蔵文化財の破壊が避けられない状況となった。よって、遺跡の破壊が免れない区域約69㎡を発掘調査対象とし、個人住宅建設であるため、石川県教育委員会の同意の下国庫補助事業として実施することで事業者と同意した。これを受けて平成18年11月1日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。平成18年11月2日付けで事業者に対し、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。さらに同日付けで、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会宛に提出された。これにより平成18年11月2日付けで、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が事業者に対し通知され、平成18年11月7日付けで事業者と間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結に至った。発掘調査は、平成18年11月9日から平成18年11月13日にかけて実施した。平成18年11月15日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行った。

第2節 調査の経過

1. 現地調査の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのメッシュを基本として任意に設定した。基準点及び水準点に関しては、業者委託による4級基準点測量及び4級水準点測量を実施し調査区近接地に設置した。

遺跡は、表土より約80cm下に存在したため、調査員立会いのもと、重機で表土除去を行い、その後人力による遺構検出作業を行った。湧水対策のため、調査区南辺に排水溝を掘削し、ポンプによる汲み上げを行った。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的には層位で取り上げる方針とした。

2. 調査の経過

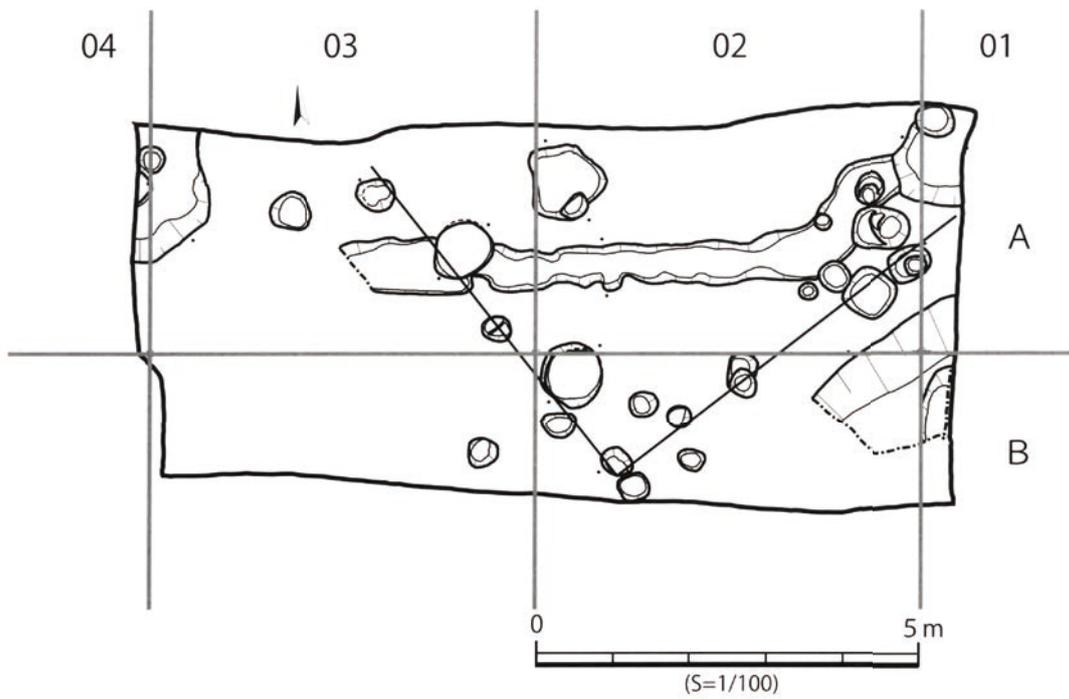
今回の調査は、発掘調査期間の確保が困難な状況であり、休日なしの突貫作業で実施された。発掘調査は、排水溝掘削より開始し、即座に遺構プラン確認および遺構掘削作業に入った。遺構は、調査区全体から確認されたが、調査区西部が広範囲に攪乱を受けてこともあり調査期間に若干の余裕を持つことができた。幸い調査区の土質が降雨に左右され難いものであったため、雨天時でも作業を進めることができ、11月13日までに発掘調査を全て完了することができた。遺構平面図については、調査区内に水系を張る方法で実測し、設定グリッド上の国土座標を測定することで座標軸に合わせた。

3. 出土品整理

出土遺物は少なかったため、調査年度中に洗浄・注記・接合・実測作業を出土品整理作業員により行った。報告年度である平成20年度に、トレース等の作業を行っている。



第23図 千代オオキダ遺跡 調査地位置図



第24図 千代オオキダ遺跡 グリッド配点図

第 3 節 既住の調査

千代オオキダ遺跡は、今回の調査以前に、昭和62年度～平成元年度に石川県立埋蔵文化財センター（現財団法人石川県埋蔵文化財センター）によって、発掘調査が行われている。その結果、弥生時代～中世に至るまでの大規模な複合遺跡であることが確認された。また、平成11・12年度に国道8号線小松バイパス建設に伴い11,000㎡を、平成12年度に工場建設に伴い330㎡を小松市教育委員会が調査しており、同様の結果を得ている。今回の調査地点は、市教委の調査区より直線距離で約500m北東方向に離れた位置にあり、県調査における平成元年度調査区A区に近い。その県調査区では、古墳時代前期～中期、7世紀後半～8世紀中頃、12世紀～13世紀代の遺跡が確認されており、本調査区も同様に遺構が複合して検出されることが想定された。

第 4 節 発見された遺構

1. 基本層位について

当該調査区の現況は畑地であり、地表より80～90cm下が遺構確認面である。一部区域で地山直上に厚さ約10cmの黒褐色埴壤土の遺物包含層が確認されている。遺構確認面の標高は、概ね3.6m前後であり、鍋谷川西岸に広がる微高地に位置している。調査区より約50m南の地点では、湿地帯の堆積状況を呈し、遺構面の確認ができない状況である。千代オオキダ遺跡では、点在する微高地の区域ごとに集落が営まれていることが理解できる。

2. 古代の遺構

(1) 掘立柱建物跡

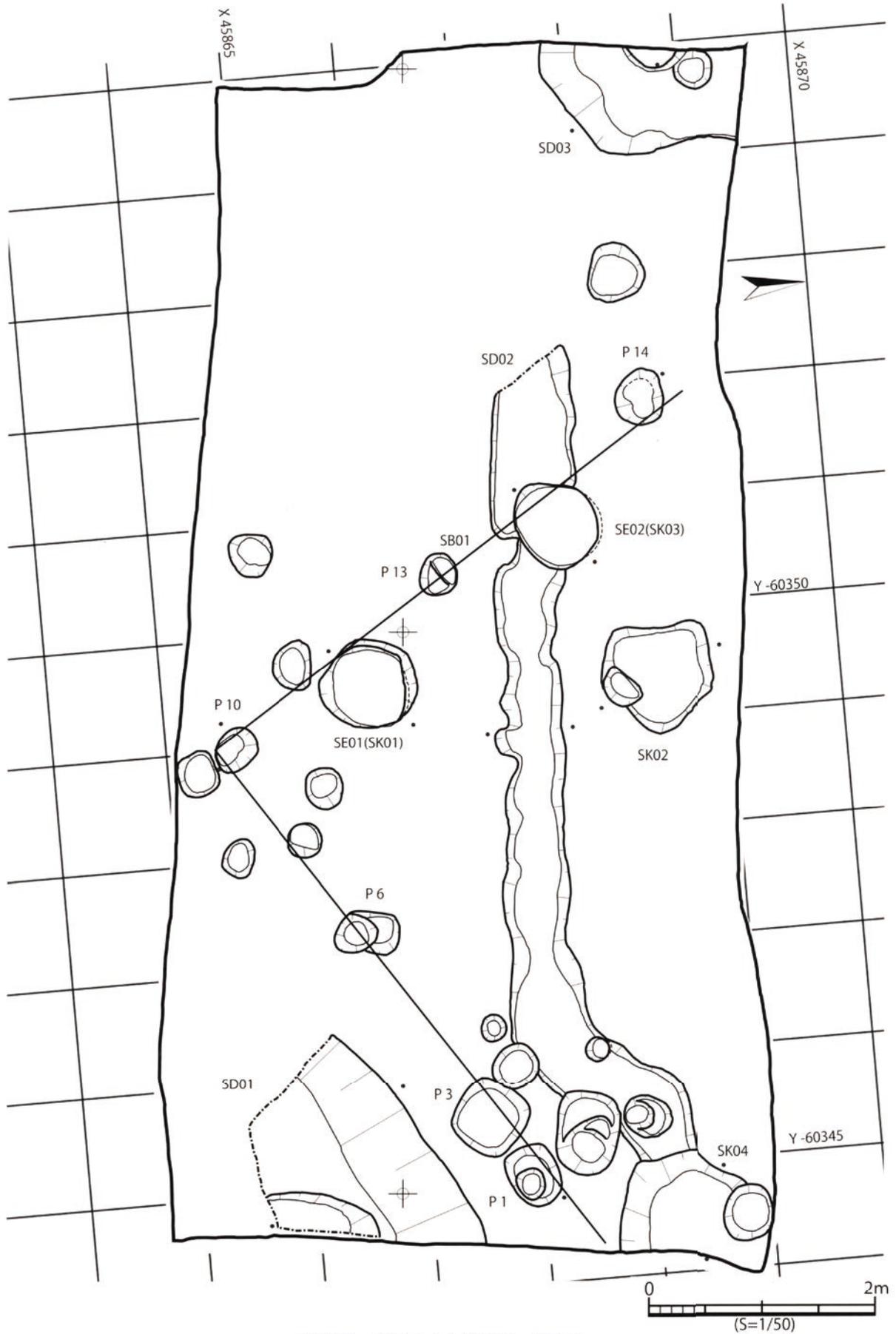
① SB01

A・B02～03Grで検出された、梁行2間×桁行2間のみが確認された側柱建物である。他の部分は調査区外に延びているが、梁行2間×桁行3間以上の建物が想定される。柱間寸法は、梁行235cm（平均）、桁行200cm（平均）を測り、やや広い間隔をとる。確認された部分に限っていえば、柱間寸法にほぼ狂いはない。但し、P-1が建物に係る柱穴とすれば、P-1～P-6間の柱間寸法は270cmとなる。主軸はN-53°-Eの東西軸建物である。柱穴は約40cm～60cmの楕円形であるが、P-3のみ一辺約60cmを測る、隅丸方形となっている。深さは、20～30cm前後が平均的であり、底面は概して平坦である。埋土は、灰黄褐色軽埴土である。遺物は、須恵器片や土師器片が柱穴より出土しているが、図化もできないような細片が多く詳細な時期を判別することができない。須恵器坏A片にはV期～VI期と想定できるものが含まれており、土師器片にはロクロ土師器無台碗の底部破片があり、須恵器の時期よりもさらに下る可能性がある。少なくともSD01以降であり、SD02・SK04と重ならない時期で古代後半期の遺構であることは言える。

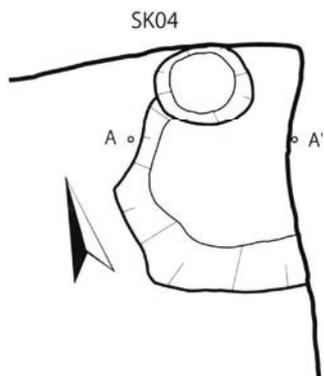
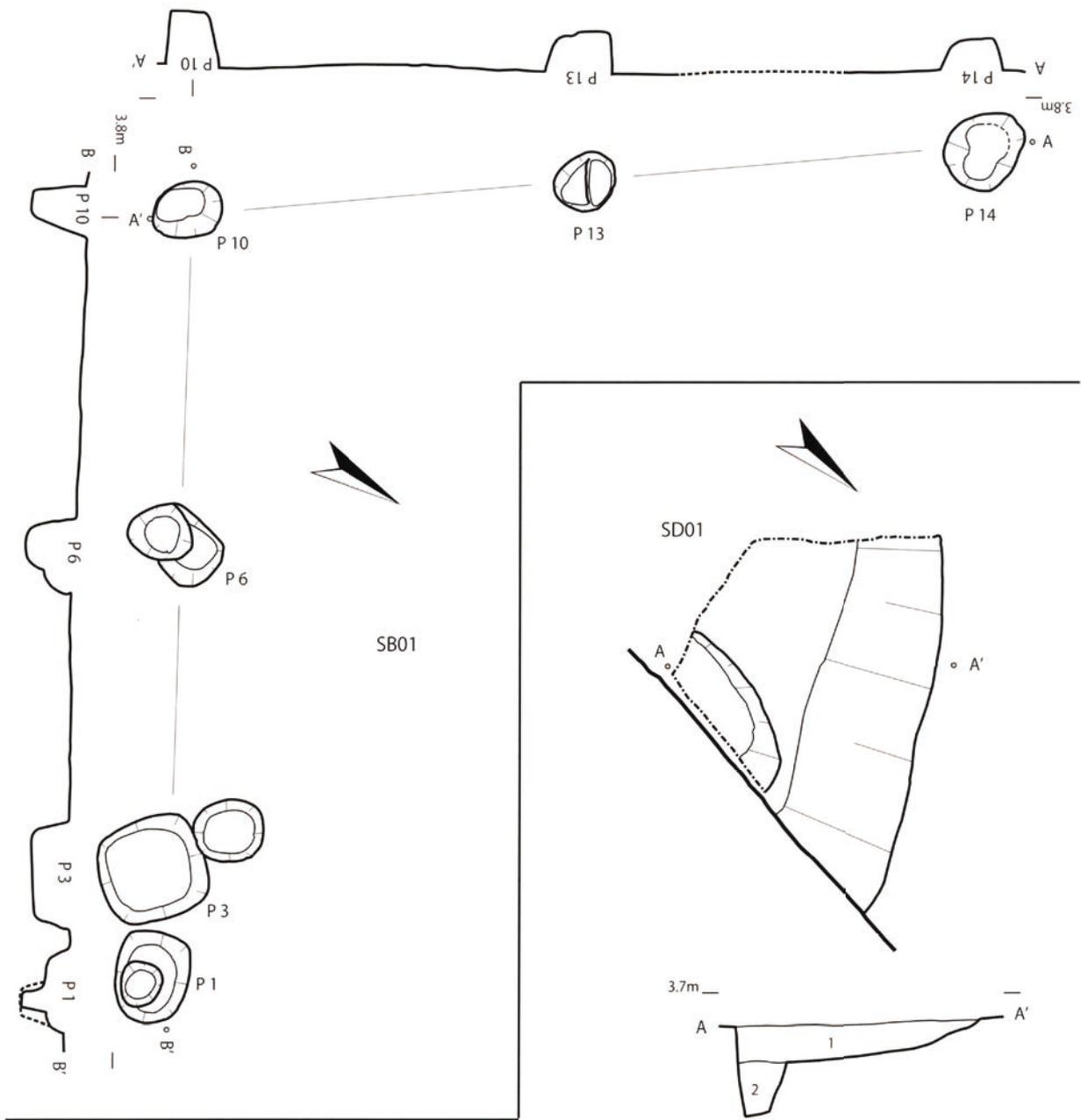
(2) 土坑

① SK04

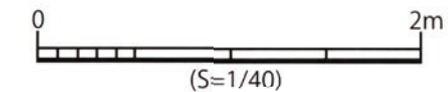
A01Grの調査区北東隅部から検出された土坑である。調査区外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部延長で約130cmを測るやや大型の掘り込みである。確認された深さは約15cmであり、浅く平坦な底面を持つ掘り込みである。覆土は、褐灰色軽埴土の偽礫を含む単一土層である。遺物は少量ではあるが、古代の須恵器・土師器片のみが出土している。よって、古代の遺構と判断されるが、



第25図 千代オオキダ遺跡 平面図



- SD01 土層註
1層 10YR4/2 灰黄褐色シルト質埴土
(堅、班鉄・マンガン含む)
2層 10YR4/1 褐灰色軽埴土
(堅、可塑性中、粘着度弱、
班鉄・マンガンあり)



第26図 千代オオキダ遺跡 掘立柱建物・土坑・溝実測図

時期は、土師器甕片がⅣ期頃（8世紀中頃から9世紀初頭頃）を示すが、切り合いからSD02より新しい遺構であることが確実であり、遺物は混入と判断せざるを得ない。

（3）溝

① SD01

A・B01～02Grに位置し、調査区南東隅部を北東から南西方向に横切る溝である。ただし、調査区南端は攪乱により形状不明となる。確認幅で145cmを測る溝であり、下底面に一段落ち込む部分が確認された。深さは浅い箇所20cm、深い箇所55cmを測る。覆土は浅い部分と深い部分で異なっており、前者は灰黄褐色シルト質壤土、後者は褐灰色軽埴土が堆積している。遺物は、須恵器坏B身や瓶類及び甕の胴部の破片や、ロクロ土師器甕の破片等が出土している。時期は、坏B身片からⅣ-2期頃（8世紀後半から9世紀初頭頃）が考えられる。

② SD02

A02～03Grに位置する溝で、東端でやや北東方向に折れており、SK04に切られている。西端は攪乱により切られており、調査区外まで延長するかどうかは不明である。最大幅約75cm、深さ10cm程度の極浅い溝ある。灰黄褐色シルト質埴土で埋っており、土中には偽礫を多く含んでいる。簡便な排水路か、何らかの区画を示すものであろうか。遺物は、須恵器甕同部破片や盤A片や、ロクロ土師器甕細片や鍋の破片、ロクロ土師器碗の底部が出土している。また、大型の土錘も出土している。時期は、ロクロ土師器鍋の口縁部形態から、Ⅵ-2期（9世紀後半～末頃）が考えられる。

③ SD03

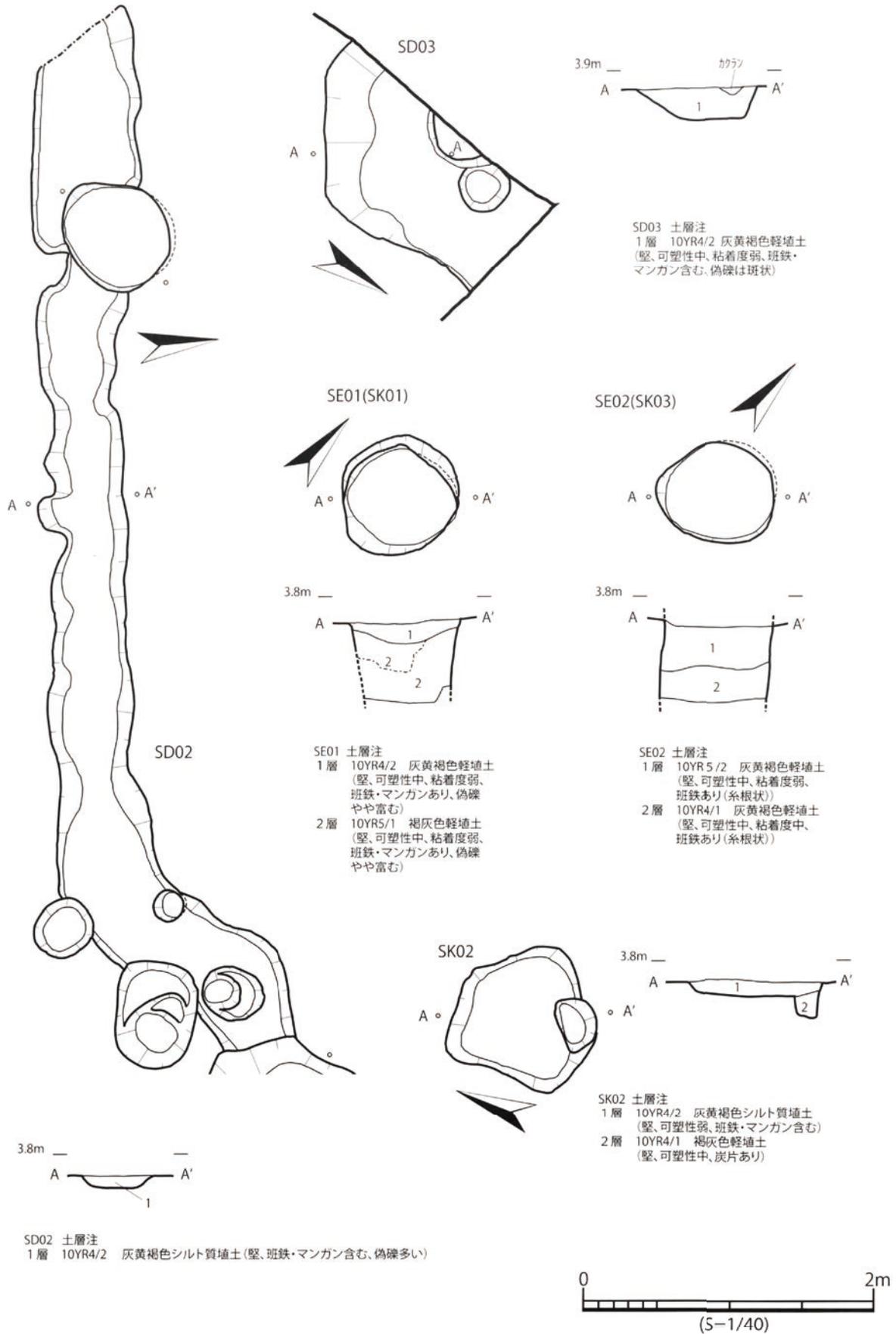
A03～04Grの調査区北西隅部に検出された溝である。遺構の極一部が掛っているのみであるが、北西から南東方向の溝が南西方向へ向きを変える屈曲点である。幅約84cm、深さ22cm測る断面台形状の溝であり、コーナー部は内側壁の方が急傾斜である。灰黄褐色軽埴土で埋っており、上面には攪乱を受けた後も見受けられた。下底面より遺物がまとまって出土しており、検出遺構の中で最も多くの量が出土している。須恵器坏A、坏B身・蓋、瓶類などや、非ロクロ土師器の小甕や高坏が見られ、須恵器坏類は比較的完形率も高い。また、土師器高坏は少なくとも3個体の破片があり、内2個体は内黒処理が施されている。ただ、坏部と裾部はあるが、脚柱部が一点も出土していない。他の土器についても、何らかの部位が欠けており、廃棄後の流失の可能性も無いとはいえないが、廃棄時に漏れたと考える方が自然であろう。ただし、1点のみだが肥前系陶器碗が出土しているが、土層断面で確認されるように攪乱で入り込んだものと考えられ、他はまとまって廃棄されたものであるといえる。時期的にもまとまりを持っており、Ⅱ-3期（8世紀初頭頃）が考えられる。

2. 中世の遺構

（1）井戸

① SE01（SK01）

B02Grに位置し、直径85cmを測る円形土坑である。壁面がほぼ垂直に掘り込まれており、小型の素掘りの井戸であると判断された。バイパス調査区においても、同形状のものが大型の井戸に隣接して確認されている。今回の調査では地山面を大きく立ち割ることは不可能だったため、約60cm掘り下げたところで掘削を断念している。よって、深さは不明だが、バイパス調査区のもの110cm～150cmを測る。埋土は褐灰色軽埴土層が大部分を占めているようであり、土中に偽礫が多く含まれていた。遺物は、加賀窯の甕の胴部破片と土師器皿片が出土している。また、焼け焦げた凝灰岩の破片も出土しており、行火等の一部ではないかと推察される。時期は土師器皿から14世紀後半頃と推察される。この井戸は、掘削時に壁面がやや硬質化した印象があった。単に層離面に土中の鉄分が溜まったもので



第27図 千代オオキダ遺跡 溝・井戸・土坑実測図

ある可能性もあるが、作業員に昭和初期に井戸掘削を経験した者がおり、壁面補強に漆喰を塗り込める工法があると教えて頂いた。残念ながら今回の緊急調査では特定するには至らず、中世に遡る工法かどうかは不明である。今後、同種の遺構を調査する時には注意したい視点である。

② SE02 (SK03)

B03Grに位置し、直径82cmを測るやや楕円形状の土坑である。SK01とほぼ同形状を呈しているため、これも小型の素掘りの井戸であると判断される。SK01と同様の事情から、約60cm掘り下げたところで掘削を断念している。よって、深さは不明である。埋土は上部が褐灰色軽埴土層、以下が灰黄褐軽埴土層である。土中には偽礫の含有は認められず、SK01とは埋没過程が異なっており、時期差が存在する可能性もある。遺物は、少量だが土師器皿小片が出土しており、須恵器小片は2点のみであり混入と判断される。時期は、遺物からは中世としか判断できないが、同形状をなすSK01と同じ14世紀後半頃と考える。梯川中流域の中世遺跡では、地下水に鉄分が多く溜まるため比較的頻繁に井戸が造り替えられる地域であり、SK01とSK03も前後関係は判断できないがその関係にあるのではないかと判断される。

(2) 土坑

① SK02

A02Grに位置し、セクション部分で全長97cmを測る略台形状の土坑である。平坦な底面を持つ、深さ10cm程度の浅い掘り込みである。覆土は灰黄褐色埴土層である。北辺中央隅部にピット状の掘り込みがあり、炭片を含む褐灰色軽埴土で埋まっており、杭穴とも考えられる。遺物は、古代の土師器や須恵器の小片と輸入白磁の皿片が出土している。遺構の時期は、SK01でも確認された焼け焦げた凝灰岩の破片も出土していることから、新しい方である白磁片の時期としておきたい。遺物の性格上厳密な時期は特定できないが、SK01と同時期か隣接する県調査区で確認された12世紀頃まで上がる可能性も考えられる。

第5節 出土遺物

はじめに

当該調査区の出土遺物では、古代遺物が195点（須恵器70点、土師器125点）と大部分を占める。次に、中世遺物は11点のみである。

1. 古代の遺物

(1) SK04 出土土器 (第28図-1)

土師器ロクロ甕口縁部破片である。端部は若干上方に摘み上げた形態をしており、時期はⅣ期頃と考えられる。口縁部内面に水平方向のカキメ調整が施されている。

(2) SD01 出土土器 (第28図-2)

坏B身である。体部外面は降灰により黒色に鈍く照った状態である。能美窯産であり、時期はⅣ-2古~新期頃と考えられる。

(3) SD02 出土土器 (第28図-3~5)

3点を図化している。3は土師器ロクロ無台塚の底部である。精良胎土で赤色粒を含み、やや赤味を帯びた発色をしている。底部形態のみでは時期の特定はし難い。4はロクロ土師器鍋の口縁部と考えられる。端部を上方にやや屈曲させてつまみ上げる形態である。胎土は、粘土系だが微砂粒を多く含みサラサラした器肌のものである。時期はⅥ-2期頃と推察される。5は大型の土錘であり、両端

部は使用に伴い欠けた状態である。形態的には側面が膨らみ、長さが2倍以下のものであるI b類に分類される。パイパス調査区では主体的にみられる形態である。胎土は、埴における精良胎土と赤色粒を含まないこと以外は共通しており、産地が同じかごく近いことが考えられる。

(4) S D 0 3 出土土器 (第28図-6~18)

前述のとおり、まとまった遺物が出土した遺構である。14点を図化している。時期については、ほぼⅡ-3期でままと考えられる。接合後破片数で、須恵器14点、土師器46点が出土している。須恵器では食膳具が11点と79%を占める。土師器では29点が煮炊具であり63%を占めるが、高坏6点や赤彩の坏蓋片1点など12%程の食膳具もみられる。

① 須恵器

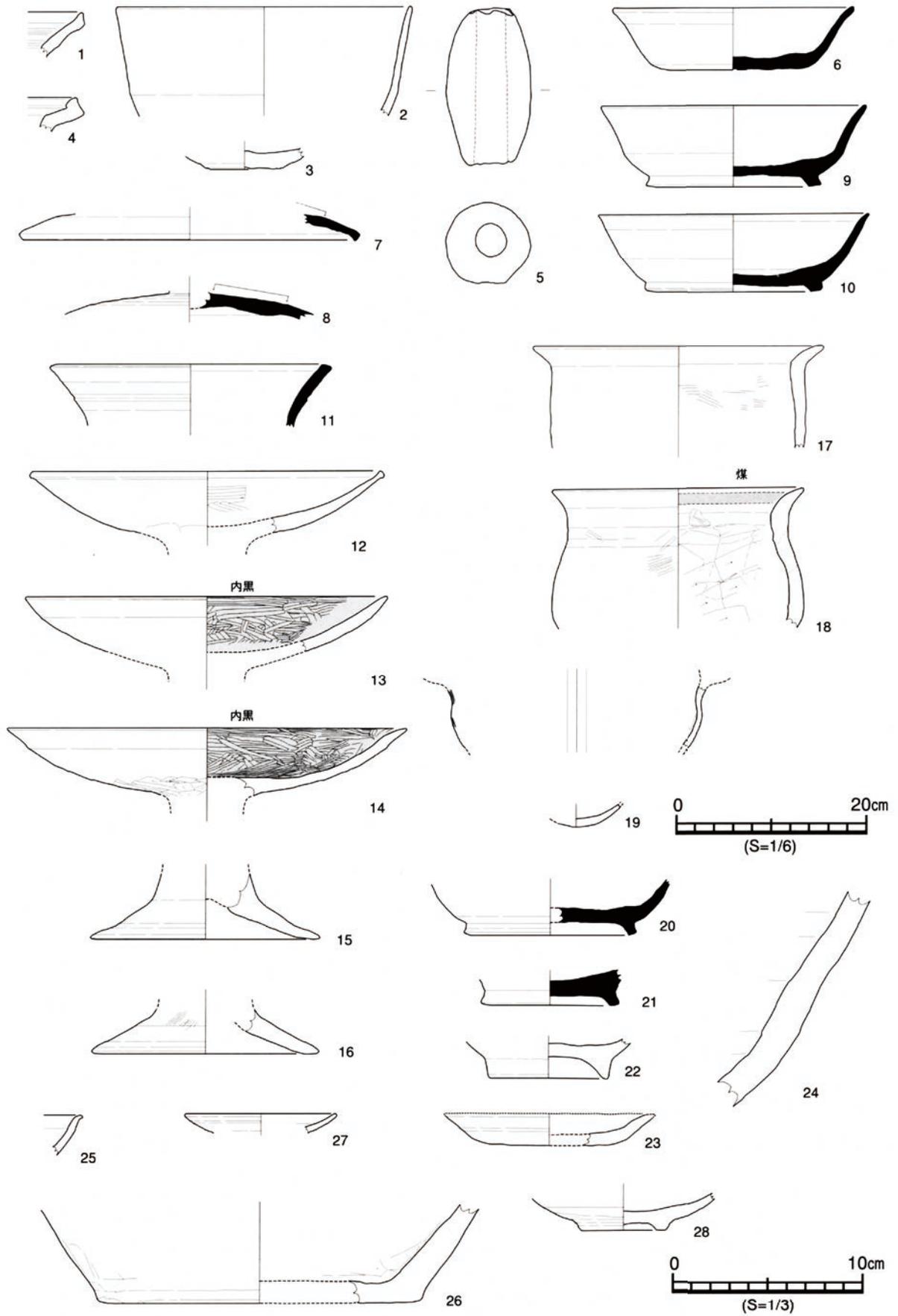
6は坏Aであり、胎土は能美窯産である。口縁部がやや外反する器形で、底部は回転ヘラ切り離しである。7・8は坏B蓋である。7は南加賀窯産で、端部が断面正三角形形状となる。8は能美窯産で、やや焼き歪みが見られる。9・10は坏B身である。9は南加賀産で、体部がやや外反して立ち上がる器形であり、焼き締まりが非常に良い状態である。10は能美窯産で、底部には火だすき痕が認められる。口縁端部を回転ナデにより薄くシャープに仕上げしており、全体的に精緻な作りである。11は瓶類の口縁部と考えられ、南加賀窯産である。内外面とも降灰しており、外面には沈線が一条巡っている。端部には使用痕と考えられる小欠けが認められる。

② 土師器

12~16は高坏である。全て脚高で坏部皿形タイプのもと考えられる。坏部の3点とも坏部内面にヘラ磨き調整が施されており、特に、13・14は黒色処理も施されている。しかし、胎土と口縁端部の作りは、3点とも異なっている。12は、内黒処理されていないタイプのものであり、胎土はやや精良な胎土であり斑なく橙色に発色している。口縁端部は、小さい玉口状に納めている。脚部との接着部付近に幅広いヘラ削り痕が認められ、脚部にかけて施されていたと考えられる。13は、内黒処理されたタイプであり、胎土は12と同系統だが、砂粒が多く含まれている。口縁端部は、丸く納めている。14も内黒処理されたタイプであり、胎土はさらに砂粒を多く含むやや粗いものとなっている。口縁端部は、ヨコナデによりやや外反気味に細く仕上げられている。脚部との接着部付近に幅の狭い細かいヘラ削りが、上方向に施されている。灰白色の焼き上がりである。15・16は脚の裾部である。器壁の厚み以外は、形態的に大差はない。胎土から15が13に、16が12に対応するものと想定される。なお、16には、外面にハケ調整の痕跡が確認できる。これらの型式の高坏も、Ⅱ-3期まで残るそうである(註1)。17・18は小甕である。17は、胴部から外側に屈曲させた短い口縁部を持つタイプで、胎土は粒の大きい(1~3mm)砂粒を多量に含むものである。内面にハケ調整が施される。18は、ヨコナデにより頸部がつくり出されており、胴部がやや丸みを帯びる形態である。口縁部内面に焦げ痕が帯状に残る。外面はハケ調整、内面は右斜め上方へのケズリ調整が施されている。胎土は粒の大きい砂粒が目立たず、微砂粒を多く含むものである。

(5) ピット・包含層出土遺物 (第28図-19~22)

19はP-1出土であり、土師器把手付き甕の胴部と底部の同一個体破片と考えられる。外面にハケ調整を施しており、底部には二次的に火にかけられた痕跡が残る。時期は、古代I期頃のものではないかと推察されるが、破片が少ないので断定は留保しておきたい。20~22は、包含層出土資料である。20は南加賀窯産の須恵器坏B身である。時期はS D 0 3の時期と同じ頃とみておきたい。21は南加賀窯産の須恵器埴Bである。底部には回転糸切り痕が残る。内面見込み部み摩痕が認められ、体部を打ち欠いて転用硯として使用していたようである。時期はⅥ-3期前後の時期が考えられ、S B 0 1と



第28図 千代オオキダ遺跡 出土遺物実測図

同時期の可能性もある。22は、試掘調査時に見つかったもので、ロクロ土師器の埴Bである。比較的高台が高め器形であり、見込み部がやや内側に押された形となっている。胎土は水簸された精良胎土であり、形態から出越編年Ⅲ-1～2期（Ⅶ-2新时期）頃かと推察されるが、底部だけでは断定はできない。

2. 中世の遺物

(1) SE01出土土器・陶磁器（第28図-23・24）

23は土師器皿である。口縁端部は欠けていたが、口径11cmのものとして復元図化している。水簸された精良胎土であり、体部がやや外反気味に立ちあがる器形である。普正寺地山面に類似しており、藤田編年Ⅳ-1期頃と考えられる。24は加賀窯の大甕の胴部下半の破片とである。胎土はやや粗雑な部類に分類される。内部はナデ痕及び指押え痕跡が残っている。P-12出土破片と接合関係にある。

(2) SE02出土磁器（第28図-25）

中国製白磁の皿と考えられる。口縁部内面に1条の沈線が施され、端部は外面方向に摘み出されている。釉薬に透明感はなく、器表面にやや細かい貫入が入る。上田分類白磁Ⅴ類に該当する可能性がある。12世紀まで上がる可能性があるが、伝世も十分考えられるため井戸の時期とは評価していない。

(3) 包含層出土陶磁器（第28図-26）

26は表土除去中に出土した加賀窯の甕か壺の底部である。胎土は精良であり、25とは異なる窯場である。体部外面にはヘラ状工具での調整痕がみられる。底面は全体的に薄く汚れており、何かが付着しているようである。27は白磁の皿である。

3. 近世の遺物

(1) 包含層出土陶磁器（第28図-27・28）

27はSD03混入遺物であり、肥前系陶器の碗である。薬灰釉がかけられており、体部下位から高台を経て、底部外面に至るまで露胎である。また、釉には細かい貫入が入っている。高台は削り出しであり、見込み部に胎土目が付着している。28は国産白磁の皿と考えられる。施釉は極薄いものであり、細かい貫入が入っている。内外面とも口縁部以外は露胎である。

第6節 小結

1. 調査成果のまとめ

今回の調査は狭い調査区であったが、多くの知見を得られるものとなった。確認されたもので、古代Ⅱ-3期（8世紀前半頃）、古代Ⅳ期（8世紀中葉～9世紀初頭頃）、古代Ⅵ期前後（9世紀後半～10世紀）の時期と中世Ⅳ-1期（14世紀後半頃）の少なくとも4期の時期に属する遺構が確認されている。バイパス調査区では同様の時期が全て確認されているが、当調査区北側の県平成元年度調査区では、中世Ⅳ-1期（14世紀後半頃）が確認されていなかった。当調査区で井戸が確認されたことにより、当該期の集落が鍋谷川西岸の微高地上にも存在することが判明した結果となった。

掘立柱建物の時期は、今回明確にすることができなかった。しかし、別の単位の集落であり、参考ならないかもしれないが、バイパス調査区においてほぼ同時期の建物群が同じ主軸方向をとることを追記しておきたい。次に、出土遺物の様相を確認しておきたい。ただし、ここに示す数値は、接合後（同一固体も可能な限り判定した）の破片数を基にした統計処理である。少ない量なので、参考程度にしかならないが、須恵器については、食器と貯蔵具の比率が約62%と約38%になり、食器の割合が

高い。土師器は、食器が約20%、煮炊具が約80%となり煮炊具の割合が高いという当地域通例の様相であることがいえよう。全体傾向としては、古代Ⅱ－3期以前の遺物は、P1とSD03出土遺物にほぼ限られることが特徴として挙げられる。遺構や包含層から主体的に出土するのは古代Ⅳ以降の遺物である。中世遺物は少ないが、図化したものも含めて内訳が、土師器皿5点、加賀焼3点、珠洲焼1点、輸入白磁碗1点、不明1点であることを報告しておく。

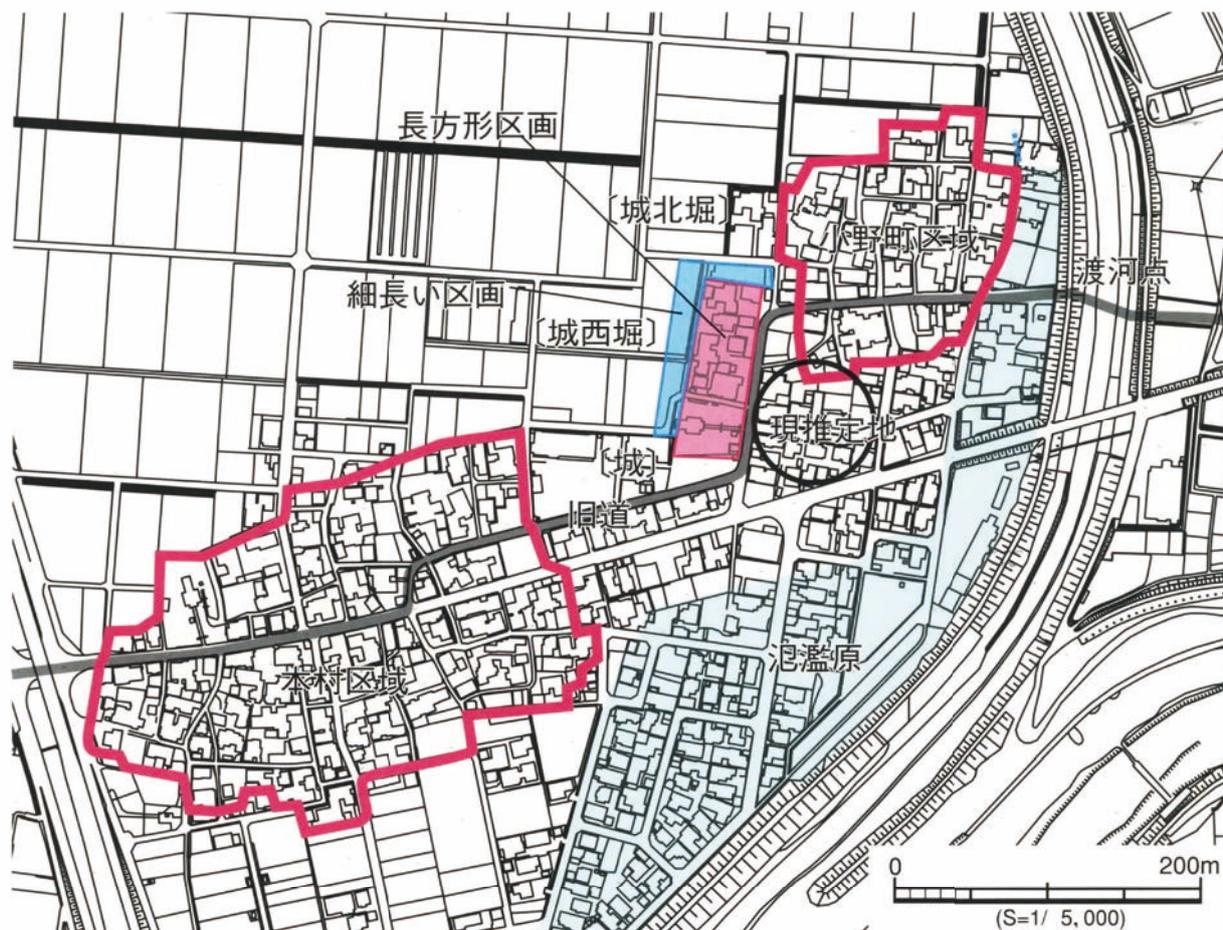
2. 調査区検出の中世遺構と調査区周辺の歴史的環境

前述のとおり、当調査区において14世紀後半頃の遺構が検出されている。当調査区の隣接地には戦国期の千代城の包蔵地が存在していることから、関連遺構の検出が期待された。結果として、千代城よりも先行する集落が検出されており、千代城の位置に関しては、再検討が必要となった。

さて、千代城は、永禄5年(1562)に一向一揆方が要害を構えたとの記載があり、「能美郡名蹟誌」などによると、一揆方武将徳田志摩が城主であったと推測されている。その後、天正8年(1580)に柴田勝家配下の武将や、慶長5年(1600)に前田利長配下の武将が置かれたとのことであり、詳細は不明である。

当調査区は、元来の千代集落のうち本村と小野町の間の小野町に隣接した位置にある。それらの集落は、近世以降に成立したと考えられ、1946年の米軍の航空写真によると、両集落間は耕地となっており民家は存在しない。当調査区の集落が存在した時期とは集落立地が異なっていたようである。また、千代から国府へ向かう道路は、現在のような直線路ではなく、小野町の手前で北方向へ折れ100mほど進んだ後、東方向へ折れるクランクを経て鍋谷川を渡っていくという道筋であった。明治前期までは梯川の水上交通も盛んであり、この道がどこまで遡るかは不明である。しかし、現在確認できる道筋であり、古代・中世期に安宅湊から国府まで陸路が全く存在しないと考えるのは考えにくい。となると、現在の千代城の推定地は、直線的に道路がぶつかる位置にあり、前述の航空写真でみる限りではあるが、それらしい区画は見えない。また、近年の下水道工事の立会からも存在する可能性は低く、存在したとすれば既に削られてしまったとしか考えられない。よって、隣接地をみると、八幡神社を含む区域に、長辺約110m(約1町)×短辺約45mの長方形区画が存在している。さらに、同じ航空写真での確認だが、北側と西側に細長い区画の耕地を確認することができる。加えて、この区域の北側には「城北堀」、西側には「西北堀」、南西側には「城」の地名が残っていることが示唆的である。立地的に城館であった可能性が考えられ、当該地が千代城の候補地となるのではないだろうか。クランクの折れた部分に隣接しており、安宅湊から国府を通り得橋郷や軽海郷へ抜ける往来の抑えとして設置されたのではないか。史料の時期は、信長はまだ美濃を攻めていたころの時期であり、永禄7年(1564)に、本居口・小松口合戦や湊川(現手取川)際まで放火とあることから、朝倉氏との緊張関係のなかで設置されたものかもしれない。ただし、規模的に小さいことから、それ以前から存在した在地領主の館跡の可能性もある。また、道を除外すれば、当調査区を含む東側は微高地が広がっていることから、もっと規模の大きなものであった可能性もある。現状の推定地が不確かなこともあり、1つの候補地を提示したもので、今後、地籍図や発掘調査などによってさらなる検証を行うことが必要である。

註 (1) 望月 精司氏教示。参考文献 田嶋明人1988年「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会、出越茂和1997年「古代後半期における椀皿食器(後)」『北陸古代土器研究第7号』北陸古代土器研究会



第29図 1946年航空写真にみる千代

第4表 出土遺物観察表

(単位cm)

番号	遺構名	種別	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径 (最大幅)	頸部径	見込み高	備考(口縁部残存率)
1	SK04	土師器	ロクロ	10YR8/3浅黄橙	C良	中							IV期?
2	SD01	須恵器	坏B身	N3/ 暗灰	能美	上	15.4						内面N6/ 灰。3/36、2古~新
3	SD02	土師器	埴A	7.5YR8/3浅黄橙	C精良	上			4.2				?
4	SD02	土師器	ロクロ	10YR8/2浅黄橙	C粗	上							VI 2?
5	SD02 C区	土師質	土錘	2.5Y8/2灰白	C良	上	8.3	4.45					全長/全幅
6	SD03 A区	須恵器	坏A	5Y7/1灰白	能美	中	12.6	3.3	8.4			2.6	14/36 II 3
7	SD03 A区	須恵器	坏B蓋	N4/ 灰	南加賀(良)	上	17.4						4/36 II 3
8	SD03 A区	須恵器	坏B蓋	N/7 灰白	能美	上							II 3
9	SD03 A区	須恵器	坏B身	10Y3/1オリーブ黒	南加賀(良)	上	13.8	4.3	9.2			3.5	16/36 II 3
10	SD03 A区	須恵器	坏B身	2.5GY7/1明オリーブ灰	能美	中	14.1	4.15	7.3			3.2	16/36 II 3
11	SD03 A区	須恵器	瓶類	5Y6/1灰	南加賀	上	13.8				10.8		II 3?
12	SD03 A区	土師器	高坏	5YR7/6橙	C良	上	18.2					(3.0)	内面ヘラミガキ。4/36 II 3
13	SD03 A区	土師器	高坏	5YR7/6橙~7.5YR7/2明褐	C良	上	18.9					(3.0)	内黒処理。内面ヘラミガキ。7/36 II 3
14	SD03 A区	土師器	高坏	10YR8/1灰白	Cやや粗	上	20.9					(2.6)	内黒処理。内面ヘラミガキ。8/36 II 3
15	SD03 A区	土師器	高坏	7.5YR8/3浅黄橙	C良	上			12.0				II 3
16	SD03 A区	土師器	高坏	7.5YR8/4浅黄橙	C良	上			11.9				外面ハケ調整。II 3
17	SD03	土師器	ハケ小	7.5YR7/1明褐灰	Cやや粗	中	15.0			13.4	13.4		5./36 II 3
18	SD03	土師器	ハケ小	5YR8/3淡橙	C粗	上	13.2			13.2	11.6		4.5/36 II 3
19	P-1	土師器	ハケ壺	5YR7/4にぶい橙	C良(微砂多)	上				16.4			把手付き。I 1期?
20	A-03Gr	須恵器	坏B身	2.5Y6/1黄灰	南加賀(良)	上			9.0				内面2.5Y7/1灰白。底部ヘラ切り痕。II 3
21	SD01、P-1	須恵器	坏B	5PB5/1青灰	南加賀	上			7.2				転用視、VI 3?
22	試掘坑2	土師器	坏B	10YR8/3浅黄橙	C精良	上			6.0				底部残存率1/2 VI 2新?
23	SE01 (SK01)	中世土師器	皿	7.5YR8/2灰白	C精良	上	(11.0)	(2.7)	6.4			(1.4)	IV-1
24	SE01 (SK01)・F12	加賀	壺	10YR4/3赤褐	やや粗	上							
25	SE02 (SK02) A区	白磁	皿	5Y7/1灰白	緻密	上							V類?(12世紀代~)
26	表土除去	加賀	壺	5YR6/4にぶい橙	精良	上			16.8				
27	B-03Gr	白磁	皿	5Y8/1灰白	緻密	上	7.8						近世?
28	SD03 A区	陶器	碗	5Y6/2灰オリーブ(軸)	緻密	中			4.4				薬灰軸。胎土5YR6/2灰褐。肥前系。近世

註 1 土師器の胎土は、粘土ベースをC(Clay)で表し、精良・良・やや粗・粗の4段階に分類している。

2 焼成は、焼き締まりの良いものを上として、以下中・下の3段階で判定している。色調は、原則外面を記入。内面等異なる場合は、備考欄に記入。

3 ()内の数値は復元値である。

第Ⅳ章 波佐谷城跡確認調査

第1節 調査に至る経緯等

小松市には、古代加賀国の中枢施設であった加賀国府や加賀国分寺、白山信仰の重要寺院である中宮八院、そして一向一揆の舞台となった中世城郭遺跡など、重要な遺跡が多く所在している。ただし、これらの遺跡は所在地をはじめとして、その実態も把握されていないものが多く、現在、遺跡の具体的な保護政策を講じることができていない。よって、これらの小松市にとって特に重要と判断され、将来的に保護していく必要性が高い遺跡を市内重要遺跡として位置づけ、所在地確認と遺跡の実態解明を目的とした確認調査を平成14年度より着手したものである。

その第一弾に実施したのが、一向一揆関連城郭遺跡確認調査である。平成14・15年度の2カ年に渡り、小松市波佐谷町所在の波佐谷城跡の確認調査と測量調査を行った。事前に波佐谷町内会の役員会において事業の説明を行い、町内会及び地権者の了解を得た。町内会には、調査員及び作業員の車両の駐車、道具小屋の設置場所等、様々な面でご協力を頂いている。事業費については、石川県教育委員会の同意の下、国庫補助事業として実施した。

第2節 調査の経過

1. 現地調査の概要

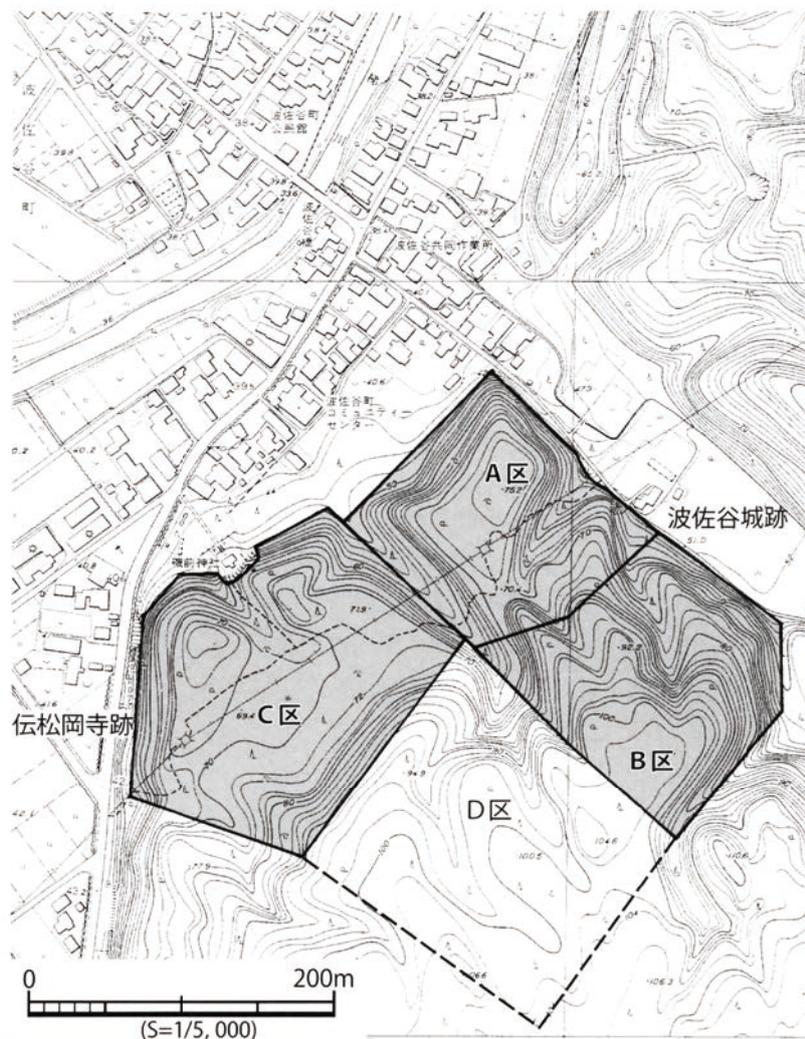
現地は、植林された杉や桧の林であったが、調査時には竹林や雑木で生い茂った状態であった。過去には凝灰岩の産地として利用され、石切り場も斜面に見ることができる。

調査において、概算で10ha以上あるとみられる城域を便宜上4分割し、A～D区の調査区を設定した。A区は、波佐谷城西郭を中心とする区域（約19,000m²）であり、平成14年度調査区とした。B区は、波佐谷城の主郭とみられる東郭を中心とする区域で、C区は伝承による波佐谷松岡寺跡の区域であり、両区を合わせて平成15年度調査区（約51,000m²）として設定した。D区については、A～C区が現在利用されていない雑木林であるのに対し、森林組合が管理し現在も林業利用されている区域にあたり、下草刈りにおいて苗木や成木を損傷する恐れもあったことから、今回の調査対象からは除外している。

2. 調査の経過

〔平成14年度〕 前述のとおり、A区を対象として実施している。現地調査期間 平成14年12月20日～平成15年3月24日までであるが、天候の良い時に測量を行い、トレンチ掘削調査は主として3月に行っている。A区については、約半分が竹林に覆われていたが、郭部分は比較的に見通しが効いたため、下草刈りは最小限に止めている。

地形測量に関しては、調査区内に任意に30m×30mのグリッドを業務委託により設定し、そのグリッド点の国土座標（日本測地系Ⅶ系、以下同）を基準として1/40縮尺の地形図を調査員により作成した。試掘調査は、西郭の平坦面を対象に任意に十字トレンチを2カ所設定した。人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。必要に応じて遺構の一部掘り下げも行い、内容及び土層の確認を行っている。トレンチ調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。遺物は、トレンチ掘削に伴うもの及び遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては出土状況の記録を行った。なお、調査成果については、次年度も調査が継続することもあり、地元町内



第30図 波佐谷城跡 調査地位置図及び区割り図

会及び関係者に対してのみ書面により報告を行った。

〔平成15年度〕 B・C区（約51,000㎡）を対象としている。現地調査期間は、平成15年10月20日～平成16年3月26日までであり、1・2月は冬季閉鎖として一部を3月に実施している。A区に対し、雑木林が発達しているため、下草刈りに長期間を要している。また、その際には、現地を走る送電線の下部に地上権を持つ関西電力の担当者と現地で協議を行い、その承認のもとで作業を実施している。

地形測量に関しては、調査対象区域が広範であることと、より精度の高い測量図が必要とされたことから、民間測量業者に業務委託を行い、1/200縮尺のコンターを含む地形図の作成を行った。ただし、予算上の制約から、斜面裾部を含めた全域約51,000㎡の作図を行うことができなかったため、平坦面等が確認される範囲約33,000㎡に限定して行わざるを得なかった。試掘調査は、B区は東郭の平坦面を対象に任意に十字トレンチを1カ所設定した。C区は、松岡寺跡の伝承が残る丘陵先端部の中央に谷を挟んで何北に位置する2箇所平坦面を対象に、任意にトレンチを設定した。人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。必要に応じて遺構の一部掘り下げも行い、内容及び

土層の確認を行っている。トレンチ調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。遺物は、トレンチ掘削に伴うもの及び遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては出土状況の記録を行った。

なお、調査成果については、地元町内会及び関係者に対して現地説明会を実施し、報告を行った。

3. 出土品整理

出土遺物は少なかったため、調査年度中に洗浄・注記・接合・実測作業を埋蔵文化財調査室臨時作業員により行った。ただし、一部未注記遺物に関しては、報告年度である平成20年度に、整理作業員により実施している。

また、トレース等の報告書作成作業も同様に報告年度に実施したものである。

第3節 周辺の城郭と歴史的環境

波佐谷町のある地域は、中世軽海郷の政所があったとされる大野から梯川が郷谷川と大杉谷川に分かれる分岐点を経て、大杉谷川の方の谷奥に入ったところにある。史料によれば、江指・長谷辺りまでは軽海郷の領域であったようであり、白山中宮の末寺である中宮八院の蓮華寺の推定地も長谷地内に所在している。山内荘に抜ける交通の要衝であり、その分岐点の谷の入口には、江指城があり、往來を監視していたようである。単郭の城郭であり、波佐谷城の山城と解釈される方もおられる。一方で、未確認だが梯川を挟んだ対岸には、一向一揆の武将「平野某」の平野堡があったという伝承もあり、土塁跡があったという言い伝えや、「門ノ内」、「馬乗」の地名が残っている。山裾に居館と山頂に山城があった可能性がある。居館と山城の時期が一致するかどうかは不明であり、金沢市の堅田B遺跡と堅田城のように両者が時期をずらして存在した可能性もある。「平野某」とは関係のない在地領主のものという可能性もあり、非常に近接する江差城との関係も含めて検討が必要である。

さて、磯前神社背後の丘陵上には、谷を挟んで南に「波佐谷松岡寺跡」、北に「波佐谷城跡」の存在が伝えられていた。松岡寺跡は、長享2年(1488)長享の一揆で加賀国守護富樫政親を滅ぼしたあと、加賀を支配した加州三ヶ寺の一つであり、本願寺八代宗主蓮如の三男蓮綱によって創建された寺院である。享禄4年(1531)の享禄の錯乱(大小一揆)により焼失したことが文献にみえる。波佐谷城は東郭と西郭から構成される山城である。最高所(標高約100m)に位置し複雑な構造である東郭が主郭、単純な構造である西郭が副郭と考えられている。越前朝倉氏が侵攻してくる弘治元年(1555)頃までに造られたとみられる。また、東西両郭の構造差を時期差とみる説があり、新しいとされる東郭の築造及び修築主体については、天正8年(1580)柴田勝家軍に攻略されたときの城主である、一向一揆勢の武将宇津呂丹波・藤六の父子とする説や、同11年に小松城主となった村上頼勝が一族村上勝佐衛門を置いたとの伝承から、その時点で改修を受けたとする説もある。村上頼勝の越後転封とともに廃城になったようであり、近世には西郭の西側斜面下には十村屋敷が建てられており、郭平坦面を畑地利用するために、その斜面の岩盤を削り抜いて階段と水溜めを敷設している。

また、明治34年に、城の北側に位置する畑地、通称「御城町」より、仏具や陶磁器を内蔵した壺が出土している。陶磁器は、瀬戸美濃天目茶碗1点、青磁碗2点、青磁香炉2点、白磁皿4点があり、15世紀後半から16世紀初頭が主体の製品である。戦国時代の陶磁器埋納事例の中でも規模が大きいものであり、時期的に見て、松岡寺に関連するという見方が有力であるが、内容が上八里横穴や津波倉ホツジ遺跡の地下式坑から出土した遺物に類時することから、場内に多数存在する横穴・地下式坑とその造成主体との関連性も考えられる。

第 4 節 確認調査の成果

1. 測量調査の概要

〔西郭〕 南北約80m×東西約40m、面積約3,200㎡の大きさの曲輪である。南北上下2段に分かれた平坦面を東と南は土塁、北と西は切岸によって防御している。谷部を利用した堀切状部分のある比較的緩い斜面の方に土塁を構築し、防御性を高めている。土塁は東郭に比して高いものである。土塁頂部の幅は1m程しかなく、狭いものである。平坦面からなだらかに傾斜して上り、北側平坦面の東側土塁では約3m手前、南側平坦面の南側土塁では約2m手前で急傾斜となる構造で、内側に「武者走り」と考えられる段が確認されている。土塁頂部と谷底の比高差は、東側の谷奥部分の高い箇所では約7m、谷口の低い箇所では約18mを測る。南側では、23mを測る。急斜面側は、平地との比高差約30mを測り容易には登れない斜面である。その途中の標高65m地点（比高差約23m）より上位に切岸を設置している。よって、その地点に帯郭が残る。切岸の高さは、高い平坦面で約7m、低い平坦面で約4mを測る。平坦面は建物が建つ広さが十分にある。南東隅部を突出させ、折れをつくることで、北の谷間からの侵入に横矢が掛る構造である。虎口は、東面の土塁の切れ目部分が想定される。ただし、現地に所在する送電線の鉄塔工事の際に破壊したという話もあり、確認が必要である。また、その鉄塔により郭南東隅部の状況は把握し辛いものとなっている。南北平坦面の比高差は、約2mあり、土塁との比高差は、北側平坦面（上）で約3.5m、南側平坦面（下）で約3mを測る。最高所は南東隅部であり、標高約74mを測り、平坦面との比高差は約5mある。

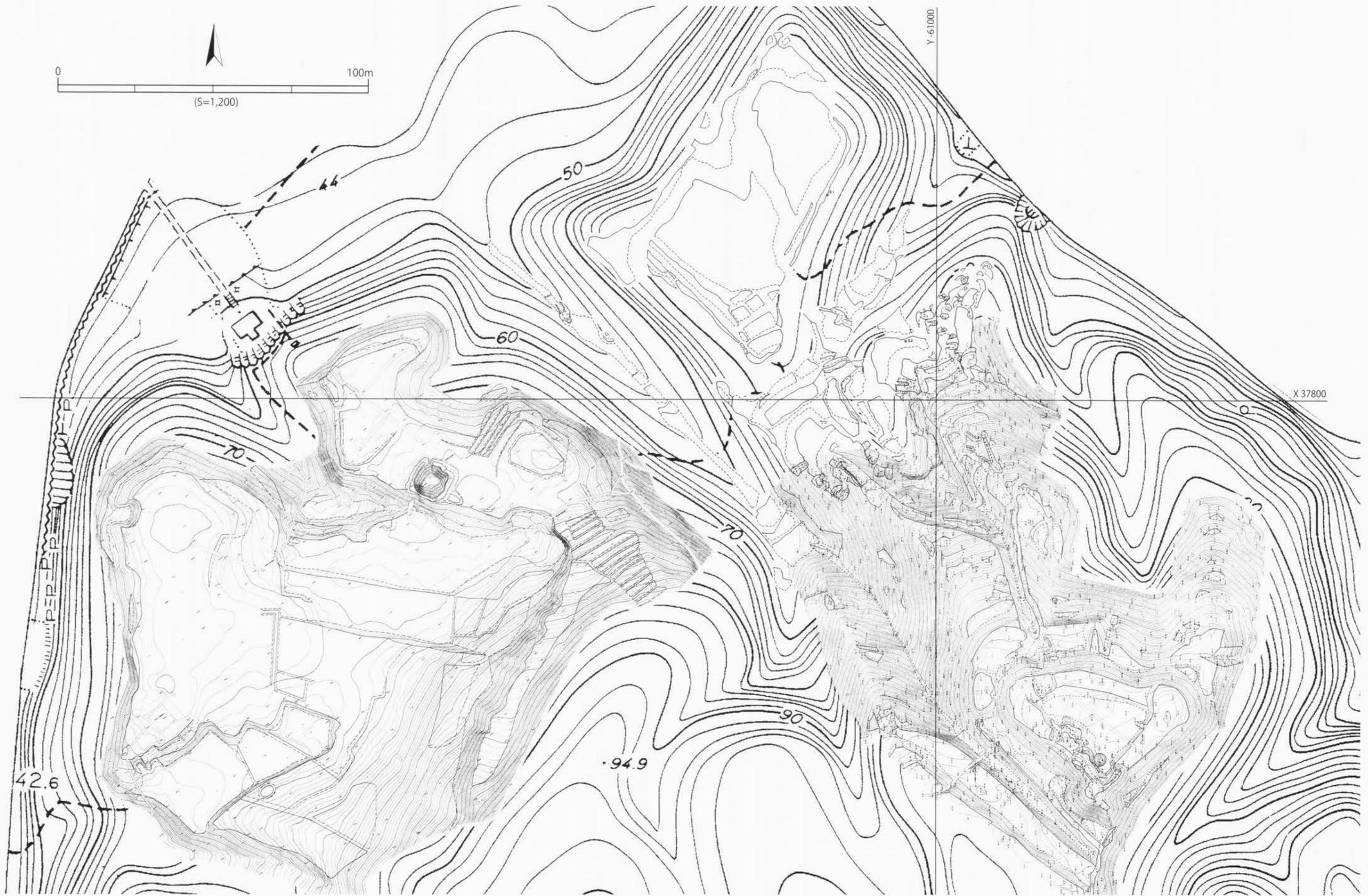
〔東郭〕 東西約60mの底辺を持ち、他の2辺が約45mを測る直角三角形の形態を持つ。面積約1,350㎡の大きさで、広さでは西郭の半分以下である。平坦面は1面であり、三方を土塁によって防御している。平坦面の標高は約99.4m、最高所は約102mを測り、西郭との標高差は約28mである。土塁は西郭に比して低いものであり、平坦面との比高差は、1m前後しかない。一番高い南側隅部で、約1.8mである。土塁頂部の幅は平均5m、東側隅部では、14mもあり、根本的に構造が異なるようである。平坦面上に柵等の構築物を造作して防御したものと考えられる。土塁頂部と真下の平坦面との比高差は、3.5m程度でしかなく、西郭のような高さに頼った防御方法ではないことが考えられる。最高所の南側隅部は、南側に突出させており、櫓台を造作したものと考えられる。櫓台は、虎口に対する横矢掛かりとなっている。虎口は平入りであり、幅約7mもある広いものとなっている。南西片土塁の中央部を切って造られており、その部分にやや広い平坦面を持つ。その部分を中心として、前後に一段低い段を持っている。虎口に至るには、北側丘陵から登ってきた場合、郭直下の平坦面で右方向へ一度折れて幅の狭くなった部分を通り、左方向へもう一度折れて、さらに左へ折れて到達するという3段階の折れを伴う導線となっている。郭自体は、南東方面は、横堀状に幅約7～7.5mの箱掘りを設置し侵入を遮断し、北側には直下の平坦面に土塁と縦掘りにより、横方向への動きを遮断している。また、櫓台直下にも横堀が掘られており、その防御性を高めるとともに、その前の通路を狭くしており、南東辺側斜面への回り込み等をし難くしてある。その、南東辺自体は、深い谷に面しており、急斜面をそのまま利用した防御となっている。ただし、櫓台下部に帯郭状の平坦面が若干残っており、その部分のみ切岸を施し、斜面をより急にした可能性がある。郭内部の櫓台直下には、直径約4.5mの円形土坑が開口しているが、貯蔵穴及び水溜め等が想定されるが確証はない。

〔東・西郭以外の部分〕 東西両郭間は、約140m離れており、西曲輪東側に接した谷を堀切状として明確に分かれている。緩斜面に転換するまでは、谷口で比高差は15m程度あるが、谷奥では比高差が無くなるため、緩斜面側には高さ約1.8m、幅約8m（裾部含む）の土塁を約25m（裾部含む）

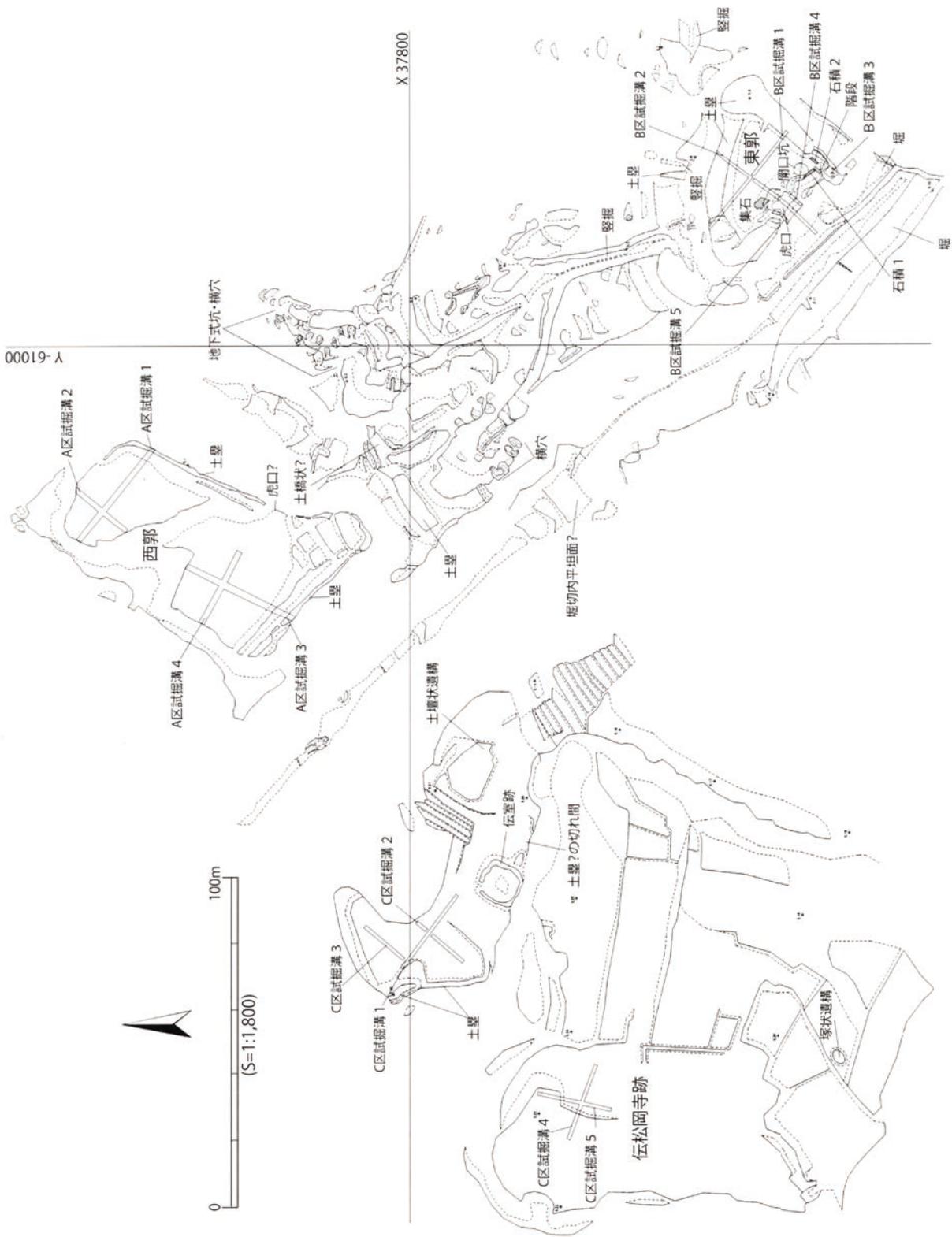
に渡って構築し、敵の侵入を防いでいる。緩斜面には、段上に平坦面を造作することで防御しているが、規模の大きな平坦面はみられない。なお、東郭に近い平坦面の一つに円筒状の土坑の開口が確認されている。また、緩斜面は浅い谷を挟んで東西に分かれ尾根が伸びている。その浅谷の奥から西曲輪に至る間には、縦掘が掘削されており、郭直下の平坦面まで斜面の分断は維持される。東郭南西側の横堀は、そのまま西郭の南東側の谷底へと連続し、集落部まで抜けている。後述する松岡寺推定地と城を分断する大堀切となっている。その意味では、横堀も谷奥で高低差が無くなり尾根続きとなった部分を切る目的で掘削された堀切の一種であり、郭の稜線を囲む発達したものではないといえる。ここで、城内における道を若干検討しておきたい。さて、城の大手であるが、西郭北東側の谷口と南西側の谷口が考えられる。東西両郭への進入口としては、北東側谷口の可能性が高くなる。理由として、西郭虎口に通ずることや、緩斜面側土塁の北隅部に階段状の斜面や緩斜面浅谷を塞ぐ土橋状の土手から緩斜面最端の平坦面に通じており、東郭に至る進入口と考えられることからである。そこから現在の遊歩道脇で浅谷に落ちる手前の箇所には道状に幅約1～1.6mの1段低く掘削された部分があり、そこがルートであった可能性がある。その掘削部は谷奥で土塁側の丘陵から登るルートと合流し、前述の縦掘の堀底を通して東郭に至ったものと考えられる。一方で、大堀切状の南西側谷部についても、谷底を伝って行けば、東郭に到達することができる。また、かなり無理をすれば、西郭に上ることもできる。また、堀底の中間地点に10m×12mの方形の平坦面が造られていることから、一つのルートであった可能性は残る。但し、その場合緩斜面にのこる様々な施設が不必要となるため、やはり、両郭へ通ずる北東側谷部が大手ではなかったかと考える。

〔伝松岡寺跡〕 伝松岡寺跡については、面積が広大でかつ竹藪や雑木林が密集していたため、予算上の制約から最低限測量必要な部分しか下草刈りを行っていない。よって、試掘を行った場所は伝承の残る地点を優先して選択したことをはじめにお断りしておく。

城跡から大堀切状の谷を挟んで南西側に位置している。丘陵先端の平坦面は、小谷を挟んで南北に分かれ、北側平坦面の先端部に土塁状の遺構が残る。また、北側平坦面北端と南平坦面西端には犬走り城の平坦面がある。ただし、南側平坦面のその部分は、小学校建設時にグラウンドの土砂を採取したそうであり、当時の遺構であるか見極めが必要である。標高は西郭と同じ70m前後を測る。谷奥に広大な平坦面が存在しており、室跡とされる1辺10mの縦坑が現状で確認できる。その室跡は、四方を土手で囲み、北隅部を開口させている。深さは約4mあり、南側の一段下の平坦面と横穴で繋がっている。土塁状遺構は、北側平坦面の南西側にのみ認められ、高さ80cm程度の低いものである。土塁の内側に平坦面より一段高くした平場も確認できるが、あまり防御性の高いものとはいえない。測量調査によって、北側平坦面の奥に約20m×12mの基壇状の部分が確認された。南側の空閑地を挟み、一段下の平坦面へ降りる部分にある土塁（土手状）の切れた部分が入口とも考えられ、南面する何らかの建物が存在した可能性も考えられる。ただし、礎石等は確認されておらず基壇状の形態も歪であり、浄土真宗において中心建物は、西へ向いて拝む配置とすることが望ましいため、検討を要するものである。平坦面は、少なくとも段によって区画が分けられていることは分かる。ただし、平坦面は後世において耕地化されており、現在の区画がどの段階のものであるのかは判断できない。また、西奥部分には一段低く現在でも水の滞留する箇所がみとめられる。池状に水を溜めた施設かもしれないが、谷水田の可能性もあり、平坦面上はかなり後世において開発されたことが予想される。さらに、谷奥平坦面南端付近において、長径4.5mを測る土饅頭型の塚も1基確認されているが、その性格も分らない。平坦面南側は緩斜面状を呈しているが、平坦面の南端を示す部分（標高71～80m）において、高さ約5mの急斜面による段差が付けられており、段上部が帯郭状の平坦面となっている。それ



第31図 波佐谷城跡 測量図



第32図 波佐谷城跡 遺構図

より南側は、再び急斜面となっており、約20m標高が上がり丘陵頂部へと至る。

2. 試掘調査の成果

今回の調査において、調査後の政策が未定なため、試掘溝は幅1mで設定し、最低限のものとしている。よって、遺構の保全を最優先したため、試掘溝の拡張及び遺構の完掘は原則行わず、土塁の立ち割り調査も実施しなかった。

〔西郭北側平坦面試掘溝〕

(1) 土坑

① SK01

試掘溝2西端から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部辺で一辺約120cmを測る隅丸方形の掘り込みである。確認された深さは約43cmであり、底面は一定しない。最下層より焼土を含む炭層が確認されている。ただし、壁面等は焼けておらず、その場で火を焚いたものではない。遺物は、土師器小皿片が出土している。SK03出土の小皿片と類似していることから同年代と考える。

② SK02

試掘溝2西端から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部辺で一辺約112cmを測り、深さ15cm程度の方形状の浅い掘り込みである。覆土を取り除くと東隅部より礎石様の平坦な石が検出された。石は、略方形を呈し、一辺約35cm、厚さ約13cmを測るもので、現地で採取可能な凝灰岩である。

③ SK03

試掘溝2中央付近から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明であるが、不整形であると想定される。検出部辺で長辺約210cmを測る。確認された深さは約26cmと浅く、底面は平坦面である。にぶい黄褐色埴土で埋まっており、埋土には炭化物や焼土が多く含まれている。土中より土師器大皿2個体と小皿1個体の破片が出土している。土師器皿から16世紀後半(1560～80年)の遺構と想定される。

④ SK04

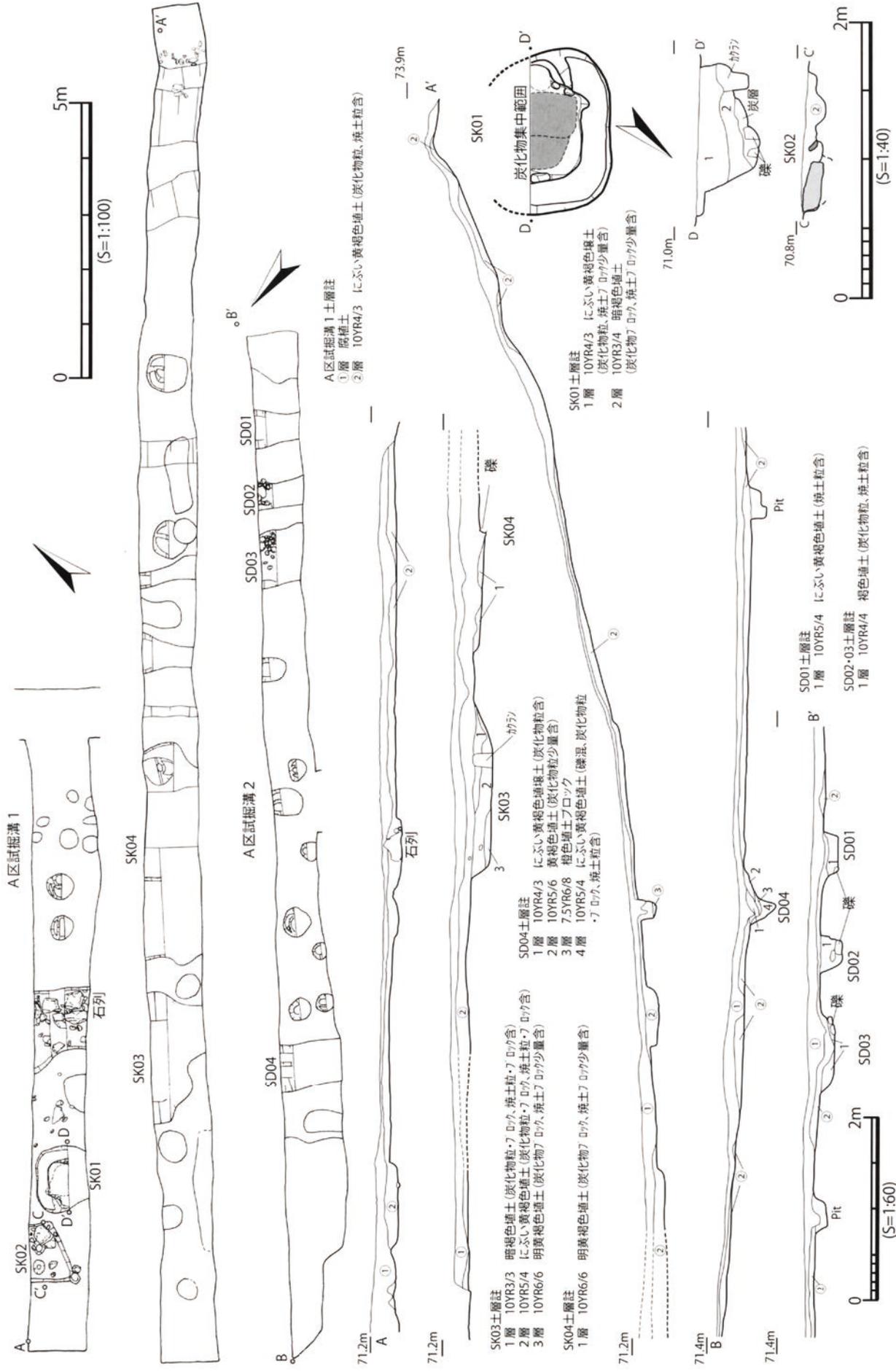
SK03東側から検出された土坑であるが、深さ5～10cm程度で土層断面でも明確に確認できるものではない。確認長で約4.5mもあり、落ち込みないし造成痕というべきものである。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。東側隅部でピットが確認されている。遺物は、備前窯か在地の作見窯とも考えられる瓶子の破片や、国産と考えられる染付磁器の皿片のほか、小刀とみられる鉄製品が出土している。加えて、加賀窯の破片や土師器灯明皿小片もみられるなど検出遺構の中では雑多な印象を受ける。17世紀前半頃の近世初頭の遺構と考えられ、造成時に下位の土坑を破壊したのかもしれない。

(2) 溝

① SD01～03

試掘溝1南側に位置し、試掘溝を東西方向に横切る溝である。SD01が幅54cm×深さ20cmで埋土がにぶい黄褐色埴土、SD02が幅46cm×深さ30cmで埋土が褐色埴土、SD03が幅96cm×深さ20cmで埋土が褐色埴土である。3条とも浅いものであるが、SD01と02は壁面が立つ箱状を呈しており、幅が広いSD03とは形状が異なる。また、SD02と03の南半分において、壁面から下底面にかけて小礫や人頭大の礫が出土している。

② SD04



第33図 波佐谷城跡 A区試掘溝1・2実測図

試掘溝1北側に位置する溝で、試掘溝を東西方向に横切る点はSD01～03と同じである。ただし、断面V字状になる点が異なっている。埋土はにぶい黄褐色埴土で、上面は攪乱を受けたようである。よって、南岸のなだらかな部分については、地山粘土ブロック層が挟まっていることから、崩れたものと判断される。溝の幅は、現況では約60cmだが、V字状に復元すれば45cm程度となる。深さは約30cmを測る。SD03-04間は約8m開き、SK03-石列間は約10mあることから、この間には約80㎡の空間地が存在している。

(3) 石列

試掘溝2西寄りに検出されたもので、石は南北に連なっているようである。幅約95cmを5cm程度溝状に掘削したなかの東寄りに設置されている。検出箇所では、40～50cm台の礫を2列に配置し、隙間には10cm大の小礫を詰めているようである。

〔西郭南側平坦面試掘溝〕

(1) 土坑

① SK05

試掘溝4中央付近より検出しており、直径約240cmを測る略楕円形状を呈する想定され、南側端部はテラス状となる。深さ約25cmの浅い掘り込みであり、底面はすり鉢状に中央部が低くなっている。埋土はにぶい黄褐色埴土層が大部分を占めているようであり、土中に炭化物や焼土粒・ブロックの他、礫が含まれていた。礫は小型のものが多く、中央部に30cm大のものが出土している。遺物は、瀬戸大窯の灰釉稜皿とみられる製品が出土している。時期は、大窯Ⅱ期後半の器形に近いと思われるが、遺構の時期判定の決定打にはならない。しかし、16世紀中頃～後半頃の遺構であることは間違いのないと思われる。

② SK06・07

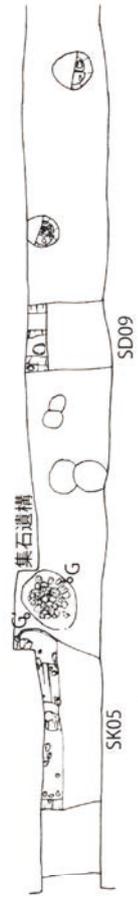
試掘溝3東側で検出された円筒土坑である。壁面もほぼ垂直であり、円筒形を呈する。SK06は直径52cm×深さ20cm、SK07は直径60cm×深さ12cmを測るごく浅いものである。SK06の埋土は、褐色埴土であり、下底面に比熱の痕跡が確認された。SK07は暗褐色埴土であり、炭化物や焼土のブロックを多く含んでいる。遺物は出土していない。

③ SK08

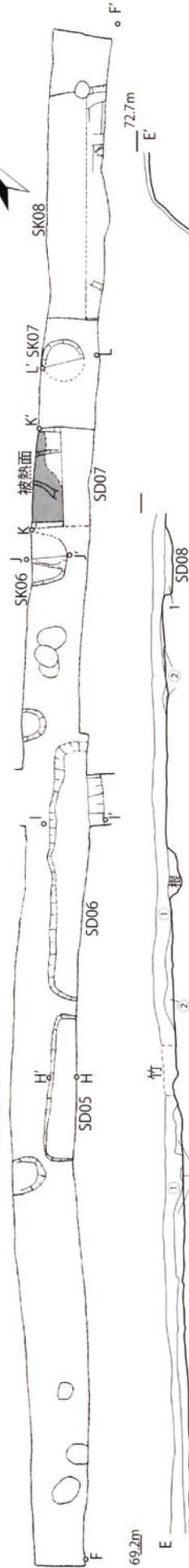
試掘溝3東端で検出され、確認長で約380cmを測る大型の土坑である。深さも約70cmを測り、他の土坑に比して規模の大きなものである。最下層の4層や2層中にみられる多量の焼土塊及び比熱凝灰岩屑を廃棄した後、地山粘土を削った土で窪んだ中央部を埋めているのが特徴である。遺物は、土中より越前焼の播鉢の小片が出土している。試掘坑掘削時に出土したものと同一個体と考えられる。卸目の様子から、Ⅳ期後半～Ⅴ期前半（15世紀後半～16世紀前半）のものと推察される。中世陶器は遺構の年代の決め手にはならないが、SK03等よりは古い遺構の可能性はある。次に、当土坑に廃棄された多量の焼土塊及び焼凝灰岩屑の性格について検討する。焼土塊には、炭を挟み込んでいるものが認められる。また、焼凝灰岩屑は、比熱の度合が高くかなり劣化しており、石製品加工時の比熱レベルではないことは判断できる。よって、土と石が両方混在していることから、郭造成時に岩盤層を削るために焼いた可能性が考えられる。一方で、近接地（SD06、SD07）において比熱面を確認することができることから、建物等の何かの部材が焼け落ちたものを片付けた跡の可能性もある。しかし、平坦面上広範囲に焼けた痕跡は確認されておらず、城自体が焼け落ちたものではないと考えられる。

(2) 溝

A区試掘溝3



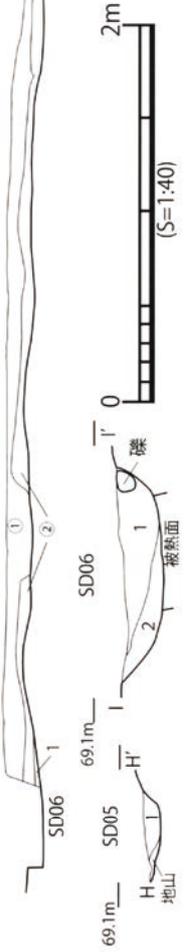
A区試掘溝4



- ①・②層は、試掘溝1・2と同
- SD05・06土層註
 - 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒少量含)
 - 2層 10YR5/4 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒含)
- SD08土層註
 - 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・7 D₇、埴土粒少量含)
 - SD09土層註
 - 1層 10YR5/4 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒少量含)

- SK05土層註
 - 1層 10YR4/2 灰黄褐色埴土(炭化物粒少量含)
 - 2層 10YR5/4 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒・7 D₇少量含)
 - 3層 10YR4/3 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・7 D₇、埴土粒・7 D₇(大)含、粘性強)
- SK08土層註
 - 1層 10YR7/6 明黄褐色埴土(炭泥、炭化物粒、埴土粒含、地山による埋め戻し土)
 - 2層 10YR3/3 暗褐色埴土(炭化物粒・7 D₇、埴土粒・7 D₇多く含、線紋)
 - 3層 10YR6/6 明黄褐色埴土(7 D₇と10YR3/3 暗褐色埴土との混在層(炭化物7 D₇、埴土7 D₇含))
 - 4層 10YR2/1 黒色埴土(炭泥、炭化物粒・7 D₇、埴土粒・7 D₇多く含)
 - 5層 10YR7/6 明黄褐色埴土(炭化物粒少量含)

- SD06土層註
 - 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒少量含)
 - 2層 10YR5/4 にぶい黄褐色埴土(炭化物粒・埴土粒少量含)



第34図 波佐谷城跡 A区試掘溝3・4実測図

① SD05・06

試掘溝3中央付近に位置し、試掘溝に平行する溝である。SD05が全長約230cm×深さ6cm、SD02が幅420cm×深さ20cmを測る。幅はSD06の両岸検出部で84cmを測る。極浅いものであり、にぶい黄褐色埴土で埋まっている。直線的な長さの短い溝であることから、建物の雨落ち溝の可能性も考えられる。遺物が出土していないので、時期は判断できないため、後世の畑の畝溝の可能性もあろう。ただし、SD06のセクション付近の下底面から、比熱痕跡が確認されている。

② SD07

試掘溝4北側に位置している。溝として遺構番号を振ったが、溝ではないかもしれない。幅約160cmの部分が、約10cm落ち込むものである。下底面が比熱しており、一部焼結した部分も認められる。埴土はにぶい黄褐色埴土である。

④ SD08

試掘溝3と試掘溝4が交差する地点付近に位置し、試掘溝に直行する溝である。幅55cm×深さ14cmを測る。極浅いものであり、にぶい黄褐色埴土で埋まっている。

⑤ SD09

試掘溝4中央やや西寄り付近に位置し、試掘溝に直行する溝である。幅58cm×深さ13cmを測る。にぶい黄褐色埴土で埋まっており、規模的にもSD08と類似している。両溝間は、約8.3m離れており、北側平坦面のSD03-04間の幅に近似する。

(3) 集石遺構

試掘溝4中央付近に検出されたもので、平面的な集石である。長径165cmの楕円形土坑の上に配置されたものである。山石もみられるが、河原石も多く使用されている。一部15cm台のものも見られるが、10cm台のものが多く使用されており、平均的である。その性格は不明である。

〔東郭平坦面試掘溝〕

(1) 柱列

試掘溝1西側で確認された1～4号ピットである。径55cm～80cmの楕円形で、深さ10～20cm程度の極浅いものであるが、ピット底の平坦面に著しい硬化が認められたため、柱列と判断したものである。主軸はN-49°-Wで、柱間寸法は平均276cmである。掘立建物跡になる可能性も考えられる。

土塁上のピット群

試掘溝2の北端土塁上において多数の小ピットが確認された。ただし、極浅いものが多く、柵等に発展するものは確認できない。その中でもP-5のみは底が尖る形状で、約30cmの深さを測る。暗褐色埴土で埋まっている。

虎口付近のピット群

虎口付近において、両側土塁の裾部に入れた試掘溝4・5において検出されたピットである。虎口全面の緩斜面に位置し、2個が対になって検出されている。ただし、虎口付近は攪乱も多く、深さが20cm程度と極浅いものであるから門に関係したピットかどうかは断定できない。柱間寸法は、P-6～P-7間が210cm、P-8～P-9間が150cm、P-6～P-8間が615cm、P-7～P-9間が650cmであり、一定していない。褐色埴土で埋まっている。

檜台上的ピット群

檜台上は、抜根跡などの攪乱が酷く、明確な柱穴を確認することはできなかった。

(2) 溝

① SD01

試掘溝 1 の中央やや西寄りの地点に位置し、試掘溝を東西方向に斜行する溝である。幅48cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

② SD02

試掘溝 2 の虎口土壇内側下部に位置し、試掘溝に直行する溝である。虎口土壇には平行している。幅90cm×深さ8cmを測る。褐色埴土で埋まっており、底部は中央部がもっとも低くなる描鉢状を呈する。土壇直下に位置しており、排水のための溝であろうか。

(3) 石積及び階段

① 石積 0 1

槽台西側に連なる南土塁の内側で検出されたものである。幅約6m、高さ約1mに渡って築かれている。現地で採取可能な角礫質凝灰岩を乱積みしたもので野面である。そのため目地は一定しておらず、概ね4段に積まれている。西側方向へ下部の地盤が上がるにつれて、2～1段と段数を減じている。東端は、槽台へと登る階段に連続している。概ね下段には約40cm×25cmの石材が使用され、上段には一回り小さい約30cm×約15cmの石材が使用されているようである。ピンポールによる刺突のみの確認だが、栗石をつめるような裏込めは存在しないようである。槽台内側部の土留と考えられる。

② 石積 0 2

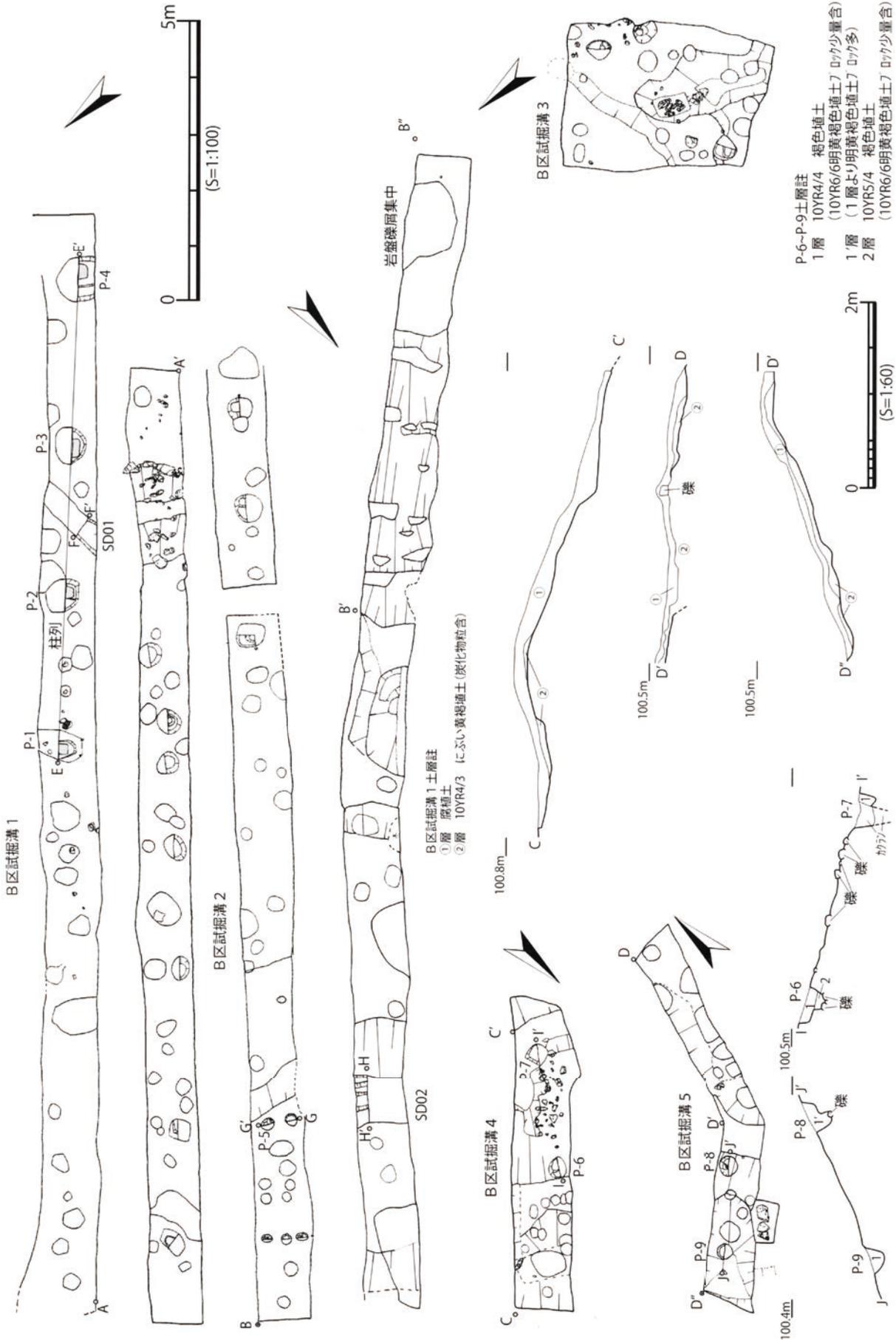
槽台北側に連なる東土塁の内側で検出されたものである。幅約2.8m、高さ約0.9mに渡って築かれている。石材は、同じ角礫質凝灰岩である。野面ではあるが、石積 0 1 に比べ比較的目地が通っている。5段に積まれており、2～3段目と3～4段目の間はやや下がって階段状に積まれている。比較的扁平な石材を選んで使用しており、下段には約50cm×15cmの一番大きな石材が使用され、2段目には小割りの石材を使用し、3段目にまた約40cm×約25cm等の大きめの石材を使用している。4段目は、3段目より一回り小さい約30～40cm×約15cmの石材を使用し、最上段には約40cm×約15cmの形の共通した石材を意図的に使用しており目地を揃えている。同様の確認だが、栗石裏込めは存在しないようである。石積 0 1 と同じく槽台内側部の土留と考えられるが、積み方や石材の選択方法が異なっている。同時期に別の集団が構築したのか、普請の時期が異なっている可能性も考えられる。

③ 階段

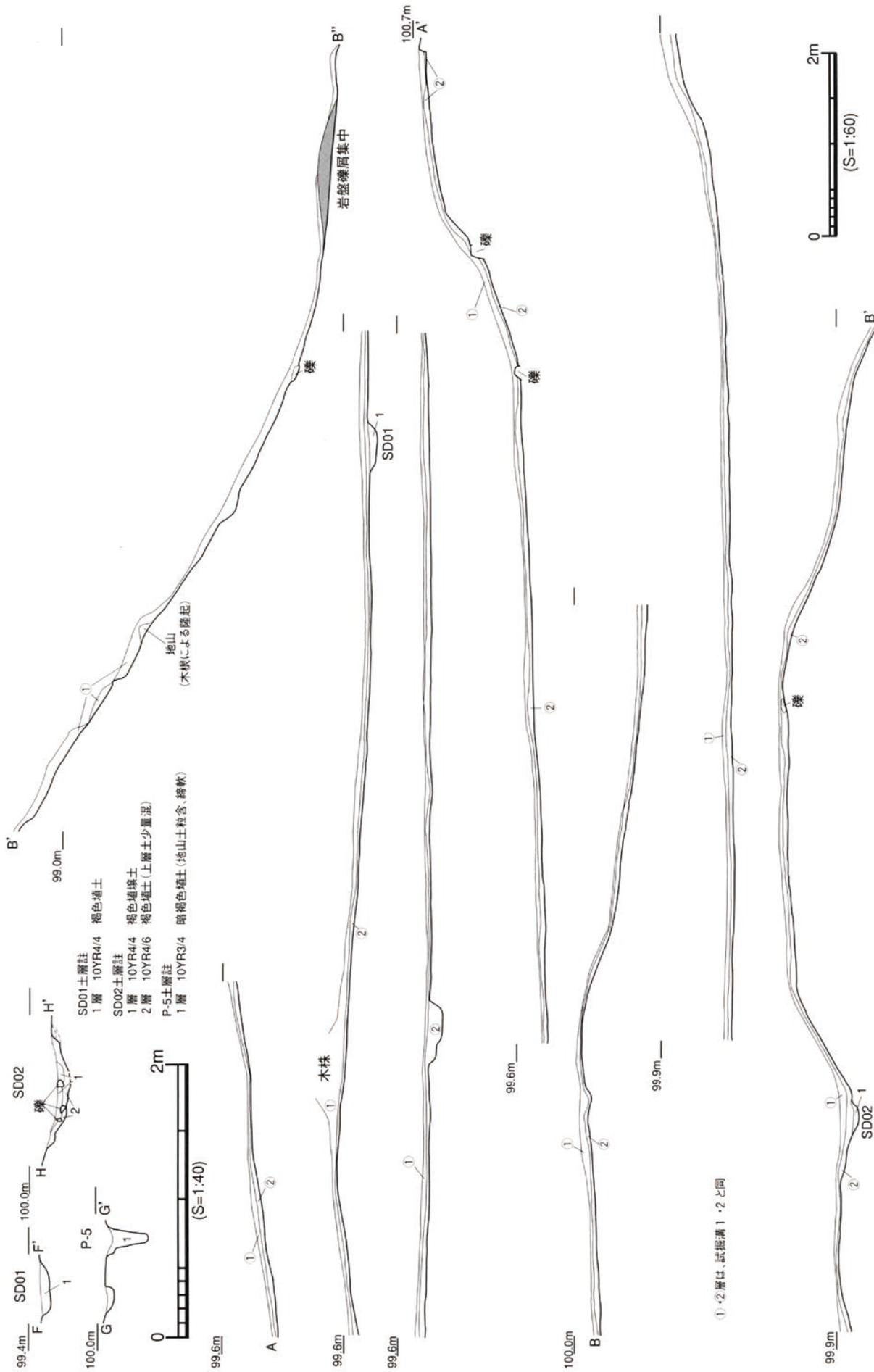
石積01と石積02の間の南面土塁側から階段遺構が検出されている。幅は、約1mに復元される。最初の基礎石を1段に数えると、高さ150cm、角度25°の斜面を8段で登るものである。ただし、6～最上段までは角度が急になり、40°の傾斜角となる。段の先端部のみに細長い石材を嵌め込むものであるが、階段自体の掘削は甘く、2段目と3段目以外は水平な箇所がない。よって、上段は石自体が足掛かりの機能を果たすものと理解される。石材は概ね長さ35cm×幅15cm程度のものが使用されているが、一定しておらず小振りなものも使用されている。奥行きは概ね30～35cm程度確保されているが、上がり幅は一定しない。地面－1段目間13cm、1段目－2段目間12cm、2段目－3段目間35cm、3段目－4段目間13cm、4段目－5段目間21cm、5段目－6段目間25cm、6段目－7段目間22cm、7段目－8段目（最頂部）間9cmを測る。特に、2段目－3段目間が高いためか、2段目から21cm上がった位置に2.5段目ともいえる段が設けられている。南面石積みとの位置関係は、階段の石材の方が石積の石材より奥へ入り込んでいるようである。

(4) 開口円形土坑

南面石積の前面に位置し、以前から開口した状態である。現況で直径440cm深さ140cmを測る。その性格を把握するため1/4のみ掘削をおこなった。約30cmの掘削で下底面に達し、中央部が窪む形態であった。土層は腐植土と流れ込み土壌の互層であり、遺物は出土しなかった。倉庫の利用であれば、

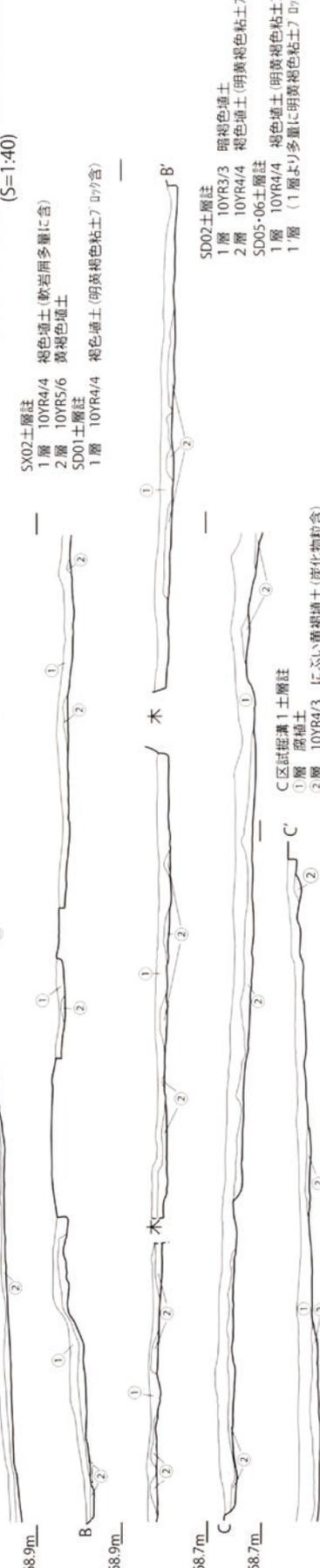
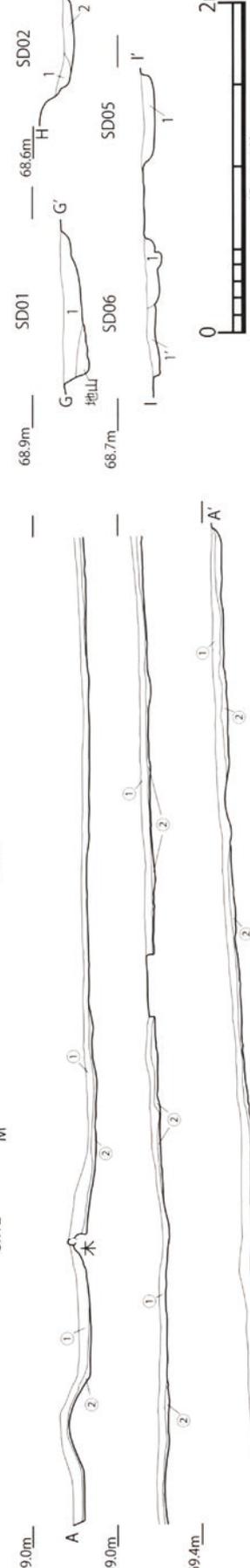
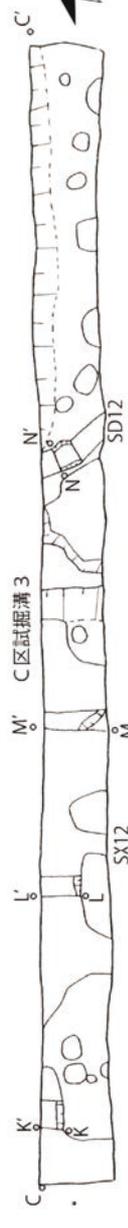
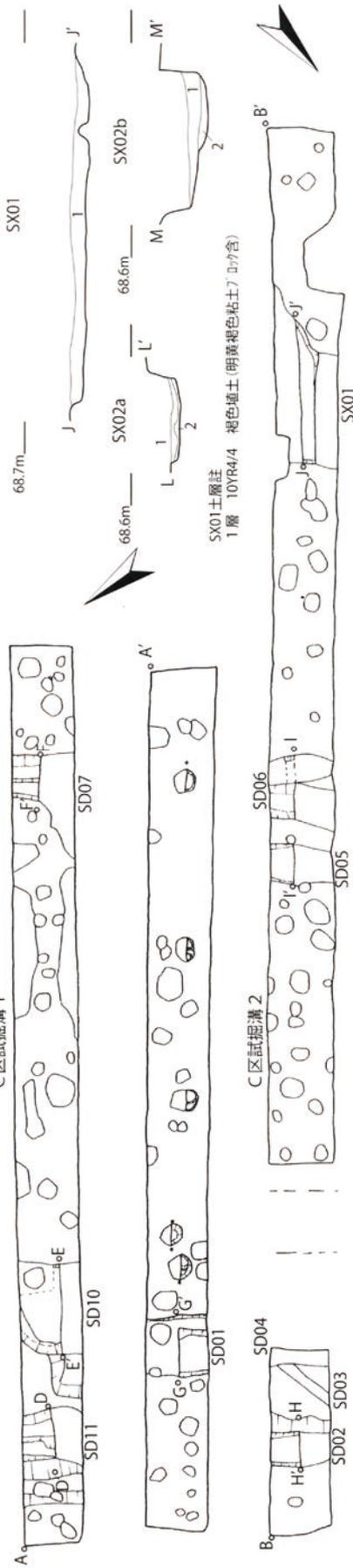


第35図 波佐谷城跡 B区試掘溝1～5実測図

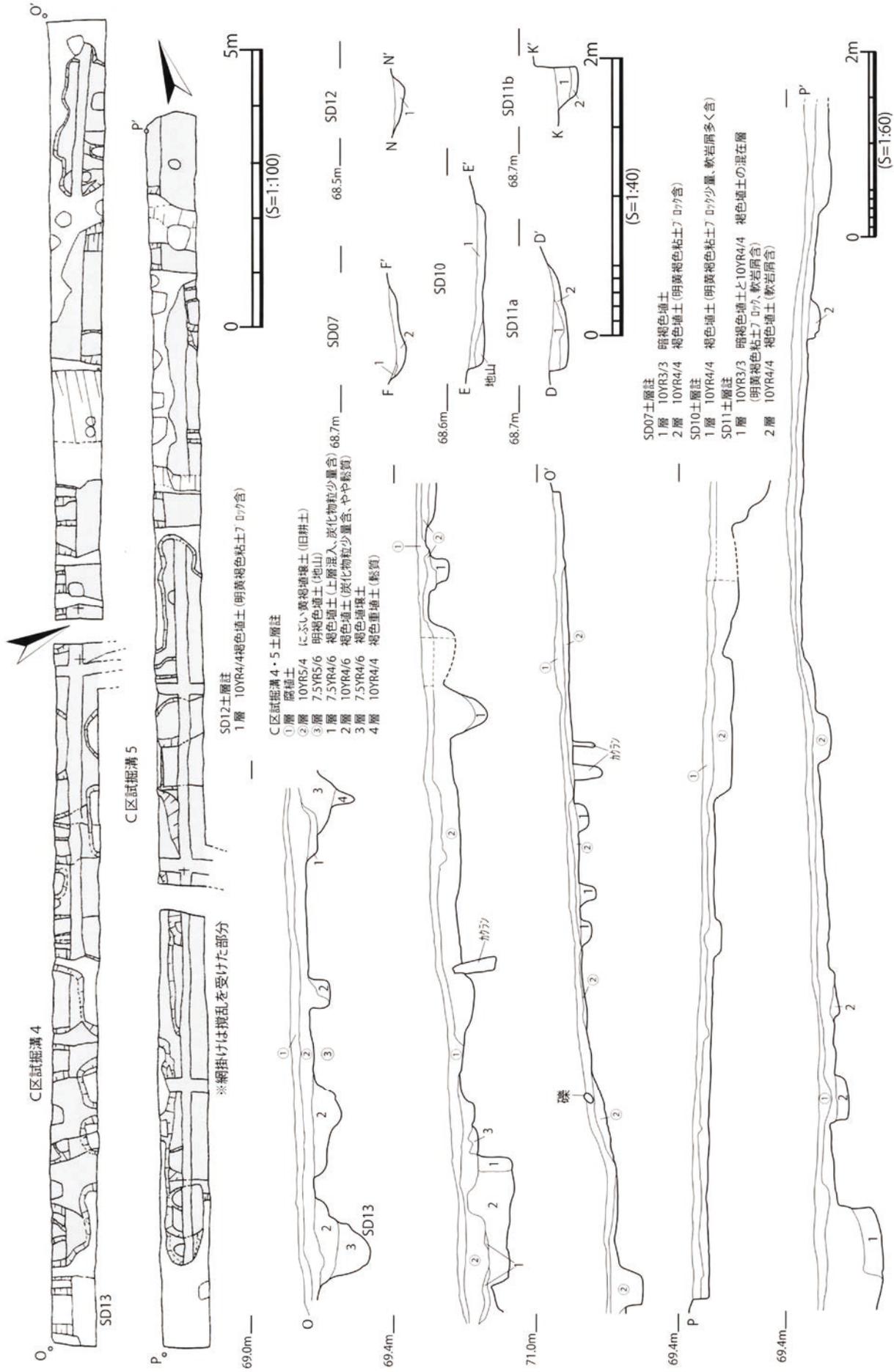


第36図 波佐谷城跡 B区試験溝実測図(断面図)

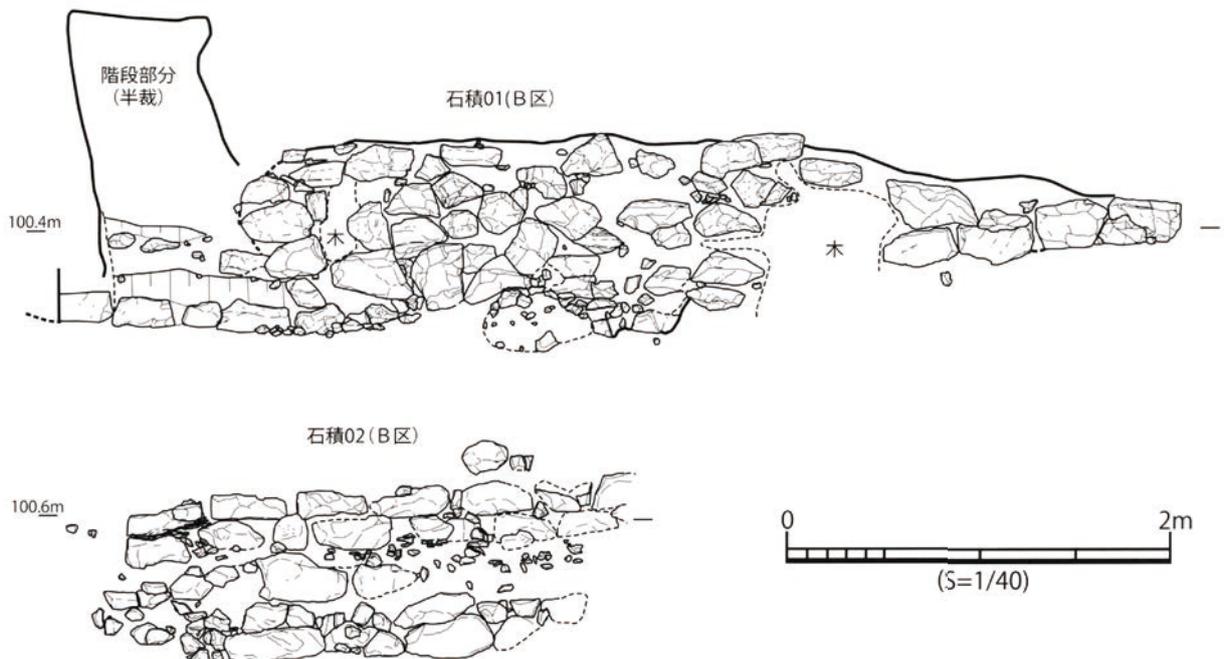
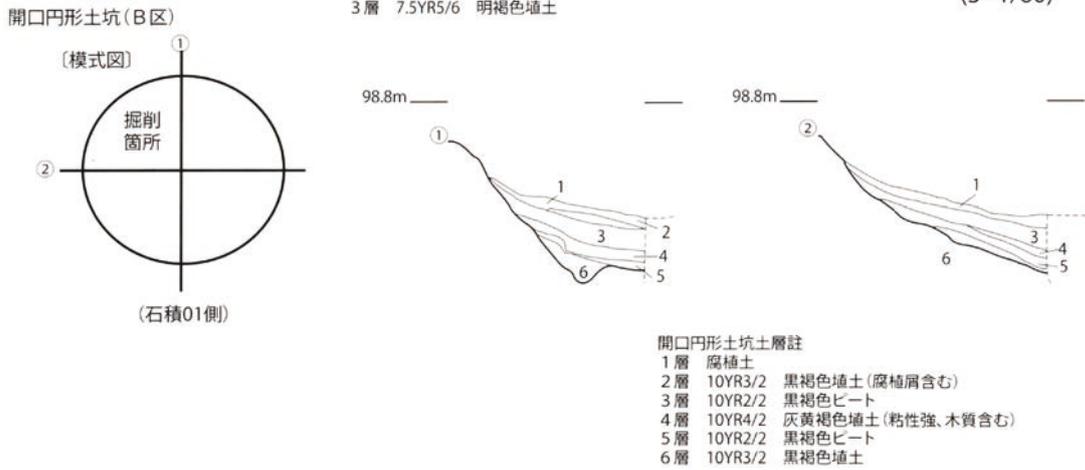
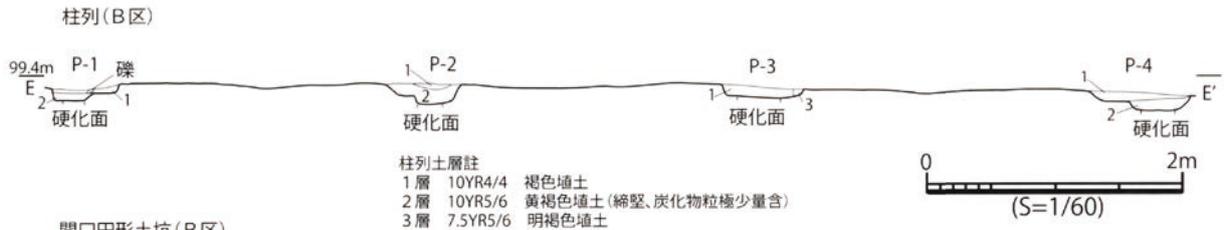
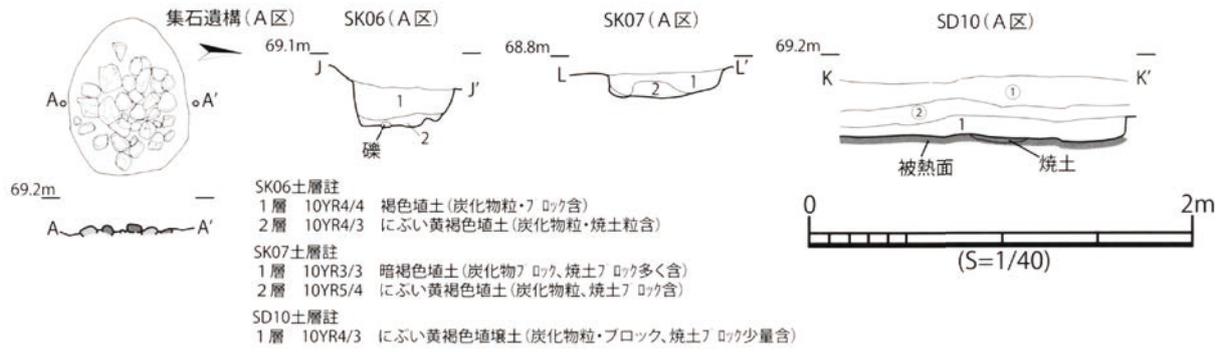
C区試掘溝 1



第37図 波佐谷城跡 C区試掘溝1～3実測図



第38図 波佐谷城跡 C区試掘溝4・5実測図



第39図 波佐谷城跡 遺構実測図1

既に片付けられた状態といえる。掘削が浅く、水がしみ込んでいくことから、井戸とは考え難い。大甕等の溜める器の設置が必要である。

(5) 集石遺構

虎口内面西側の南面土塁裾部から多量の河原石を伴う集石が検出されている。2.5m×3.5mの範囲であり、2～3段は積まれているようである。国庫補助事業のため調査期間が足りず、実測はできなかった。石は約10cm台の河原石が主体を占めている。その性格は分らないが、手で投げるには丁度良い大きさであることから、飛礫として利用したものであろうか。また、鳥越城のように虎口の石垣改修を見越して、栗石を運び込んだものであろうか。また、これと同類の集石がもう1箇所試掘溝1の西端付近で確認されており、持ち込まれた河原石の量が大量であることが推察される。その機能論には、結論をだすことが現時点ではできないが、主郭内に持ち込まれた大量の集石事例として重要であり、類例等があれば御教授頂ければ幸いである。

(6) その他の遺構

波佐谷城域内で、地下式坑5基、中世横穴13基が確認されている。その内、一部は開口している。未調査のため明確な時期は不明だが、築城以前の造営と考えられる。墓或いは入定窟と考えられ、造営主体を禅宗系ならびに真言系寺院に求める意見がある。波佐谷地区にも聖興寺（松岡寺とは異なる）の伝承があり（註1）、今後も検討が必要である。

〔伝松岡寺跡北側平坦面〕

(1) 溝

① SD01

試掘溝1の中央やや南寄りの地点に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅93cm×深さ14cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

② SD02

試掘溝2の東端付近に位置し、試掘溝を直行する溝である。段状に上がる箇所の直下にあり、幅58cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

③ SD05

試掘溝2の中央付近に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅57cm×深さ7cmを測る。極浅いものであり、暗褐色埴土で埋まっている。

④ SD06

試掘溝1の中央付近、SD05の西側に位置し、試掘溝を直行する溝である。2本の溝が切り合った状態である。新しい方が幅52cm×深さ8cm、先行する溝が、残存長幅52cm×深さ10cmを測る。極浅いものであり、暗褐色埴土で埋まっている。

⑤ SD07

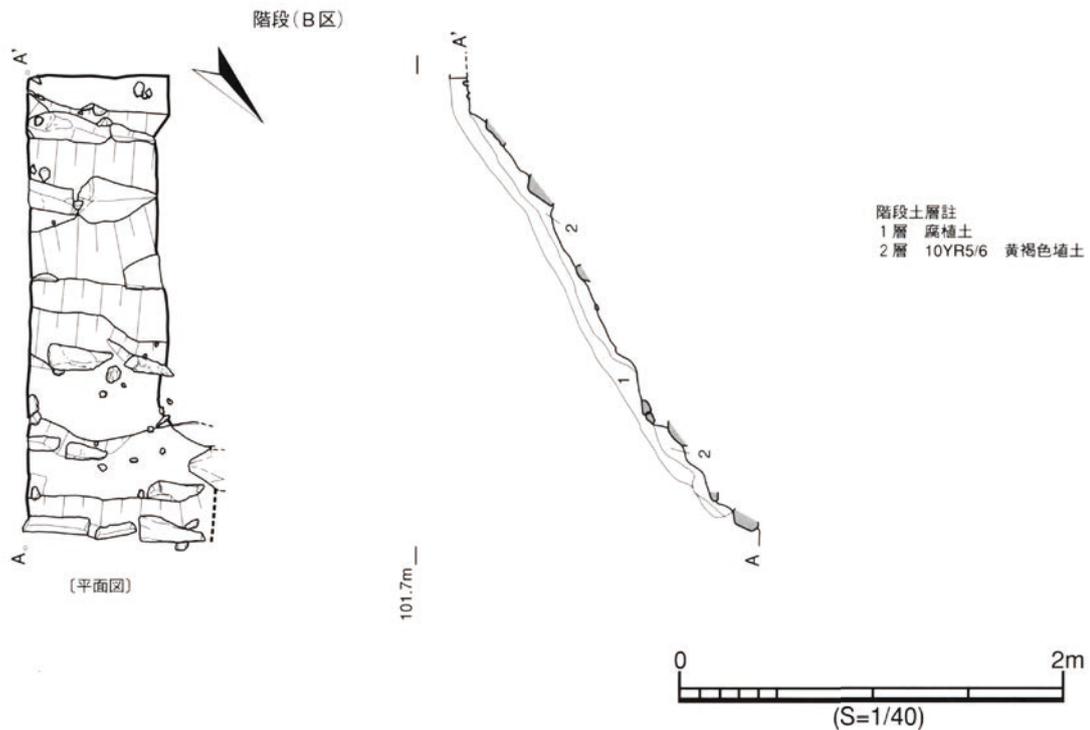
試掘溝1の中央やや西寄りの地点に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅66cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。以上のSD01・02・05・07が相互に関係した溝と判断されるならば、その内部に約4.5m×約8mで面積約36m²の長方形区画がみえる。

⑥ SD10

試掘溝1北側に位置している。溝として遺構番号を振ったが、溝ではないかもしれない。幅約120cmの部分が、約10cm落ち込むものである。埋土は褐色埴土であり、岩盤屑を多く含んでいる。

⑦ SD11

試掘溝1の西端付近に位置しており、試掘溝3に連続している。西側土塁手前の1段高い壇の直下



第40図 波佐谷城跡 遺構実測図2

にあり、L字に曲がっていることが確認されている。長幅77cm×深さ13cmを測り、何らかの区画を表している可能性がある。褐色埴土と暗褐色埴土の混在土で埋まっている。

⑧ SD12

試掘溝3の中央やや北側に位置し、試掘溝を東西方向に斜行する溝である。幅38cm×深さ8cm測る極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

(2) 落ち込み状遺構

① SX01

試掘溝2南端付近より検出しており、幅約210cm×深さ約10cmを測る落ち込みである。埋土に地山粘土ブロックを含んでおり、整地痕跡と考えられる。

② SX02

試掘溝3南端付近より検出しており、幅約540cmに渡って確認されている。深さ6～12cmを測り、不整形なプランである。岩盤屑を多量に含んだ埋土であり、SX01同様整地痕跡と考えられる。

〔伝松岡寺跡南側平坦面〕

南側平坦面は、地元松岡寺の伝承が残る地点である。ただし、後世の攪乱が広範囲に及んでおり、遺構の確認すら困難な状況であった。よって、限定された範囲での調査ではあるが、寺院跡を示すような痕跡は検出されなかった。また、文献にみられる焼失を示す痕跡も確認されなかった。ここでは、攪乱が酷かったことから、立ち割りをして地山土の確認を行っている。よって、地山土とした土層より下位に遺構が存在するということはない。また、断面上において、溝状に掘り込まれた痕跡が確認されたが、SD13に残存している土層などが遺構覆土であった可能性がある。

第 5 節 出土遺物

はじめに

ここでは、城郭に関係すると考えられる遺物のみを報告する。縄文期と考えられる遺物や須恵器片は、攪乱出土であり、小片のみであることから割愛させて頂く。以上を踏まえた上で出土量をみると、圧倒的に西郭からの出土が多い。その中でも特に、北側平坦面からの出土が殆どである。東郭からは、図示した5点のみが出土している。

1. 遺構出土遺物

(1) SK01 出土遺物 (第41図-1)

土師器小皿口縁部破片である。ヨコナデによりやや外傾した立ち上がりとなる。口径は、SK03 出土の類似品を参考に復元したものである。

(2) SK03 出土遺物 (第41図-2~4)

2・3は土師器大皿、4は土師器小皿である。2は、体部が外傾して立ち上がり、口縁端部を上方つまみ上げている。また、体部内面と見込み部の境に凹線状の窪みが施されている。薄手で硬質な特徴を持ち、橙色に発色している。京都系を模倣した在地産である(註2)。3は、2に比べ厚手であり、強いナデにより外反気味に体部が立ちあがる。胎土も異なり、発色もにぶい橙色である。ただし、同様に口縁端部のつまみ上げや見込み凹線も見られるものである。4は、胎土が3と共通しており、体部がやや外反気味に立ちあがる点も共通しているといえる。発色は、浅黄橙色である。時期は、16世紀後半の内、1560年~1580年頃ではないかと考えられる(註3)。

(3) SK04 出土遺物 (第41図-5~7)

5は、瓶子の底部付近の破片とみられる破片である。一見、備前窯とみられるが、胎土から在地窯である作見窯の可能性も考えられるそうである(註4)。いずれにしても、16世紀末~17世紀初頭の所産と考えられる。6は、国産の染付端反碗の破片である。口縁部内面に一条の線が描かれている。7は、鉄製品であり、小刀の一部と考えられる。錆びているが、断面二等辺三角形の身の部分が確認できる。

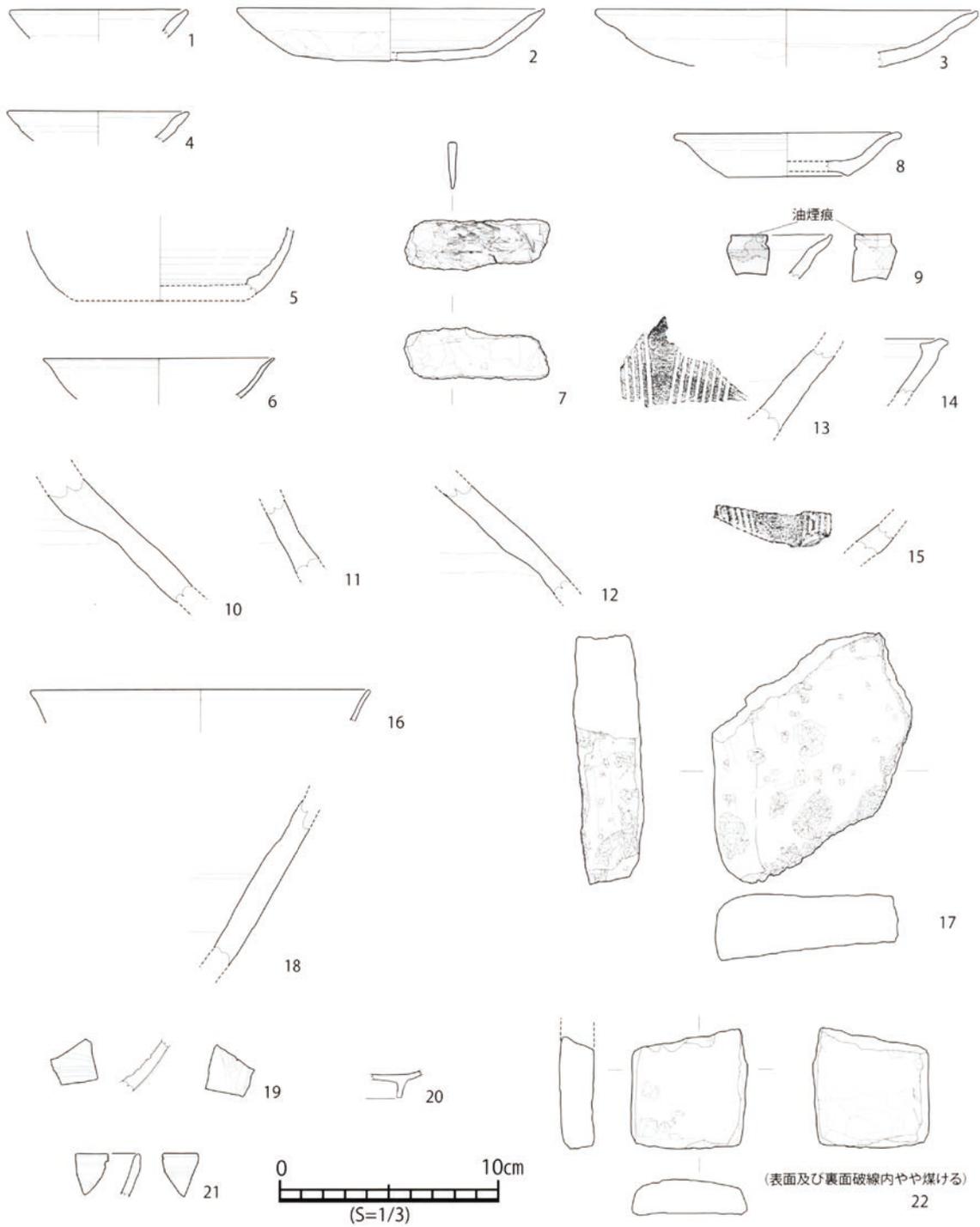
(6) SK05 出土遺物 (第41図-8)

瀬戸大窯期の製品であり、器形と削り出し高台であることから、灰釉稜皿と考えられる。底部と見込みの輪下チが接していた部分は露胎となっている。釉にはやや細かい貫入が入っている。時期は、大窯Ⅱ期後半の器形に近いと思われるが、筆者には断定はできない。

2. 包含層出土遺物

(1) 西郭出土遺物 (第41図-9~17)

9は北側平坦面出土で、土師器大皿の口縁部破片である。3と同様にヨコナデにより外反しており、口縁端部のつまみ上げもみられる。胎土も共通している。ただし、内外面に煤の付着がみられ、灯明皿として使用されていたようである。10~12は加賀窯の甕の破片である。3点とも北側平坦面の出土である。12は他に比べ胎土が精良であり、酸化発色である。他の2点は、還元気味の発色である。10には外面に自然釉が掛っている。13は越前窯の播鉢の破片で、やや焼締めの甘い個体である。南側平坦面の出土であり、卸目の様子から、Ⅳ期後半~Ⅴ期前半(15世紀後半~16世紀前半)のものと同推察されるが、小片であり断定はできない。14・15は北側平坦面出土で、鉄釉播鉢の破片である。産地は特定できないが、瀬戸系の可能性が考えられる。時期も不明だが、近世まで下る可能性がある。16は北側平坦面出土で、中国製の染付碗である。内外面に一条の線が描かれる。17は、砥石で、南側平坦



第41図 波佐谷城跡 出土遺物実測図

面出土である。割れや剥離が激しく判断し難いが、側面と上面を砥面としている。

(2) 東郭出土遺物 (第41図-18~22)

18は越前窯の甕の胴部破片である。東面土塁の直上から出土している。19~21は中国産の磁器であり、全て平坦面からの出土である。19は、青磁碗の破片で内外面に施文されているようである。外面は蓮弁文と考えられ、鎬の表現も施されている可能性がある。20は白磁の底部・高台破片であり、壘

第5表 出土遺物観察表

(単位:cm)

番号	遺構名	種別	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径 (最大幅)	頸部径	見込み高	備考 (口縁部残存率)
1	A区SK01	中世土師器	皿	7.5YR8/3浅黄橙	C精良	中	(8.0)						2と同時期か
2	A区SK03	中世土師器	皿	2.5YR7/8橙	Cやや粗	上	14.0	2.4	9.0			2.0	京都系、1560-1580年頃か。13/36
3	A区SK03	中世土師器	皿	5YR7/4にぶい橙	C良	上	17.2	(2.7)					2と同時期か。3/36
4	A区SK03	中世土師器	皿	7.5YR8/3浅黄橙	C精良	中	8.4						2と同時期か。4/36
5	A区SK04	備前か作見	瓶子	7.5Y4/2灰褐	緻密	上			(7.6)	(12.2)			内面5B4/1暗青灰
6	A区SK04	磁器染付	小碗	N4/ 灰	能美	中	12.6	3.3	8.4			2.6	14/36 II 3
8	A区SK05	瀬戸大窯	棧皿	5Y5/3灰ナリーブ (軸)	密	中	10.3	2.0	5.4			(1.3)	素地2.5Y8/1灰白。大窯II後半?
9	A区試掘溝2下	中世土師器	皿	5YR7/4にぶい橙	C精良	上							灯明痕あり
10	A区試掘溝2	加賀	甕	10YR8/2灰白	密	上							内面5Y2/1黒
11	A区試掘溝2	加賀	甕	5Y4/1灰	密	上							還元色。
12	A区試掘溝2	加賀	甕	5YR3/1暗赤褐	緻密	上							内面5YR4/2灰褐
13	A区試掘溝3	越前	播鉢	5YR5/4橙にぶい赤褐	密	中							IV期後半-V期前半か
14	A区試掘溝2下	瀬戸系?	播鉢	2.5YR3/2暗赤褐 (鉄軸)	緻密	上							素地5Y7/6橙。17世紀前半?
15	A区試掘溝1	瀬戸系?	播鉢	2.5YR3/1暗赤褐 (鉄軸)	粗	F							素地7.5YR8/3浅黄橙
16	A区試掘溝2	磁器染付	碗	7.5B7/1明青灰+白	緻密	上	(15.4)						2/36
18	B区試掘溝1	越前	甕	2.5YR5/3にぶい赤褐	粗	上							内面2.5YR5/1赤褐。土層上面出土
19	B区試掘溝2	青磁	碗	7.5GY6/1緑灰 (軸)	緻密	中							素地2.5Y8/1灰白。外面遮弁文?
20	B区試掘溝2	白磁	皿?	5Y8/1灰白 (軸)	密	上							
21	B区試掘溝1	磁器染付	碗	N8/ 灰白	密	中	(5.25)	5.3	1.3				残存長/最大幅/厚さ。全体に煤ける
22	B区試掘溝2	土師質	土製品?	7.5YR7/4にぶい橙	やや粗	中							底部残存率1/2 III 2新?

註 1 土師器の胎土は、粘土ベースをC (Clay) で表し、精良・良・やや粗・粗の4段階に分類している。陶磁器の素地は、緻密・密・やや粗・粗の4段階に分類している。
 2 焼成は、焼き締まりの良いものを上として、以下中・下の3段階で判定している。色調は、原則外面を記入。内面等異なる場合は、備考欄に記入。
 3 () 内の数値は還元値である。

第6表 出土遺物観察表2

番号	遺構名	種別	器種	表面色調	寸法 (cm)	重量 (g)	備考
7	A区SK04	鉄製品	小刀	7.5YR7/4にぶい橙	残存長6.7/幅2.2/厚さ0.4	14.7	
17	A区試掘溝3	石器	砥石	7.5YR5/2灰褐	残存長11.45/残存幅8.4/残存厚3.0	418.5	安山岩

付から高台内面端部にかけて露胎である。釉調はあまり良くない。21は染付碗口縁部破片であり、口縁部外面には二条の接した線が描かれ、内面には離れた二条の線が描かれている。内外面とも線より下位にも文様が施されている。20・21は15世紀～16世紀代という大雑把な時期ではあるが、ある程度郭の時期を反映しているといえよう。19は釉調と鎬の表現がある可能性があることから、20・21より時期が上がる可能性がある。22はかまぼこ状の土製品である。土師質であり、やや煤けた感がある。時期等は全く不明である。

第6節 小結

1. 出土遺物について

今回の調査において、図示はしていないが、縄文時代後期の土器片2点と須恵器片2点が出土している。これらは、伝波佐谷松岡寺推定地の調査区から出土しており、当該時期の土地利用の痕跡を示すものであろう。具体的な遺構は検出されていないため、その様相は不明瞭である。縄文時代の土器片は、例えば五国寺町地内の松谷寺跡の調査でも出土しており、比較的平地に近い低丘陵部の調査において出土する傾向にある。古代須恵器については、中世以降の遺跡が所在する箇所でも出土する傾向にある。特に、原町に所在し「三坂越」沿いに位置する岩倉城跡からは、遊歩道を設置する際に、まとまった量の須恵器片が出土しており、立地からみて古代山林寺院などが存在した可能性が考えられる。当遺跡についても、その可能性を考慮に入れる必要がある。また、谷を挟んだ西側の丘陵部には製鉄遺跡が所在しており、その関連も視野に入れる必要があろう。

次に、中世以降と考えられる土器・陶磁器を集計すると、土師器皿8点、加賀窯5点、越前窯3点、瀬戸大窯1点、作見か備前窯1点、産地不明陶器2点、輸入白磁1点、輸入青磁1点、輸入染付2点、近世以降国産磁器2点となる。その内、一向一揆の城郭が造営された時期より前の年代を示す遺物としては、加賀窯の甕の破片が挙げられる。生産年代からみれば、15世紀より前であり、13～14世紀代に何らかの造作を行っている可能性も考えられる。しかし、発見されたのは甕片のみであり、伝世し

たものを使用した可能性も否定はできない。ただし、鎌倉時代の遺物は、金沢市の堅田城で13世紀前半の土師器皿や、能美市（旧辰口町）の虚空蔵山城では同じく加賀窯の製品が出土している。史料には、長谷までが軽海郷だという記述があり、近接している当地が全くの未開の地であったとは考えにくい。吉崎御坊や山科本願寺の例をみれば、その誘致には当該地の荘園領主層や地元の有力者層が関与しているとのことである。また、波佐谷町鎮守の磯前神社に白山宮が合祀されていることから、白山信仰が当地にも先行して浸透していた可能性は高い。また、地下式坑・横穴の存在からも何らかの先行集団が当遺跡内で造作を行っていても問題はないと考える。

波佐谷城が一揆の城郭として機能していたと考えられる時期の遺物は、越前窯の播鉢、瀬戸大窯製品、京都系土師器皿や灯明痕のある在地系土師器皿が出土している。特に、土師器皿は1560年～1580年頃とされ、まさに織田信長勢が加賀に侵攻した時期に該当する可能性が高く、波佐谷城がその戦いの時期に使用されていたことが証明されたことは大きな成果といえよう。

また、16世紀末～17世紀初頭と落城後の年代を示す遺物として、備前窯（作見窯？）の破片が出土している。天正8年（1580）に陥落した後に、小松城を居城とした村上頼勝の一族である村上勝左衛門が同11年に配されたとの伝が近世史料にあり、頼勝が越後転封となる慶長3年（1598）まで存続したと考えられている。ただし、20年弱の在城としては、遺物の出土量が少なすぎる。また、出土したSK04は、土坑というより造成痕とみられ、片付け跡の可能性もあり、在城したとみれば、廃城となる時点で片付けが行われた可能性が高い。しかし、虎口など構造の面でも織豊系城郭に改修された痕跡は認められず、数点だけの遺物では在城したとは断定することはできない。これらの遺物は、全て西郭から出土したものである点に注意しなければならない。東郭からは、越前窯甕の胴部破片及び磁器類細片が3点出土したのみで、15世紀～16世紀という大雑把な時期の把握までで、特定できる遺物は出土しなかった。伝松岡寺跡からは、中世の遺物は出土していない。

2. 郭の構造について

第3節でみた検討課題である両曲輪の構造上の違いについては、遺物の出土様相の違いから、西曲輪は居住性のある程度考慮したもの、東曲輪は純然たる軍事施設という性格の違いも考慮する必要がある（註5）。確かに郭の表面積からも、2倍以上広い西曲輪には建物が建つ十分なスペースがある。また、東郭が広さを犠牲にして三角形という防御しなければならない面を減らす構造であることから、いよいよという時に籠城するための郭とみて、機能差と説明することもできる。ただし、多くの先学が示すように、郭の連絡性が乏しく、独立性が強いという指摘的をえている。両曲輪間の谷部を押さえられると簡単に分断され、孤立してしまう点は一目瞭然である。能美市虚空蔵山城跡など、独立性の高い郭配置をとる城郭は他の一揆の城郭にもみられるが、これを一揆の組織内の内部対立の縄張りへの影響とみる解釈については、慎重を期さなければならない。組織内の合議で意思決定していた一揆勢にとって、城郭の縄張りに内部抗争を反映させる意味を説明せねばならないだろう。また、一揆勢は斉一性の強い縄張りを採用しているわけではない点も挙げられ、「拠点寺院」、「郡」、「組」、「講」などの組織と城の関係性を考察する必要がある（註6）。加えて、有力門徒武士どうしの抗争もあった点を考えれば、国人・土豪の城というものは存在しなかったのかどうかを検討する必要もある。林超勝寺推定地の調査において、寺院背後の山に城郭らしき遺構が存在することも確認されている。その点においては従来の指摘どおり、まず単郭の城郭として西郭があり、信長勢との緊張状態が増した時期に東郭が整備されたという解釈も成り立つ。古い時期の遺物（加賀窯）が出土している点や、両郭間にある緩斜面の造作が簡素であることからいえるのかもしれない。同じく加賀窯の出土している虚空蔵山城跡においても、二の丸には2時期以上の利用時期があり類例となる可能性がある。し

かし、最終形態を残している城郭において、郭の造成過程にみられるこれらの課題の解明にはどのような調査方法が有効なのだろうか。今後の課題である。

次に石積（裏込めの有無を調べていないためここでは石積と呼称する。以下同）の造営主体について考えてみたい。落城後に織豊系の勢力が拠った記録がなく、同様に石積の使用が認められる能美市虎空蔵山城跡と比較を行うことで、検討するものとする。石積は大手及び大手に至る通路や二の丸においてみられる。ここでは、報告書の記述が詳しい二の丸虎口東側土塁外面のものを対象とする。これは、郭外周を囲む横堀（薬研堀）の郭側で、隣接する土塁の外面に検出されたものである。径30～60cmの石材を幅6.5m、高さ1mに積んだものである。基本的には基底部には50cm台の石材が使用され、上位部に30～40cmの石材が使用されている。概ね4段の段数を確認することができ、西方向へ基底部のレベルが上がるにつれて段数を減じている。野面・乱積みといえ、波佐谷城跡の石積01と積み方や形状及び規模が類似している。土塁の内面と外面という差異が存在するが、現地で採取される凝灰岩を使用している点や、土留めを主目的としている点など共通項も多い。よって、これらの石積みに関しては、一向一揆勢が構築したものと評価するものである。現在では、山科本願寺跡の発達した縄張りは、焼失する天文元年（1532）段階で成立していたという見解が主である（註7）。その調査において、石垣が検出されている。残存高で高さ約50cmだが4～5段積みであり、基底部には50cm台の石材を使用し、上位にはそれより小ぶりな石材を使用している。野面・乱積みであり、類似性が認識できる。ただし、山科本願寺跡のものは、砂礫土による裏込めが確認されている。波佐谷城や虎空蔵山城跡では、裏込めの確認作業を行っていないため、不確定な要素を残すが、このような石垣が、すでに山科本願寺段階で確認されていることはいえる。よって、波佐谷城跡や虎空蔵山城跡に石積が採用されていても問題はないと考える。さらに、柵形虎口化した鳥越城とは大きく異なる点も傍証といえよう。波佐谷城跡の石積みに関しては、腐葉土の堆積により地表面の観察では全く分らなかったものである。その発見は、偶然によるものであり、発掘調査のしていない他の城郭においても今後発見され類例が増える可能性はあると考えている。

なお、東郭集石遺構をどう解釈するかという課題も存在している。「飛礫」とみるのであれば、ほとんど使用されずに落城後放置されたことになる。一方で、「改修のための裏込め用栗石」とみるのであれば、これも結局改修せずに捨て置かれたものとなる。当然、他の解釈も存在する可能性があり、類例を待って評価するものとしたい。

波佐谷城跡は、地下式坑・中世横穴の造営から一家衆寺院である波佐谷松岡寺を経て波佐谷城へと変遷していくという特別な歴史をもつ。小松の歴史を語る上で、その遺跡群の価値は非常に高いといえ、今後も適切に保存・活用していく必要があるといえる。

註

- (1) 宮下幸夫2007年「北陸の地下式坑について」『地下式坑を考える－地下式坑の全国集成とその検討』第3回東国中世考古学研究会大会資料集
- (2) 滝川重徳氏教示
- (3) 同上
- (4) 宮下幸夫氏教示
- (5) 田村昌宏氏教示
- (6) 谷内尾晋司2006年「加賀Ⅱ地区城館跡の概要」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅲ（加賀Ⅱ）』石川県教育委員会

(7) 山科本願寺・寺内町研究会編1998年『戦国の寺・城・町ー山科本願寺と寺内町ー』法蔵館

引用参考文献

北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸ー考古学が語る社会史』 桂書房

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター2001年『瀬戸大窯とその時代』

日本貿易陶磁研究会1982年『貿易陶磁研究2』

浅香年木1993年「加賀国」『講座 日本荘園史6』 吉川弘文館

上田秀夫1982年「14世紀～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会

山本信夫1995年「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
真陽社

石川県教育委員会2007年『石川県中世城館調査報告書Ⅲ（加賀Ⅱ）』

石川県金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004年『市内城館調査報告書』

石川県金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006年『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

辰口町教育委員会1988年『辰口町虚空蔵山城跡』

石川県小松市2002年『新修小松市史』資料編4 国府と荘園



SI18、SK603、SK604、SK605、SJ601の状況



SK603 (左)とSJ601 (右)の状況



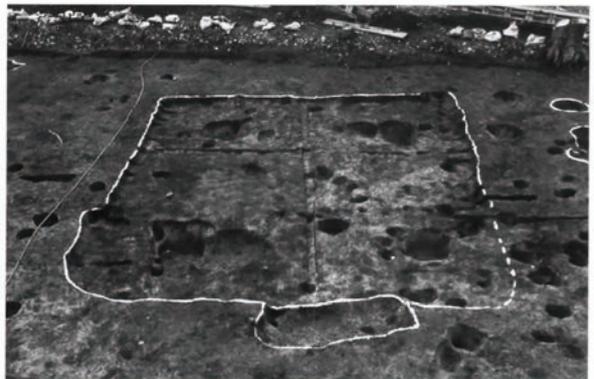
完掘状況(調査区南側)



完掘状況(調査区中央)



完掘状況(調査区北側)



SI21完掘状況



SI19完掘状況



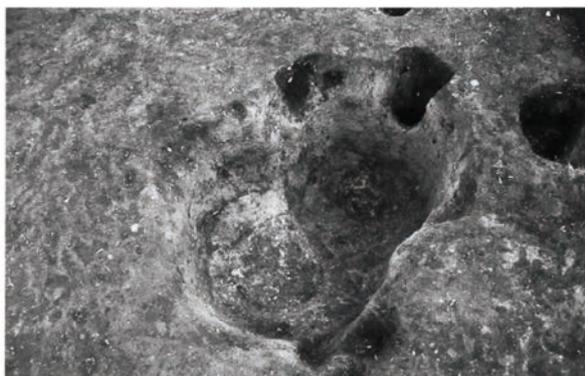
SI19土層と調査区土層断面



SI18・SK603・SJ601 アゼ位置



S K 603 土層断面



SB38 P1内部状況



S120 1次完掘状況



S120 壁周溝の状況



S120
壁周溝内ピット
検出状況



S118出土遺物(土師器)



S118出土遺物(須恵器)



SK603出土遺物



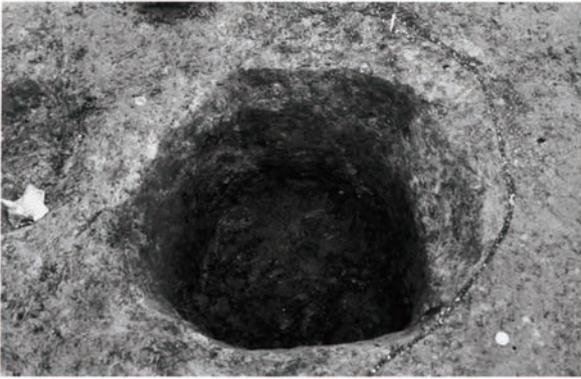
S118周辺から
出土した焼成
粘土塊と
焼け弾き品



発掘調査風景



SD03 遺物出土状況



SE01 (SK01)



完掘状況



6



9

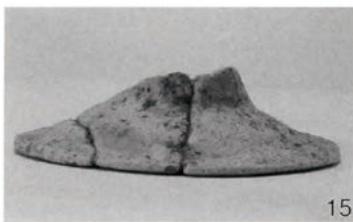


10

須恵器

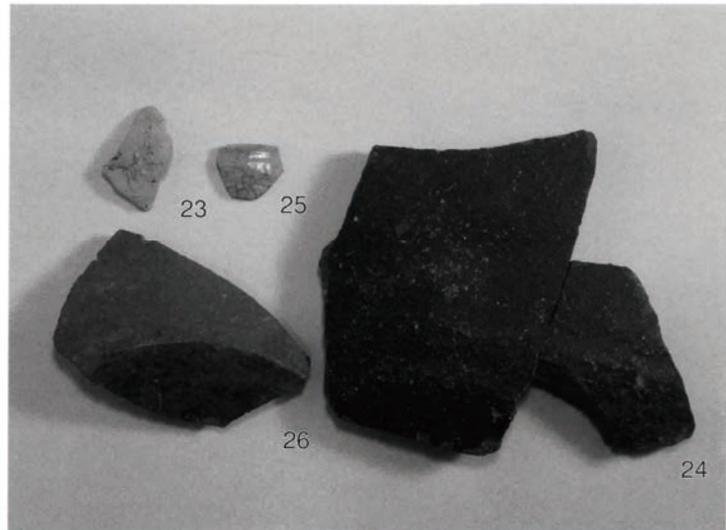


14



15

土師器



24

中世土器・陶器・磁器



A区試掘溝1 SK01



A区試掘溝1 石列



A区試掘溝3 集石遺構



A区試掘溝3 掘削状況



B区 集石遺構



B区 階段と石積01



B区 石積02



B区 階段検出状況



B区 石積01遠景



B区 石積01近景



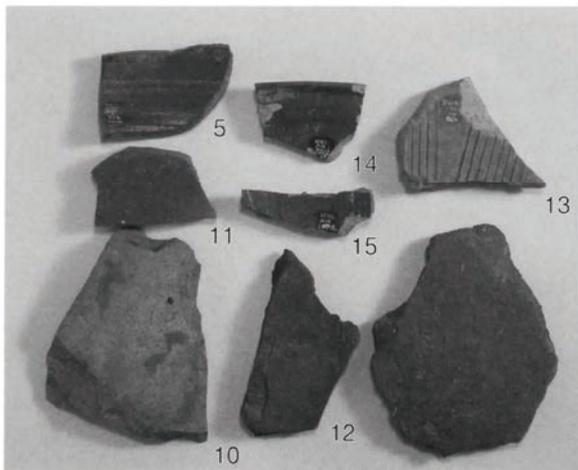
土師器皿



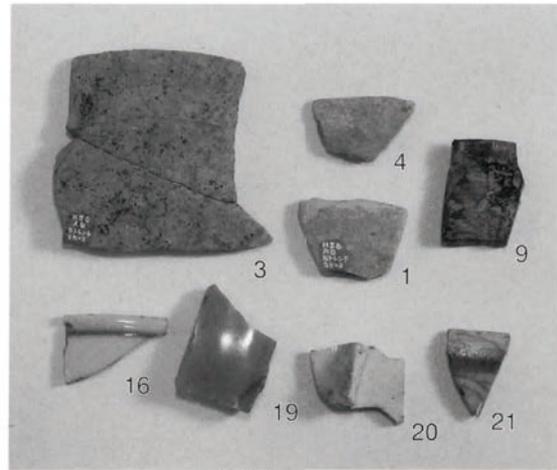
中世陶器



鉄製品



中世・近世陶器



中世土器・磁器

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはくつちようさほうこくしょ5							
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書V							
副書名	矢田野遺跡・千代オオキダ遺跡・波佐谷城跡							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	川畑謙二・大橋由美子							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL0761-22-4111							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
やたのいせき 矢田野遺跡	いしかわけんこまつしやたのまち 石川県小松市矢田野町	17203	03104	36° 20′ 57″	136° 25′ 3″	2005.10.4～ 2006.1.17	594.16	工場建設 (零細事業者)
せんだい 千代オオキダ いせき 遺跡	いしかわけんこまつしせんだいまち 石川県小松市千代町	17203	03165	36° 24′ 41″	136° 29′ 37″	2006.11.9～ 2006.11.13	69	個人住宅 建設
はさたにじょうあと 波佐谷城跡	いしかわけんこまつしはさだにまち 石川県小松市波佐谷町	17203	03214	36° 29′ 00″	136° 28′ 20″	2002.12.20～ 2003.3.24、 2003.10.20～ 2004.3.26	約70,000	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢田野遺跡	集落跡	飛鳥・奈良	竪穴建物4、掘立柱建物9、土師器焼成坑1、大型炉状遺構1、土坑5		土師器(焼け損じ品含む)、須恵器、焼成粘土塊			
要約	飛鳥～奈良時代初頭の集落跡が確認された。良好な建物群とともに飛鳥時代後半の土師器焼成坑が検出され、月津台地集落の性格をまた一つ裏付ける成果を得た。							
千代オオキダ遺跡	集落跡	奈良～平安	掘立柱建物跡1、土坑3、溝3		須恵器、土師器			
	集落跡	中世	井戸2、土坑1		土師器皿、加賀			
要約	奈良～平安時代と中世の集落跡が確認された。古代は、少なくとも3つの時期が認められ、ほぼ同じレベルに複合した状態で検出されている。							
波佐谷城跡	散布地	縄文後期			縄文土器、剥片?		伝松岡寺跡出土	
	散布地	古代			須恵器		伝松岡寺跡出土	
	山城	中世	土坑8、溝22、石積2、階段1、集積遺構2		土師器皿、中世陶器(加賀、越前、瀬戸大窯)、輸入陶磁器(青磁・白磁・染付)		伝松岡寺跡については中世遺物の出土なく、不明。	
要約	地形測量調査及び試掘溝調査を実施。一向一揆の時期の遺構と遺物を確認。また、それ以前の遺物と、以後の遺構と遺物を確認しており、一向一揆城郭の性格を検討する上での貴重な成果が得られた。							

小松市内遺跡発掘調査報告書 V

矢田野遺跡・千代オオキダ遺跡・波佐谷城跡

平成21年3月31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会

石川県小松市小馬出町91 TEL (0761) 24-8132

印刷 (株)ゲンダ美術印刷